

# 南曾我遺跡

—平成 20 年度発掘調査報告書—

2012

財団法人元興寺文化財研究所



# 南曾我遺跡

—平成 20 年度発掘調査報告書—

2012

財団法人元興寺文化財研究所







## 序

2011年という年は、日本という国にとって大変辛くて悲しい年でありました。東日本大震災の起こった3月11日は、これからも永く日本の、いや、世界の人々にとって忘れられない日として記憶されてゆくでしょう。

しかし、個人としては拭い去ることのできない記憶であっても、文明レベルで見ると忘却は一瞬です。今をさかのぼる1,000年前にあたる貞観11年(869)5月26日に、東北地方を襲った巨大地震と津波の記憶はその後人々の意識から失われ、今回の震災で改めて注目されたことは報道のとおりです。1,000年の記憶は個人では保持できず、「歴史」という枠組みの中で扱うことで、人類という「種の記憶」を維持することができるのではないのでしょうか。しかし、その際誤った「歴史」の枠組みを作ってしまうと、人類社会に誤った「記憶」を植え付けることになってしまいます。より正しい歴史は、より実証的な調査研究の中から生まれてくるのです。このたび発掘調査を行いました「南曾我遺跡」では多数の溝、土坑、墓、建物、井戸などが見つかり、たくさんの遺物も出土しました。こうした遺構・遺物は、より正しい人類の記憶を引き継いでゆくための重要な資料であり、小さな土器のカケラや何気ない柱穴の一つ一つがクロニクル(年代記)であります。こうした断片をつないでゆく調査を進めてゆくことで、人類の記憶を次の世代へと引き継いでゆきたいものです。

最後になりましたが、株式会社グランドコーポレーション様、株式会社アーク様には、発掘調査から報告書作成に至るあらゆる面でご協力をいただきました。末筆になりましたが、謝意を表したいと思います。

平成24年3月  
財団法人元興寺文化財研究所  
理事長 辻村 泰 善

## 例言

1. 本書は、南曾我遺跡における発掘調査の成果を纏めたものである。
2. 本書記載対象遺跡の調査原因は、トステムビバ株式会社による商業施設の建設である。
3. 調査地は奈良県橿原市曾我町 26-1 番地ほかに所在し、開発対象面積 37,220.66㎡のうち発掘調査対象面積は 6,800㎡である。
4. 現地調査は奈良県教育委員会から依頼を受けた㈱元興寺文化財研究所が、平成 20 年 6 月 16 日～平成 20 年 12 月 1 日まで現地の作業を実施し、佐藤亜聖・村田裕介が担当した。整理作業については現地調査終了後、事業者側の都合によりすみやかに着手することが出来なかったため、平成 23 年度をそれに充当した。
5. 現地調査にかかる費用は株式会社グランドコーポレーション、整理・報告書作成にかかる費用は株式会社アークがそれぞれ負担した。
6. 現地の実測および写真撮影は佐藤・村田のほか、角南聡一郎・坂本亮太（㈱元興寺文化財研究所）が行い、武田浩子・奥田智代（㈱元興寺文化財研究所）、大向智子（関西大学）・川端靖子（奈良教育大学）・篠原奈都美（京都女子大学）・平見裕子（立命館大学）・三根恵梨香（大阪大谷大学）がこれを補佐した。出土遺物の実測および浄書は村田・佐藤・武田・仲井光代（㈱元興寺文化財研究所）が行い、乾早希子・芝幹（㈱元興寺文化財研究所）が補佐した。遺物写真は久久保治（㈱元興寺文化財研究所）が撮影した。（所収は全て当時）
7. 本書で示す方位は座標北を使用した。座標は世界測地系を使用し、国土座標第Ⅵ系を使用した。水準は T.P. である。
8. 本書で使用した土色名は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）に準拠した。
9. 本書の執筆は村田・佐藤が担当した。
10. 本書の編集は村田が行った。
11. 現地調査及び本書の作成においては下記の方々のご指導、ご協力をいただいた（五十音順、敬称略）。  
青木香津江 小栗明彦 鈴木裕明 豊岡卓之 水野敏典 宮原晋一（奈良県教育委員会） 齊藤明彦 濱口和弘 露口真広（橿原市教育委員会） 松井章（㈱奈良文化財研究所）

## 目次

第1章 調査に至る経緯と調査体制	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	1
第2章 周辺における既往の調査と課題	2
第3章 調査の成果	4
第1節 調査区の配置と基本層序・遺構面の認定	4
第2節 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構・遺物	9
(1) 遺構	9
(2) 遺物	19
第3節 古墳時代中期から古墳時代後期の遺構・遺物	30
(1) 遺構	30
(2) 遺物	38
第4節 古代の遺構・遺物	46
(1) 遺構	46
(2) 遺物	48
第5節 中世の遺構・遺物	51
(1) 遺構	51
(2) 遺物	54
第6節 包含層出土の遺物	56
第4章 総括	57

## 挿図目次

図1 調査区の位置と周辺の遺跡 (S=1/25,000)	2
図2 壁面土層図 (1) (S=1/40)	4
図3 壁面土層図 (2) (S=1/40)	5
図4 壁面土層図 (3) (S=1/40)	6
図5 検出遺構全体図 (S=1/400)	7・8
図6 SZ30・35 平面・土層断面図 (平面 S=1/100 土層断面 S=1/40)	9
図7 SZ40 平面・土層断面図 (平面 S=1/100 土層断面 S=1/40)	10
図8 SZ50 平面・土層断面図 (平面 S=1/100 出土状況・土層断面 S=1/40)	11
図9 SI10 平面・土層断面図 (S=1/80)	12
図10 SE105 平面・土層断面図 (S=1/40)	12
図11 弥生時代後期～古墳時代前期溝平面図 (S=1/400)	13
図12 弥生時代後期～古墳時代前期溝土層断面図 (1) (S=1/40)	14
図13 弥生時代後期～古墳時代前期溝土層断面図 (2) (S=1/40)	15
図14 SD20 遺物出土状況図 (S=1/40)	16
図15 SD215 平面・土層断面図 (平面 S=1/100 土層断面 S=1/40)	18

図 16	SK13 平面・土層断面図 (S=1/40)	18
図 17	SZ40・50 出土遺物実測図 (S=1/3)	19
図 18	SI10 出土遺物実測図 (S=1/3)	20
図 19	SD8・9・37・75・215 出土遺物実測図 (S=1/3・2/3)	21
図 20	SD20 出土遺物実測図 (1) (S=1/3)	22
図 21	SD20 出土遺物実測図 (2) (S=1/3)	24
図 22	SD20 出土遺物実測図 (3) (S=1/3)	26
図 23	SD20 出土遺物実測図 (4) (S=1/3)	28
図 24	SK13 出土遺物実測図 (S=2/3)	30
図 25	SZ55 平面・土層断面図 (平面 S=1/100 土層断面 S=1/40)	31
図 26	SZ100 平面・土層断面図 (平面 S=1/100 土層断面 S=1/40)	32
図 27	SB23 平面・土層断面図 (平面 S=1/80 土層断面 S=1/40)	33
図 28	SB24 平面・土層断面図 (平面 S=1/80 土層断面 S=1/40)	34
図 29	SD11 平面図 (S=1/80)	34
図 30	古墳時代中期～後期溝平面図 (S=1/400)	35
図 31	古墳時代中期～後期溝土層断面図 (S=1/40)	36
図 32	SK26 平面・土層断面図 (S=1/40)	37
図 33	SK65 平面・土層断面図 (S=1/40)	37
図 34	SK120 平面・土層断面図 (平面 S=1/20 土層断面 S=1/40)	38
図 35	SK120 馬の埋葬復元図	38
図 36	SZ55 出土遺物実測図 (1) (S=1/3)	39
図 37	SZ55 出土遺物実測図 (2) (S=1/3)	40
図 38	SZ100 出土遺物実測図 (S=1/3)	41
図 39	SD12・15・28・29・38・230 出土遺物実測図 (S=1/3)	42
図 40	SK26 出土遺物実測図 (S=1/3)	44
図 41	SK65 出土遺物実測図 (S=1/3・1/6)	45
図 42	SB22 平面・土層断面図 (平面 S=1/80 土層断面 S=1/40)	46
図 43	SE45 平面・土層断面図 (S=1/20)	46
図 44	SE70 平面・土層断面図 (S=1/40)	47
図 45	SE45 出土遺物実測図 (S=1/3)	48
図 46	SE70 出土遺物実測図 (S=1/3・1/6)	49
図 47	SB80 平面・土層断面図 (平面 S=1/80 土層断面 S=1/40)	51
図 48	SB81 平面・土層断面図 (平面 S=1/80 土層断面 S=1/40)	51
図 49	SB110 平面・土層断面図 (平面 S=1/80 土層断面 S=1/40)	52
図 50	SA115・125 平面・土層断面図 (平面 S=1/80 土層断面 S=1/40)	53
図 51	SX25 平面・土層断面図 (平面 S=1/80 土層断面 S=1/40)	53
図 52	SX25 出土遺物実測図 (S=1/3)	54
図 53	素掘小溝出土遺物実測図 (S=1/3・2/3)	55
図 54	包含層出土遺物実測図 (S=1/3・2/3)	56
図 55	橿原市西曾我遺跡検出の素掘小溝 (S=1/1,000)	58

図 56	福原市新堂遺跡検出の素掘小溝 (S=1/1,000)	58
図 57	大和郡山市中付田遺跡における間田モデル (山川 1998 を一部改変)	58
図 58	検出遺構略図・遺構仮番号配置図	65

## 表目次

表 1	報告遺物一覧 (1)	66
表 2	報告遺物一覧 (2)	67
表 3	報告遺物一覧 (3)	68
表 4	報告遺物一覧 (4)	69
表 5	報告遺物一覧 (5)	70
表 6	報告遺物一覧 (6)	71
表 7	検出遺構および出土遺物一覧 (1)	72
表 8	検出遺構および出土遺物一覧 (2)	73
表 9	検出遺構および出土遺物一覧 (3)	74
表 10	検出遺構および出土遺物一覧 (4)	75
表 11	検出遺構および出土遺物一覧 (5)	76
表 12	検出遺構および出土遺物一覧 (6)	77
表 13	検出遺構および出土遺物一覧 (7)	78

## 写真図版目次

図版 1	調査区全景 (上が北)	
図版 2	上段: 調査区南東部全景 (北から)	下段: SZ30・SZ35・SZ40 全景 (南から)
図版 3	上段: SZ30 北溝土層断面 (西から)	下段: SZ35 北溝土層断面 (東から)
図版 4	上段: SZ40 南溝土層断面 (東から)	下段: SZ50・SB23・SB24 全景 (北東から)
図版 5	上段: SZ50 東溝土層断面 (南から)	下段: SZ50 南溝土層断面 (東から)
図版 6	上段: SZ50 北溝土層断面 (東から)	下段: SZ50 遺物出土状況 (南から)
図版 7	上段: SI10 柱穴・壁溝完脚状況 (南から)	下段: SI10 貼床土層断面 (南から)
図版 8	上段: SE105 土層断面 (北東から)	下段: SD8 セク A 土層断面 (北から)
図版 9	上段: SD8 セク B 土層断面 (南から)	下段: SD9 セク A 土層断面 (北から)
図版 10	上段: SD9・SD37 土層断面 (南から)	下段: SD20 セク B 土層断面 (北東から)
図版 11	上段: SD20 セク C 土層断面 (南西から)	下段: SD20 遺物出土状況 (南から)
図版 12	上段: SD37 セク C 土層断面 (南から)	下段: SD37 セク D 土層断面 (南から)
図版 13	上段: SD75 土層断面 (南から)	下段: SD130 土層断面 (南東から)
図版 14	上段: SD150 土層断面 (南西から)	下段: SD215 土層断面 (南から)
図版 15	上段: SK13 土層断面 (北から)	下段: SZ55 全景 (北東から)
図版 16	上段: SZ55 土層断面 (南西から)	下段: SZ55 遺物出土状況 (北東から)
図版 17	上段: SZ100 全景 (西から)	下段: SZ100 土層断面 (南東から)
図版 18	上段: SZ100 土層断面 (南西から)	下段: SD11 畦畔状の高まり (南から)

図版 19	上段：SD12 土層断面（南から）	下段：SD15 土層断面（北から）
図版 20	上段：SD38 土層断面（南から）	下段：SK26 土層断面（東から）
図版 21	上段：SK65 土層断面（西から）	下段：SK65 遺物出土状況（南から）
図版 22	上段：SK120 土層断面（南から）	下段：SK120 完掘状況（南から）
図版 23	上段：SK120 馬歯検出状況（南から）	下段：SB22 全景（西から）
図版 24	上段：SE45 土層断面（北から）	下段：SE45 遺物出土状況（北から）
図版 25	上段：SE70 土層断面（北から）	下段：SE70 枠内完掘状況（北から）
図版 26	上段：SE70 底部礫層断面（北から）	下段：SE70 井戸枠検出状況（北から）
図版 27	上段：SE70 上層遺物出土状況（北から）	下段：SE70 下層遺物出土状況（北から）
図版 28	上段：SB80 全景（東から）	下段：SB81 全景（南から）
図版 29	上段：SA125 全景（南から）	下段：SX25 土層断面（東から）
図版 30	SZ40・50 出土遺物	
図版 31	SZ50、S110、SD8 出土遺物	
図版 32	SD8・9 出土遺物	
図版 33	SD37・75・215 出土遺物	
図版 34	SD215 出土遺物	
図版 35	SD215・20 出土遺物	
図版 36	SD20 出土遺物	
図版 37	SD20 出土遺物	
図版 38	SD20 出土遺物	
図版 39	SD20 出土遺物	
図版 40	SD20 出土遺物	
図版 41	SD20 出土遺物	
図版 42	SD20、SK13、SZ55 出土遺物	
図版 43	SZ55 出土遺物	
図版 44	SZ55・100 出土遺物	
図版 45	SZ100、SD12 出土遺物	
図版 46	SD15・28・29・38 出土遺物	
図版 47	SD230、SK26・65 出土遺物	
図版 48	SK65、SE45 出土遺物	
図版 49	SE45・70 出土遺物	
図版 50	SE70 出土遺物	
図版 51	SE70 出土遺物	
図版 52	SX25、素掘小溝出土遺物	
図版 53	素掘小溝出土遺物	
図版 54	素掘小溝出土遺物	
図版 55	素掘小溝出土遺物	
図版 56	素掘小溝、包含層出土遺物	

## 第1章 調査に至る経緯と調査体制

### 第1節 調査に至る経緯

平成20年1月16日付けでトステムビバ株式会社より商業施設の建設に伴う遺跡有無確認踏査願が提出された。これを受けて奈良県教育委員会より橿原市教育委員会へ試掘調査の実施を指示、平成20年3月16・17日に橿原市教育委員会が試掘調査を実施し、敷地東側において遺物及び遺構を確認した。この結果を受けて奈良県教育委員会及び橿原市教育委員会は事業者と発掘調査実施にむけた協議を開始した。しかし、工期を勘案した結果、地方公共団体による発掘調査は困難と判断されたため、師元興寺文化財研究所において発掘調査を実施することとなった。

なお、試掘調査の結果より当該地を含む一帯を南曽我遺跡の名称で新規確認の周知の遺跡として、平成20年4月20日付けで奈良県教育委員会より奈良県遺跡地図の記載変更が通知された。この通知に依拠し、平成20年4月30日付けで同社より埋蔵文化財発掘の届出が提出された。

発掘調査の実施に際しては、奈良県教育委員会より発掘調査の依頼を受けた師元興寺文化財研究所は、平成20年6月13日付けで南曽我遺跡の発掘調査業務に係る委託契約を株式会社グランドコーポレーションと締結、平成20年6月13日に発掘調査届出を提出し、平成20年6月16日より現地調査を開始した。調査期間中の平成20年10月1・8日に作業風景を見学する現地公開、全ての遺構を検出し終えた段階の平成20年10月13日に現地説明会を行った。

現地調査は平成20年12月1日に終了したが、事業者の都合により、すみやかに整理・報告書作成業務に移行出来なかった。その後事業者等との協議の結果、株式会社アークと平成23年3月17日に南曽我遺跡の整理・報告書作成に係る委託契約を締結、平成23年度に整理・報告書作成業務を行った。

現地発掘調査から報告書作成に至る間、株式会社グランドコーポレーション並びに株式会社アークの全面的な支援・協力があつた。また、奈良県教育委員会、橿原市教育委員会からの適切な指導をいただいた結果、調査・整理作業を無事に終了することが出来た。関係各位に感謝する次第である。

### 第2節 調査体制

発掘調査並びに整理・報告書作成は以下の体制で実施した。

調査指導：奈良県教育委員会・橿原市教育委員会

調査主体：財団法人元興寺文化財研究所

理事長 辻村泰善

所長 坪井清足

事務局長 奥洞二郎（平成22年8月まで）、江島和哉（平成22年9月より）

研究部長 狭川真一

人文考古学研究室（考古担当）（平成22年4月より考古学研究室）

室長 伊藤健司

主任研究員 佐藤亜聖

研究員 坂本亮太（平成22年3月まで）、村田裕介、桃井宏和（平成21年4月より平成23年3月まで）

現地作業員：有限会社ワーク

測量：株式会社アコード

## 第2章 周辺における既往の調査と課題

南曽我遺跡は橿原市西部の曽我町に位置し、ここは奈良盆地の南辺にあたる。南からは貝吹山から連なる山地が南北方向に延びている。市内を流れる河川は、西から順に曽我川、高取川、桜川、飛鳥川、米川、寺川等がほぼ等間隔にあり、緩やかに北へ向かって傾斜する地形とともに北流している。

調査地は曽我川と高取川が合流する地点のすぐ西側の標高約 59.7 m の平坦地に立地する。曲川池の北東から南方にかけて条里地割の乱れが確認できることから、旧流路の存在が推定でき、また現在の標高からも南曽我遺跡と曲川遺跡の間に弱い谷地形を想定することが出来る。

調査地周辺では、縄文時代以前の遺構を伴う遺跡は少ない。橿原市観音寺本馬遺跡では縄文時代晩期の墓域が調査され、土坑墓が検出されているとともに、住居跡も確認されている。また、橿原市西曽我遺跡では、縄文時代中期の遺物包含層が確認されており、橿原市萩之本遺跡でも縄文時代後期～晩期の遺物の出土がみられる。

弥生時代になると、遺構が確認できる遺跡も増加する。橿原市中曽司遺跡では、前期から後期の溝、住居跡などが検出されている。その南に位置する西曽我遺跡でも中期の溝や土坑などが確認されている。橿原市・大和高田市川西根成柿遺跡では、前期の環濠集落、橿原市新沢一遺跡、橿原市千塚山遺跡では中期の住居跡が検出されている。貝吹山から派生した独立丘陵である忌部山に所在する橿原市忌部山遺跡では、弥生時代後期の住居跡や溝が検出されており、高地性集落が営まれたと考えられる。生産域については、近年の京奈和自動車道建設に伴う発掘調査により、盆地南部の状況が明らかになっており、

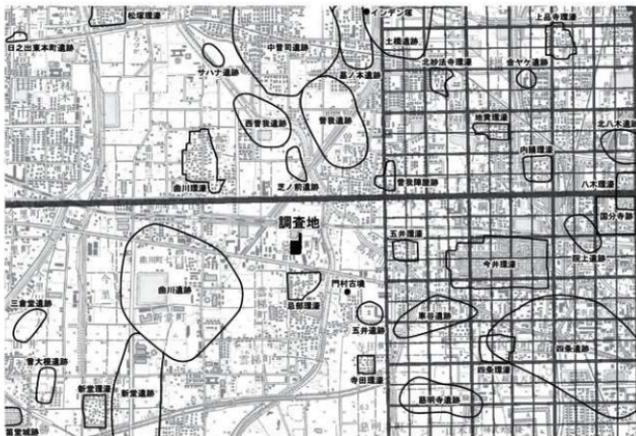


図1 調査地の位置と周辺の遺跡 (S=1/25,000)

橿原市内でも橿原市萩之本遺跡で前期の可能性のある水田が確認されている。また、墓域については橿原市西曾我遺跡、橿原市土橋遺跡、橿原市曲川遺跡、橿原市観音寺遺跡などで中期の周溝墓が造営されている。

古墳時代では、南曾我遺跡の北約700mに位置する橿原市曾我遺跡において、中期から後期の玉類、石製模造品の未成品、砥石が大量に出土し、玉造りを専業的に営んだ大規模な生産遺跡として著名である。また、その南西に位置する橿原市西曾我遺跡では、中期の土坑が検出されており、曾我遺跡との関連が指摘されている。新堂遺跡では、流路と溝、水田が検出されており、これらの遺構の有機的な関係をうかがうことができる。

また、古墳については、調査地南東に橿原市門村古墳があるほか、近隣には前期の前方後円墳である橿原市スイセン塚古墳と中期の前方後円墳である橿原市鳥屋ミサンザイ古墳が所在している。曾我川上流域には渡来系の文物を多く有することでも有名な総数600基以上の新沢千塚古墳群が4世紀から7世紀まで連続と造営されている。また、近年の発掘調査の増加により、周辺地域の埋没古墳の検出も増加している。曲川遺跡では前期から中期にかけての埋没古墳が発見されているほか、大和高田市松浦北遺跡では中期～後期の古墳周溝および、多種類の埴輪を検出している。また、中期から後期の古墳である橿原市四条古墳群や橿原市四条シナノ古墳群では、大量の木製品が出土したことで注目されている。このように、低地部にも古墳群が造営されており、今後の調査の増加により古墳の数も増加することが予測される。

飛鳥時代以降では南曾我遺跡周辺には顕著な遺跡は確認できない。7世紀末には藤原京が造営されるが、近年の調査成果による京城復元案では、南曾我遺跡は藤原京西京極より西方へ約1km隔てている。南曾我遺跡の北方には古代の官道である横大路が東西に通っており、今日でも横大路推定線と重複して橿原市の市道が東西に走っている。

旧大和国内には条里が施行されたことが明らかとなっており、今日でも各所で明瞭な土地区画痕跡を残す。南曾我遺跡は条里呼称においては高市郡路西二十五条四里字戎田・字森尻にまたがっている。「条里復原図」では坪付の復元がなされていないが、小字名や周辺との関係から、調査区は九・十坪に相当すると考えられる。

橿原市西曾我遺跡では平安時代後半から鎌倉時代の掘立柱建物・井戸・耕作跡などが検出されている。この調査成果が示すように、平安時代以降から中世を通じて高市郡においては、多くの荘園が出現している。荘園の多くは一乗院門跡領、大乗院門跡領を主とする興福寺領である。詳細な地点は不明であるが、おおまかな位置は遺存地名により推定可能である。西に曲川庄、横大路をはさんで南に忌部庄があり、曾我川をはさんで東に曾我庄、北に中曾司庄が存在したと考えられる。

中世には東坊城、新堂、忌部、曲川などに環濠集落が形成され、現集落の原型となっている。橿原市芝の前遺跡では室町時代の墓地跡が検出されており、環濠集落と墓地とのありかたを考えることができる。

以上のような周辺の調査成果を踏まえ、今回の調査では弥生時代から古墳時代にかけての遺構の存在が推測された。新堂遺跡や曲川遺跡で検出されている、地形に沿って掘削したと考えられる弥生時代から古墳時代にかけての溝群及び旧流路の延長が、南曾我遺跡においても確認される可能性もある。また、調査地内に条里の坪境があることから、坪境溝の検出も予測できる。新規の遺跡である南曾我遺跡の遺跡としての性格及び周辺遺跡との関係の把握が今回の調査の課題である。

### 第3章 調査の成果

#### 第1節 調査区の配置と基本層序・遺構面の認定(図2～5)

調査地は、榎原市教育委員会による試掘調査の結果、北西部には遺構がないことが確かめられており、調査は東部を対象とすることとなった。また、対象地の北西部には前身建築物の地下構築物(ボイラー室)により遺構が破壊されていることが予測されたため、北部については破壊の及んでいない東寄りのみを調査対象とした。

基本層序は上層から層厚約0.6～0.8mの造成土、層厚約0.2mの近現代の耕作土、層厚約0.2～0.3mの中近世包含層であり、中近世包含層直下の黒褐色シルト上面が遺構検出面である。地表面の標高は概ね59.6m前後、遺構面の標高は、北東で約58.20m、北西で約58.4m、南東で約58.60m、南西で約58.60mであり、南に高く、北に低い。

調査終了後には、調査区の南東部及び北西部において下層確認を行った。南東部のトレンチでは、遺構面より0.3m下で、幅8.4m以上の規模をもつ南西から北東へと流れる、河川によるものと考えられる砂層の堆積がみられた。出土遺物はなく、時期等は不明である。

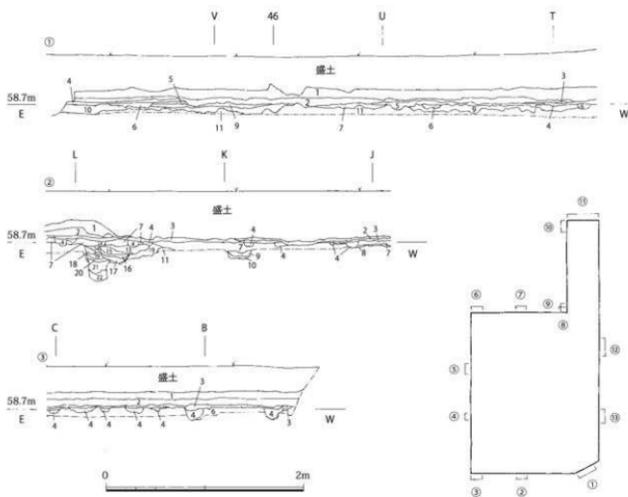


図2 壁面土層図 (1) (S=1/40)

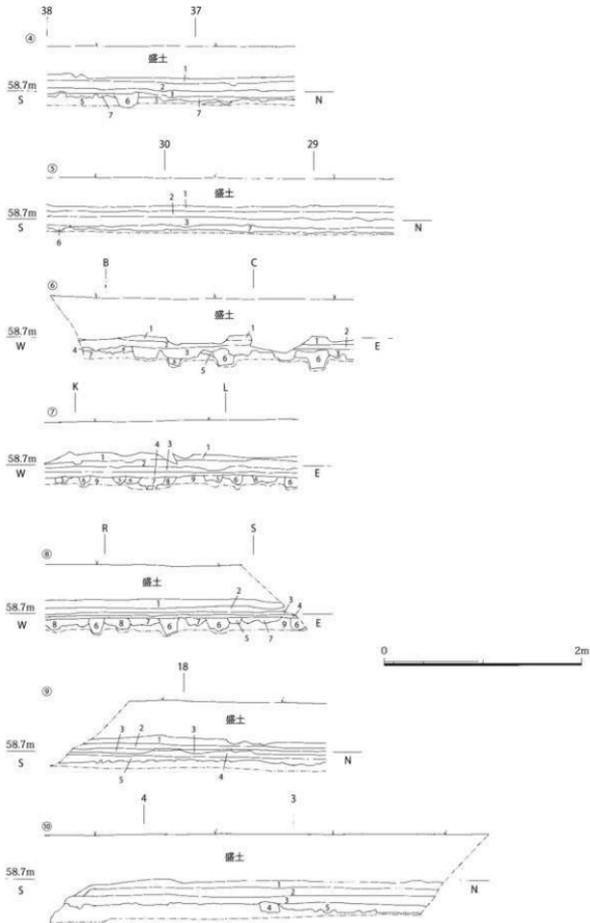


図3 壁面土層図 (2) (S=1/40)





## 第2節 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構・遺物

## (1) 遺構

## 方形周溝墓

## SZ30 (図6)

D～G-44～46区で検出した方形周溝墓である。封土及び埋葬施設は残っていない。平面規模は東西4.3m、南北4.8mを測る。周溝は断面形態が浅い「U」字形を呈し、幅0.5～0.8m、深さ0.1～0.2mである。溝底面の標高は58.4m前後であるが、南東部では0.1mほど下がる。南東ではSZ35と接するが、溝は共有していない。

周溝埋土は概ね2層からなり、上層から黒褐色シルト～砂、黒褐色シルトである。下層には地山ブロックが含まれており、この層は築造時に形成されたものであると考えられる。上層については築造後の自然堆積によるものである。

遺物は出土していないが、近くに存在するSZ40との関連が想定できる。

## SZ35 (図6)

F～H-45～46区で検出した方形周溝墓である。封土及び埋葬施設は残っていない。また、南側はSX25により大きく失われているため、確認できた周溝は北溝と東西溝北側のごく一部のみである。平面規模は東西5.1mを測り、南北は3.1mが残存する。周溝は断面形態が浅い「U」字形を呈し、幅0.5～1.0m、深さ0.2～0.3mである。溝底面の標高は58.4m前後である。北西ではSZ30と接するが、溝は共有していない。

周溝埋土は概ね3層からなり、上層から褐色シルト、黒褐色シルト、黒褐色シルトである。下層には地山ブロックが含まれており、築造時に形成されたものと考えられる。上層及び中層については築造



図6 SZ30・35 平面・土層断面図 (平面S=1/100 土層断面S=1/40)

後の自然堆積によるものである。

本遺構に伴う遺物は出土していないが、近くに存在するSZ40との関連が想定できる。

#### SZ40 (遺構：図7、遺物：図17)

H～L43～47区で検出した方形周溝墓である。封土及び埋葬施設は残っておらず、周溝のみ確認した。平面形は南西隅が外へ広がる方形を呈する。平面規模は東西が北辺で7.1m、南辺で8.0m、南北で8.1mである。主軸は西溝が座標北から東へ約26°、東溝が座標北から東へ約20°振れる。周溝は断面形態が「U」字形を呈し、幅0.5～1.1m、深さ0.2～0.3mである。溝底面の標高は58.4m前後である。

周溝埋土は概ね2層からなり、上層から黒褐色シルト、黄灰色シルトである。下層には地山ブロックが含まれており、築造時に形成されたものと考えられる。上層については築造後の自然堆積によるものと考えられるが、崩落した填丘構築土とみられる地山ブロックが含まれている。

遺物は北西隅部で底より約0.2m上で古墳時代前期の二重口縁壺(図15-1)が出土している。

#### SZ50 (遺構：図8、遺物：図17)

T～X35～37区で検出した方形周溝墓である。封土及び埋葬施設は残っておらず、周溝のみ確認した。西溝北半及び北溝東半については調査区の東側へ続いているが、平面形は方形を呈すると考えられる。平面規模は東西11.4m、南北10.6mを測る。主軸は北で約38°東へ振れる。周溝は断面形態が狭い「U」字形を呈し、幅0.4～1.3m、深さ0.1～0.3m、溝底面の標高は58.4m前後である。

周溝埋土は概ね2層からなり、上層から黒褐色シルト、黒褐色砂である。下層には地山ブロックが含まれており、築造時に形成されたものと考えられる。上層については築造後の自然堆積によるものと考

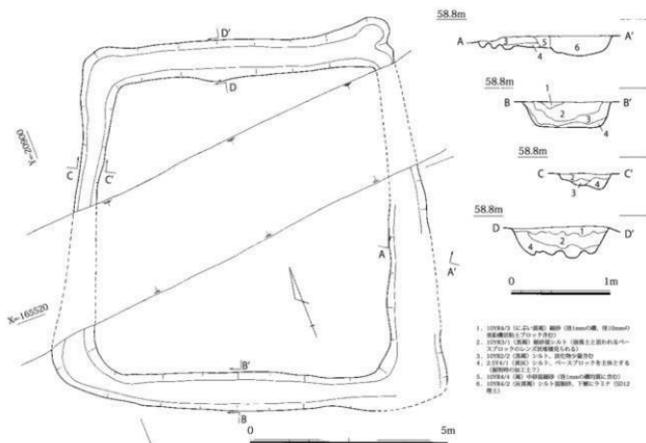


図7 SZ40 平面・土層断面図 (平面S=1/100 土層断面S=1/40)

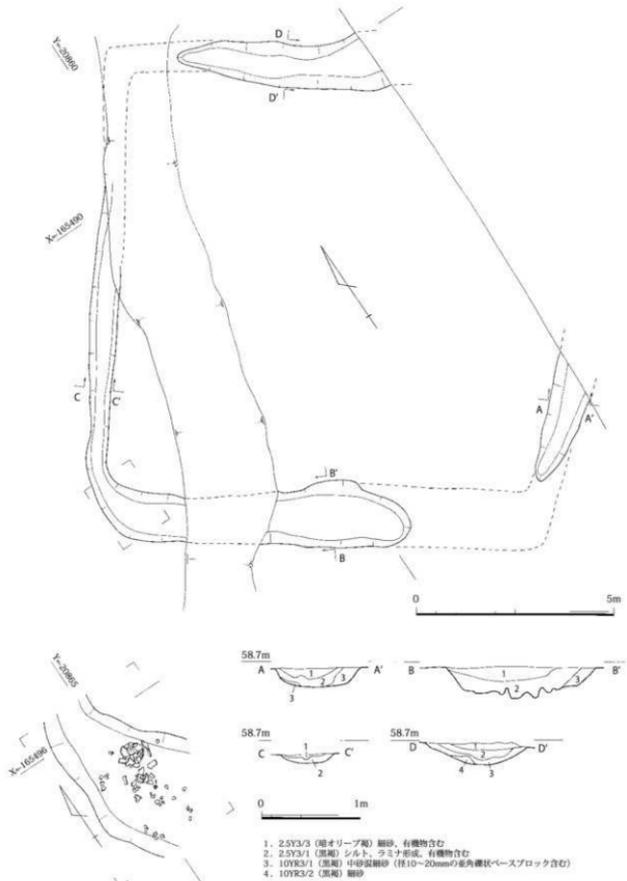


図8 SZ50 平面・土層断面図 (平面 S=1/100 出土状況・土層断面 S=1/40)



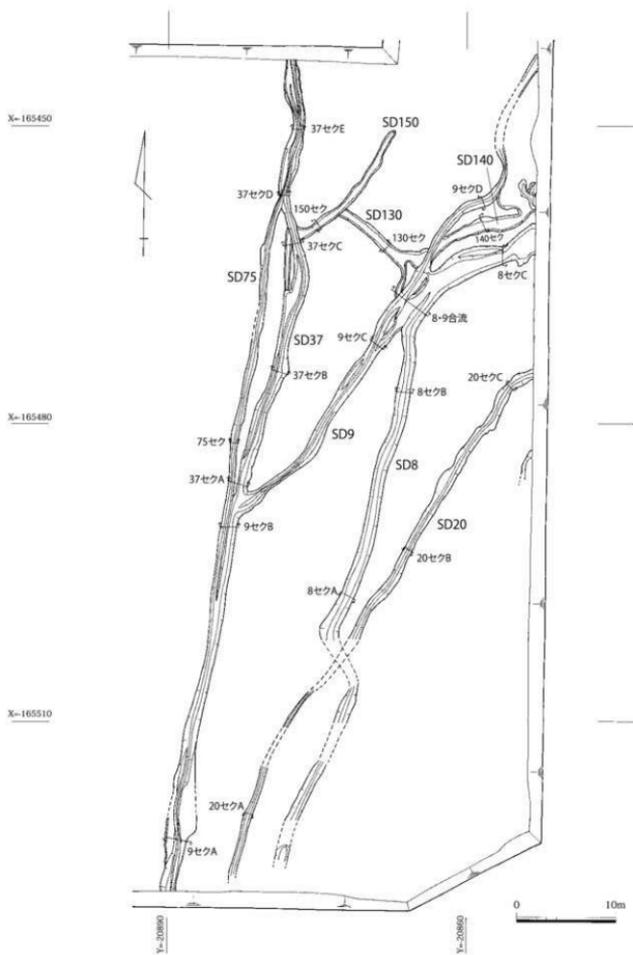


図 11 弥生時代後期～古墳時代前期溝平面図 (S=1/400)



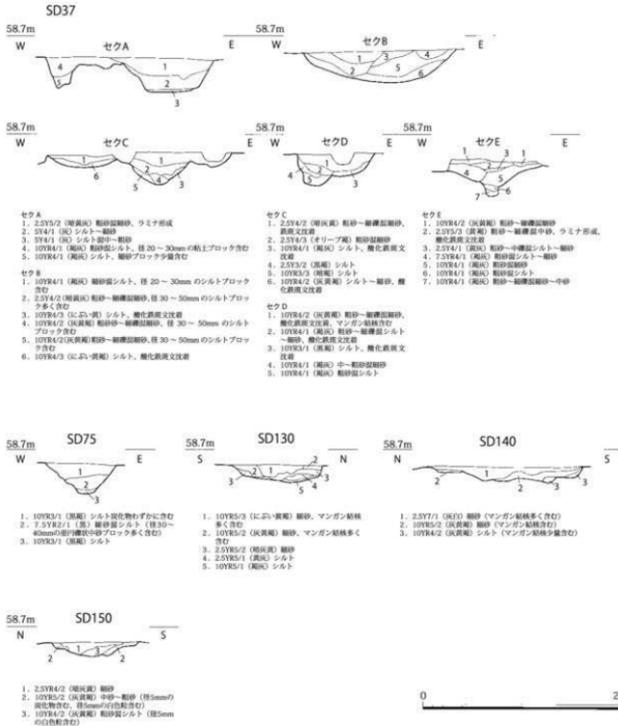


図 13 弥生時代後期～古墳時代前期溝土層断面図 (2) (S=1/40)

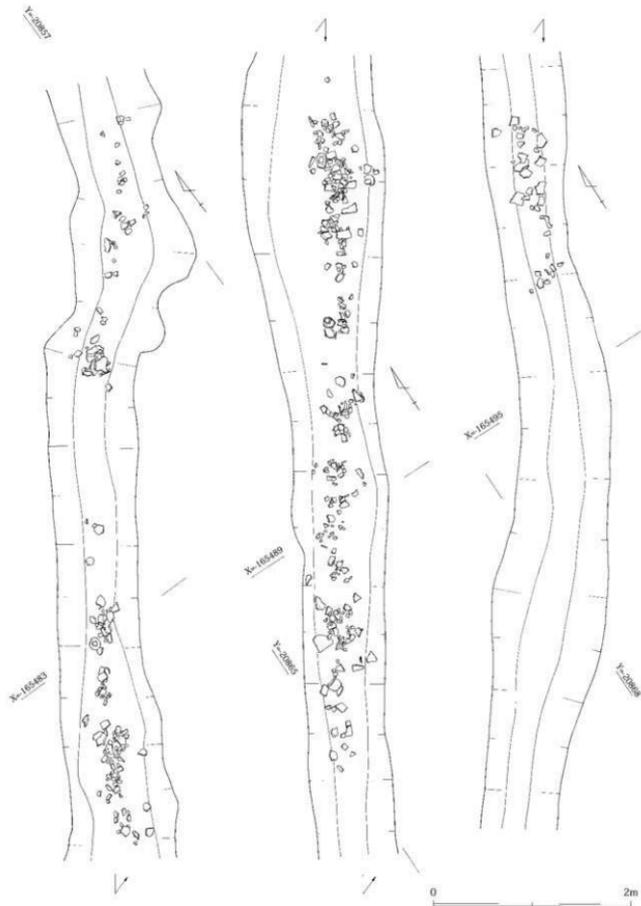


图 14 SD20 遺物出土状況図 (S=1/40)

屈曲し、座標北から約38°東へ振れる方向に流れを変える。南端は調査区の南側へ、北端は調査区の東側へと伸びている。SD37に先行する。T-27区でSD8と合流し、すぐに分岐する。断面形態は右肩に弱い段を持つ「V」字形を呈し、幅0.7～2.3m、深さ0.3～0.6mを測る。溝底面の標高は58.2m前後を測り、標高差はほとんどみられない。

埋土は概ね3層からなり、上層より暗灰黄色細砂、褐色中砂、オリーブ黒色シルトである。穏やかな流水後、強い流水により堆積がなされ、最終的に流水のない状態での自然堆積による埋没が考えられる。SD8とは同時期に並存し、最終的には同時に埋没している。

遺物は弥生土器、土師器が出土している。

SD20（遺構：図11・12・14、遺物：図20～23）

N～W-29～46区で検出した溝である。座標北から約33°東へ振れる方向で斜行し、南端は調査区の南側へ、北端は調査区の東側へ伸びている。断面形態は南側では「U」字形、北側では「V」字形を呈し、幅0.6～1.2m、深さ0.5～0.6mを測る。溝底面の標高は58.1m前後を測り、標高差はほとんどみられない。

埋土は概ね2層からなり、上層より黒褐色シルト、灰色シルトである。流水の痕跡はなく、自然堆積により埋没したものと考えられ、その他の流水の痕跡のある溝群とは性格を異にする。

遺物は全体から弥生土器、土師器が出土しているが、特にW-31区からT-36区にかけていくつかのまとまりをもって多量に出土している。上層、下層ともに出土がみられるが、上層と下層との間に接合関係が多く認められることから、上層と下層との間に時間差は考えづらい。

SD37（遺構：図11・13、遺物：図19）

N～Q-19～38区で検出した溝である。N-38区でSD9から分岐し、座標北から約9°東へ振れる方向で斜行する。P-24区でSD75と合流し、北端は調査区の北側に伸びている。断面形態は「U」字形を呈し、幅0.7～1.6m、深さ0.2～0.3mを測る。溝底面の標高は58.2m前後を測り、標高差はほとんどみられない。

埋土は概ね3層からなり、上層より灰褐色細砂、黄褐色中砂、黒褐色シルトである。穏やかな流水後、強い流水により堆積がなされ、最終的に流水のない状態での自然堆積による埋没が考えられる。

遺物は弥生土器、土師器などが出土している。

SD75（遺構：図11・13、遺物：図19）

N～P-24～34区で検出した溝である。座標北から約10°東へ振れる方向で斜行する。P-24区でSD37と合流する。SD9およびSD37の下層で一段低くなっている部分はSD75に対応するものであり、SD9のうちのO-34～L-47区にかけてとSD37は、SD75を踏襲して掘削されたものと考えられる。断面形態は「V」字形を呈し、幅0.5～0.8m、深さ0.3～0.4mを測る。溝底面の標高は58.1m前後を測り、標高差はほとんどみられない。

埋土は概ね3層からなり、上層より黒褐色シルト、褐色細砂、褐色シルトからなる。穏やかな流水後、強い流水により堆積がなされ、最終的に流水のない状態での自然堆積による埋没が考えられる。

遺物は弥生土器、土師器が出土している。

SD130（図11・13）

R～T-24～27区で検出した溝である。座標北から約50°西へ振れる方向で斜行し、南端でSD9と、北端でSD150と接続する。断面形態は浅い「U」字形を呈し、幅0.5～1.7m、深さ0.1～0.2mを測る。溝底面の標高は58.4m前後を測り、標高差はほとんどみられない。

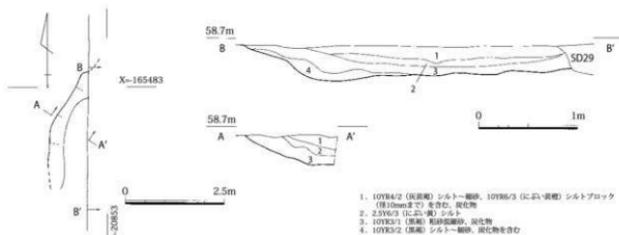


図 15 SD215 平面・土層断面図 (平面 S=1/100 土層断面 S=1/40)

埋土は大きく2層からなり、上層より灰黄褐色細砂、褐灰色シルトからなる。流水状態で埋没と考えられる。

遺物は土師器片が出土しているが、図示できるものはない。

SD150 (遺構：図 11・13、遺物：図 19)

Q～T21～25区で検出した溝である。座標北から33°～57°東へ振れる方向で緩く弧を描きながら斜行する。Q-25区でSD37から分岐し、R-24区でSD130が合流する。断面形態は浅い「U」字形を呈し、幅0.6～0.9m、深さ0.1～0.2mを測る。溝底面の標高は58.4m前後を測り、標高差はほとんどみられない。

埋土は概ね3層からなり、上層より暗灰黄細砂、灰黄褐色シルト、灰黄褐色粗砂である。流水状態での堆積の後、湛水となり、最終的には水が流れなくなった状態での自然堆積による埋没と考えられる。

遺物は土師器片が出土しているが、図示できるものはない。

SD215 (遺構：図 14、遺物：図 19)

X-32～33区で検出した溝である。西側のみの確認であり、北・東側は調査区東側へ伸び、南端はSD29により失われている。座標北から23°東へ振れる方向で斜行する。断面形態は「U」字形を呈し、平面規模は不明であるが、深さは0.3mを測る。

埋土は概ね3層からなり、上層より灰黄褐色細砂、地山を主体とするにぶい黄色シルト、にぶい黄色シルトブロックを含む黒褐色細砂である。流水の痕跡はみられず、掘削後しばらくは自然堆積があり、最終的には人為的な堆積により埋没したものと考えられる。

遺物は古墳時代前期に属する壺・甕・高杯・器台などが小片となっているが、比較的多く出土している。

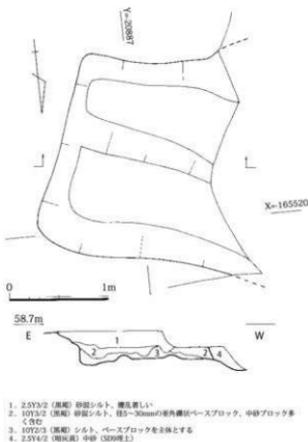


図 16 SK13 平面図・土層断面図 (S=1/40)

## 土坑

## SK13 (遺構：図 16、遺物：図 24)

M-45区で検出した土坑である。SD09により西半は失われている。平面規模は南北2mを測り、東西は2.3mが残存する。深さ0.3mを測り、底部は南側へ1段下がる。

埋土は上層(1)に擾亂の著しい砂混シルト、下層(2・3)に地山ブロックを多く含むシルト～中砂が堆積する。

遺物は、埋土内より石包丁が出土している。

## (2) 遺物

## SZ40 (図 17)

二重口縁壺(1・2) 1は周溝北西隅より出土した。体部から口縁部である。体部外面にナデ調整、体部内面にヘラケズリ調整後ナデ調整を施し、頸部付近にはコビオサエ痕が残る。1次口縁部は外面に縦方向のヘラミガキ調整後中程に幅約1cmで横方向のナデ調整を行い、内面はナデ調整する。2次口縁部は内外面ともにヨコナデ調整する。口縁端部には面を持つ。2は北溝より出土した。1次口縁部である。内外面ともにヨコナデ調整を施す。2次口縁部は接合部より外れているが、1次口縁の上面に付加されることが分かる。

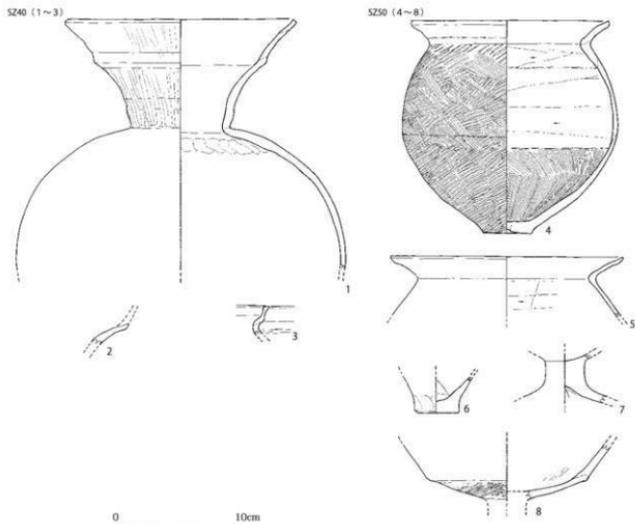


図 17 SZ40・50 出土遺物実測図 (S=1/3)

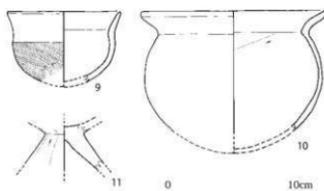


図18 5110 出土遺物実測図 (5=1/3)

底部は突出が弱く、中央が僅かに凹む。体部外面に右上がりのタタキ調整後上半に粗いハケメ調整、体部内面は下半にハケメ調整、上半に横方向のヘラケズリ調整を施す。口縁部はヨコナデ調整し、口縁端部に面を持つ。体部外面には煤が付着する。5は口縁部である。体部外面は表面劣化のため調整不明、体部内面に横方向のヘラケズリ調整を施す。口縁部はヨコナデ調整し、端部より少し下がった外面が肥厚する。6は平底を呈する底部である。底部内外面ともにナデ調整を施す。体部外面は表面劣化のため調整不明である。内面には工具痕、底部脇の外面にはユビオサエ痕が残る。

高杯(7・8) 7は高杯の脚柱部である。内外面ともにナデ調整を施し、内面にはシボリ痕が残る。8は高杯の杯部である。外底面に横方向のヘラミガキ調整する。口縁部は外面は表面劣化のため調整不明だが、内面にハケメ調整後ナデ調整を施す。

4～7は南西隅、8は北溝より出土しており、前者は溝底面から僅かに浮いた状態で出土である。これらの遺物は、庄内式前半期のものである。

#### 5110 (図18)

鉢(9) 9は小型鉢の体部から口縁部である。体部外面にハケメ調整、体部内面にナデ調整を施し、口縁部は体部の器面調整後ヨコナデ調整する。口縁部は丸くおさめる。底部は丸底の形態を呈するものと推測される。

甕(10) 10は甕の体部から口縁部である。体部外面は表面劣化のため調整不明、体部内面は最大径付近より上に横方向のヘラケズリ調整、最大径付近より下に縦方向のヘラケズリ調整を施す。口縁部はヨコナデ調整する。口縁端部は外面に弱く面を持ち、端部は僅かに上方につまみあげる。体部外面から口縁部にかけて煤が付着している。

器台(11) 11は器台の脚部である。脚部外面に縦方向のヘラケズリ調整、脚部内面に縦方向のナデ調整、受部外面にヘラケズリ調整、受部内面にナデ調整を施す。受部と脚部との接合方法は、受部底部に脚部を挿入するものである。

これらの遺物は、庄内式後半期のものである。

#### SDB (図19)

甕(12・13) 12はS字状口縁甕の口縁部である。体部外面に斜め方向のハケメ調整後、肩部付近を横方向のハケメ調整、体部内面にユビオサエ調整を施す。頸部内面には横方向のハケメ調整を施す。口縁部はヨコナデ調整する。灰白色を呈する。13は甕口縁部である。体部外面に縦方向のハケメ調整後頸部付近は横方向のナデ調整、体部内面に横方向のヘラケズリ調整を施す。口縁部はヨコナデ調整する。外面に煤が付着する。

鉢(14) 14は鉢の底部である。体部内外面ともにナデ調整し、底部はユビオサエ調整により上げ

甕(3) 3は東溝より出土した。S字状口縁甕の口縁部である。体部外面に横方向のハケメ調整、体部内面にナデ調整を施す。口縁部はヨコナデ調整する。

これらの遺物は、古墳時代前期のものである。

#### SZ50 (図17)

甕(4～6) 4は全形が確認できるもので、遺存状態が悪いため接合は困難であるが、本来は完形に復元できるものであると考えられ

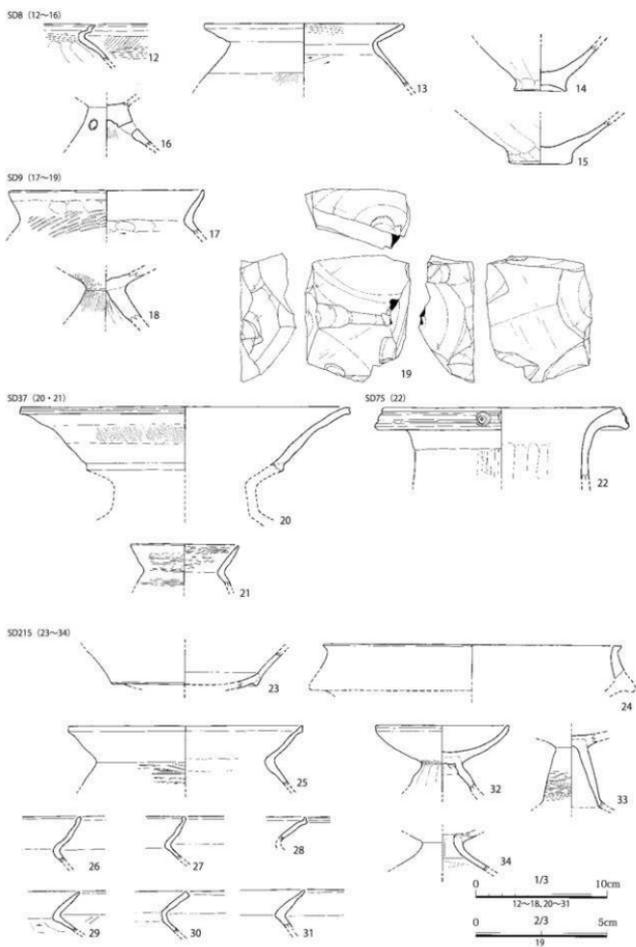


図19 SD8・9・37・75・215出土遺物実測図 (S=1/3・2/3)

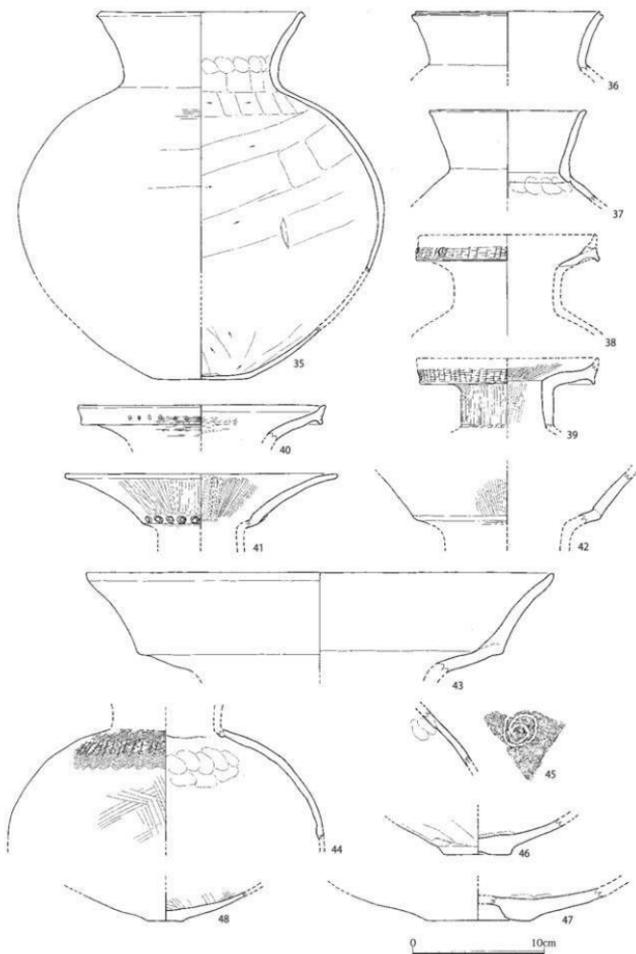


图 20 SD20 出土遺物実測図 (1) (S=1/3)

底の突出した底部を作り出す。外面のナデ調整は縦方向になされている。外面には黒斑が観察できる。

壺 (15) 15は壺の底部である。内外面ともにナデ調整を施し、底部は突出した形態をとる。外面のナデ調整は縦方向になされている。

器台 (16) 16は器台脚部である。外面は表面劣化のため調整不明であるが、内面には縦方向のハケメ調整を施す。透孔は1段3孔をあける。

これらの遺物は、大和第Ⅵ様式から古墳時代前期のものである。

#### SD9 (図19)

甕 (17) 17は甕口縁部である。体部外面に右上がりのタタキ調整、内面に横方向のヘラケズリ調整を施し、頸部内面にはユビオサエ痕が残る。外面には煤が付着する。

高杯 (18) 18は脚部と杯部の接合部付近である。外面に縦方向の密なヘラミガキ調整を施し、脚部内面にはシボリ痕が残る。杯部内面は表面劣化のため調整等は不明である。

石核 (19) 19はグリーンタフ製である。重量は39.7gを測る。

#### SD20 (図20～23)

壺 (35～48) 35～37は直口壺である。35は底部は丸底気味の平底を呈し、外面にナデ調整、内面に縦方向のヘラケズリ調整を施す。体部は外面は表面劣化のため調整不明、内面に僅かに右上がりの横方向のヘラケズリ調整を施し、頸部付近はヘラケズリ調整の間隔が短くなる。口縁部は横ナデ調整をし、内面頸部付近にはユビオサエ痕が残る。体部外面には黒斑が観察できる。36は内外面ともにヨコナデ調整をする。口縁端部は面を持ち、沈線状の凹みが部分的にみられる。37は内外面ともに表面劣化のため調整は不明であるが、頸部内面付近ではユビオサエ痕が確認できる。

38～43は二重口縁部である。38は1次口縁部である。外面は表面剝離のため調整は不明、内面には縦方向のヘラミガキ調整を施す。1次口縁端部は僅かに下方に垂下し、外面に面を持つ。この口縁端部外面に櫛描刺突文を施文し、円形浮文を貼り付ける。2次口縁部は1次口縁端部上面に貼り付けられ、短く立ち上がっていたものと推測できる。39は頸部から1次口縁部である。38と同様の形態をとると考えられる。頸部から1次口縁部にかけて内外面ともに縦方向のヘラミガキ調整を施す。1次口縁端部外面は櫛描刺突文で施文されるのみである。40は2次口縁部である。内外面ともに縦方向のヘラミガキ調整が施される。2次口縁受部外面には円形浮文を貼り付ける。41は2次口縁部である。内外面ともに横方向のヘラミガキ調整を施し、口縁端部は上下に肥厚し、竹筭文が廻る。42は1次口縁部と2次口縁部との接合部である。1次口縁部外面に横方向のヘラミガキ調整、2次口縁部外面に縦方向のヘラミガキ調整、内面に方向が観察できないがヘラミガキ調整を施す。内外面ともに赤彩が観察できる。43は口縁部である。内外面ともに表面劣化のため調整は不明。外面に黒斑が観察できる。

44・45は壺体部である。44は内外面ともにナデ調整を施し、内面にはユビオサエ痕が残る。外面には渦巻状の線刻がなされる。45は外面に横方向のハケメ調整後縦方向のハケメ調整を施し、頸部から肩部にかけて櫛描簾状文と櫛描波状文を交互に2条ずつ施文する。内面はナデ調整し、頸部付近にはユビオサエ痕が残る。外面には赤彩が観察できる。

46～48は壺底部である。46は内外面ともにナデ調整を施し、内面にはユビオサエ痕が残る。中央が僅かに凹む平底の形態をとる。47は内外面ともにナデ調整をし、内面にはユビオサエ痕が残る。中央が凹む平底の形態をとる。底部の突出度は低い。胎土・焼成は43に似る。48は外面はナデ調整、内面は縦方向のハケメ調整を施す。底部は直径3cmほどの小さい平底の形態をとる。外面には赤彩が観察でき、底面にまで及んでいる。44と同一体の可能性がある。

甕 (49～79) 49～76は口縁部である。49は体部外面に左上がりのタタキ調整、体部外面に斜

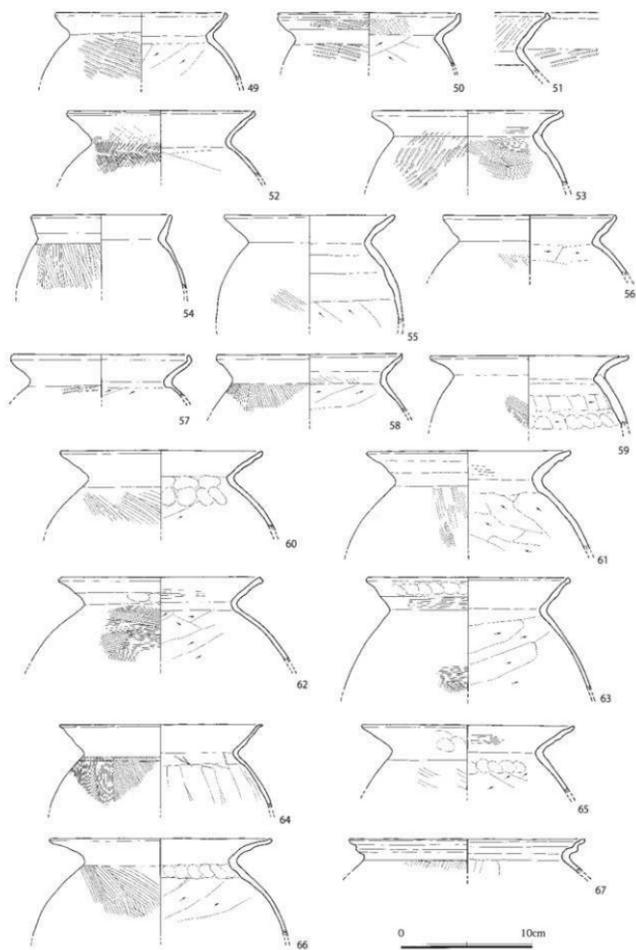


图 21 SD20 出土物実測図 (2) (S=1/3)

め方向のヘラケズリ調整を施し、口縁部をヨコナデ調整する。口縁端部外面に面を持ち、端部を上方へつまみ上げる。50は体部外面に左上がりのタタキ調整、体部内面に斜め方向のヘラケズリ調整を施し、口縁部をヨコナデ調整する。口縁部外面にはタタキ調整、口縁部内面には斜め方向のハケメ調整の痕跡が観察できる。口縁端部外面に面を持ち、端部は上方へつまみ上げる。51は体部外面に右上がりのタタキ調整、体部内面に横方向のヘラケズリ調整を施し、口縁部をヨコナデ調整する。口縁部内面に斜め方向のハケメ調整の痕跡が観察できる。口縁端部外面に面を持ち、端部を上方へつまみあげる。52は体部外面に左上がりの矢羽根状タタキ調整、体部内面に横方向のヘラケズリ調整を施し、口縁部をヨコナデ調整する。口縁端部外面に面を持ち、端部を上方へつまみあげる。53は体部外面に右上がりのタタキ調整、体部内面に横から斜め方向のハケメ調整を施し、口縁部をヨコナデ調整する。口縁端部外面に面を持ち、端部は上方へ僅かに肥厚する。54は体部外面に粗い縦方向のハケメ調整を施す。体部内面は表面劣化のため調整不明である。口縁部はヨコナデ調整する。55は体部外面にハケメ調整、体部内面に縦方向のケズリ調整後上半にナデ調整を施す。体部内面上半にはユビオサエ痕が残る。口縁部はヨコナデ調整する。56は体部外面に斜め方向のハケメ調整、体部内面に横方向のヘラケズリ調整後ナデ調整を施し、体部内面にはユビオサエ痕が残る。口縁部はヨコナデ調整する。57は体部外面にタタキ調整、体部内面に斜め方向のヘラケズリ調整を施し、口縁部はヨコナデ調整する。口縁端部に面を持ち、端部は上方へつまみあげる。口縁部内面中程から口縁端部下端にかけて色の異なる粘土が使用されている。58は体部外面を縦方向のハケメ調整、体部内面を横方向のケズリ調整を施し、口縁部はヨコナデ調整する。口縁端部外面に面を持ち、端部は上方へつまみあげる。59は体部外面に斜め方向のハケメ調整、体部内面に横方向のヘラケズリ調整を施す。口縁部はヨコナデ調整し、端部を僅かに上方へつまみあげる。60は体部外面に粗いハケメ調整、体部内面に縦方向のヘラケズリ調整後、頸部付近にナデ調整を施し、体部内面頸部付近にはユビオサエ痕が残る。口縁部及び頸部外面はヨコナデ調整する。61は体部外面に縦方向のハケメ調整、体部内面頸部下付近までに斜め方向のヘラケズリ調整、体部内面頸部付近にナデ調整を施す。口縁部はヨコナデ調整をするが、口縁部内面には横方向のハケメ調整の痕跡が確認できる。口縁部外面にはヨコナデ調整による弱い段がある。62は体部外面に横方向のハケメ調整、体部内面に頸部付近に横方向のヘラケズリ調整、それ以下に斜め方向のヘラケズリ調整を施す。口縁部はヨコナデ調整をするが、口縁部内面には横方向のハケメ調整の痕跡が観察できる。頸部外面にはユビオサエ痕が残る。口縁端部には面を持ち、沈線状の凹みがある。63は体部外面に横方向のハケメ調整、内面に横方向のヘラケズリ調整を施す。口縁部はヨコナデ調整するが、口縁部外面下半にハケメ調整の痕跡が観察できる。口縁部外面上半にはユビオサエの痕跡が残る。口縁端部は丸くおさめ、内面に肥厚する。64は体部外面に縦方向のハケメ調整、体部内面に縦方向のナデ調整を施す。口縁部はヨコナデ調整する。口縁端部は小さく外折し、端部上面に面を持つ。65は体部外面に粗いハケメ調整、体部内面に横方向のヘラケズリ調整を施し、体部内面頸部付近にはユビオサエ痕が残る。口縁部はヨコナデ調整するが、口縁部内面には横方向のハケメ調整の痕跡が確認できる。口縁部外面にはユビオサエ痕が残る。66は体部外面に粗いハケメ調整、体部内面に横方向のヘラケズリ調整を施し、体部内面頸部付近にはユビオサエ痕が残る。口縁部はヨコナデ調整する。口縁端部は丸くおさめ、内面に肥厚する。67は体部外面に縦方向のハケメ調整、体部内面にナデ調整を施し、体部内面にはユビオサエ痕が残る。口縁部はヨコナデ調整をし、S字状口縁の形態をとる。68は体部外面にナデ調整、体部内面に斜め方向のヘラケズリ調整を施し、口縁部はヨコナデ調整する。口縁部外面にはユビオサエ痕が残る。69は体部外面にナデ調整、体部内面に横方向のヘラケズリ調整を施す。体部外面にはハケメ調整の痕跡が確認できる。口縁部はヨコナデ調整する。口縁端部上面に弱く面を持ち、口縁端部は尖り気味である。

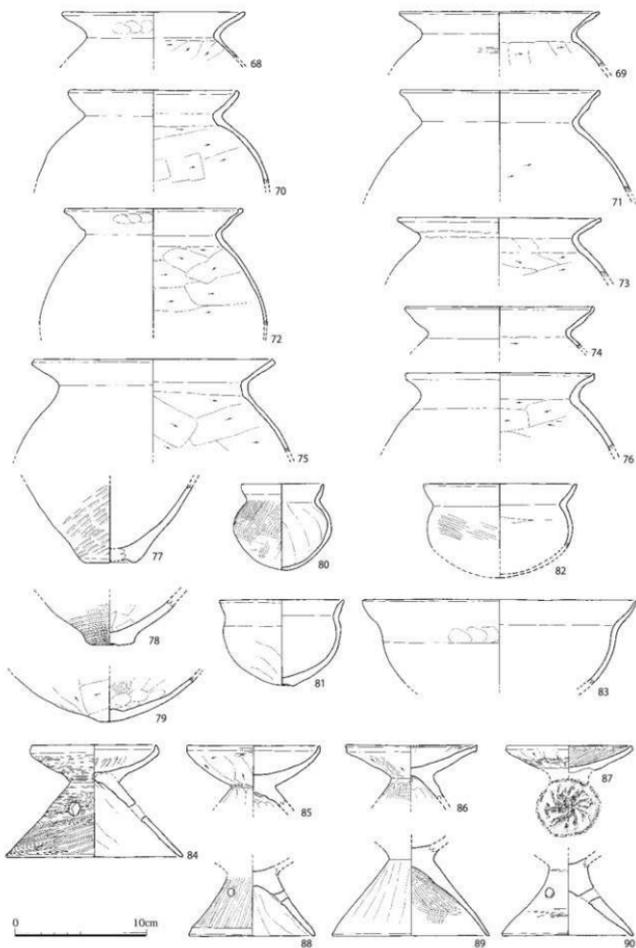


图 22 SD20 出土遺物実測図 (3) (S=1/3)

**70**は体部外面にナデ調整、体部内面に横方向のヘラケズリ調整、頸部内面にナデ調整を施し、口縁部はヨコナデ調整する。口縁端部は弱く面を持ち、内面に肥厚する。**71**は体部外面にナデ調整、体部内面に横方向のヘラケズリ調整を施し、口縁部はヨコナデ調整する。口縁端部は内面に肥厚する。**72**は体部外面にナデ調整、体部内面は頸部の下までに横方向のヘラケズリ調整を施し、体部内面の頸部付近にはユビオサエ痕が残る。口縁部はヨコナデ調整し、口縁端部上面に面を持ち、端部は内面に肥厚する。外面には全体的に煤が付着する。**73**は体部外面にナデ調整し、頸部付近には工具痕が残る。体部内面は頸部の下までに横方向のヘラケズリ調整を施し、頸部内面の頸部付近にはユビオサエ痕が残る。口縁部はヨコナデ調整する。**74**は体部外面は表面劣化のため調整不明、体部内面には横方向のヘラケズリ調整を施し、口縁部をヨコナデ調整する。口縁端部は上面に面を持ち、端部は内面に肥厚する。外面には煤が付着する。**75**は体部外面にナデ調整、体部内面に頸部の下までを横方向のヘラケズリ調整を施し、頸部内面から口縁部内外面にかけてヨコナデ調整する。口縁端部は面を持つ。**76**は体部外面にナデ調整、体部内面に横方向のヘラケズリ調整を施す。口縁部はヨコナデ調整する。口縁端部は外面に面を持ち、端部は上方に僅かにつまみあげる。

**77**～**79**は底部である。**77**は外面に右上がりのタタキ調整、内面にナデ調整を施し、内面には工具痕が残る。底部の突出は弱く、底外面は平底で、中央が僅かに凹む形態をとる。**78**は外面に右上がりのタタキ調整を施す。内面は表面劣化のため調整は不明である。底部の突出はほぼなく、底外面は平底で中央が凹む形態をとると考えられる。被熱のため、全体的に赤褐色に変色している。**79**は外面に縦方向のヘラケズリ調整、内面は底部付近にナデ調整、それ以上に縦方向のハケメ調整を施す。底部は尖底の形態をとり、内面には底部を形成した際に残されたユビオサエ痕が確認できる。

鉢(80～83) **80**は底部は尖り気味の丸底を呈し、体部外面に粗いハケメ調整後ナデ調整、体部内面にナデ調整を施す。口縁部はヨコナデ調整し、端部は内面に弱く肥厚する。ほぼ完形に復元できる。**81**は底部は僅かに凹む小さな平底の形態をとり、体部は内外面ともにナデ調整、口縁部にはヨコナデ調整を施す。**82**は体部外面に横方向のハケメ調整、体部内面にナデ調整を施し、口縁部をヨコナデ調整する。**83**は体部は内外面ともにナデ調整し、口縁部にはヨコナデ調整を施す。頸部付近の体部外面にはユビオサエ痕が残る。口縁端部は尖り気味である。

器台(84～90) **84**は外面に横方向のヘラミガキ調整、脚部内面にナデ調整、受部内面にナデ調整後暗文風のヘラミガキ調整を施し、受部端部をヨコナデ調整する。口縁端部は外面に面を持ち、端部を上方につまみ上げている。脚部と受部との接合法は、受部底部に脚部を挿入するものである。脚部の透孔は1段3孔をあける。**85**は外面に縦方向のナデ調整、脚部内面にナデ調整、受部内面にナデ調整を施す。受部外面端部付近には僅かに横方向のヘラミガキ調整の痕跡が確認できる。口縁端部外面に面を持ち、端部は上方へつまみあげる。受部と脚部の接合部の外面には工具痕が残る。**86**は外面を縦方向のヘラケズリ調整後縦方向のヘラミガキ調整、脚部内面にナデ調整、受部内面を縦方向のヘラミガキ調整を施す。口縁端部はヨコナデ調整し、外面に面を持ち、端部を上方へつまみあげる。黒斑が確認できる。**87**は外面に縦方向のヘラケズリ調整、内面に縦方向のヘラミガキ調整を施す。口縁端部はヨコナデ調整し、端部は内面に僅かに肥厚する。脚部との接合面には放射状の刻目が確認できる。脚部と受部との接合法は、受部底部に脚部を挿入するものである。**88**は脚部外面に縦方向のヘラミガキ調整、脚部内面にナデ調整、受部内面に縦方向のヘラミガキ調整を施す。脚部端部はヨコナデ調整し、外面に面を持つ。脚部の透孔は1段3孔をあける。**89**は脚部外面に縦方向のヘラミガキ調整、脚部内面は上半に斜め方向のハケメ調整、下半に横方向のハケメ調整、受部内面にはナデ調整を施す。**90**は脚部外面に横方向のヘラミガキ調整、脚部内面にナデ調整、受部内面にはナデ調整を施す。脚部の透孔は1段3

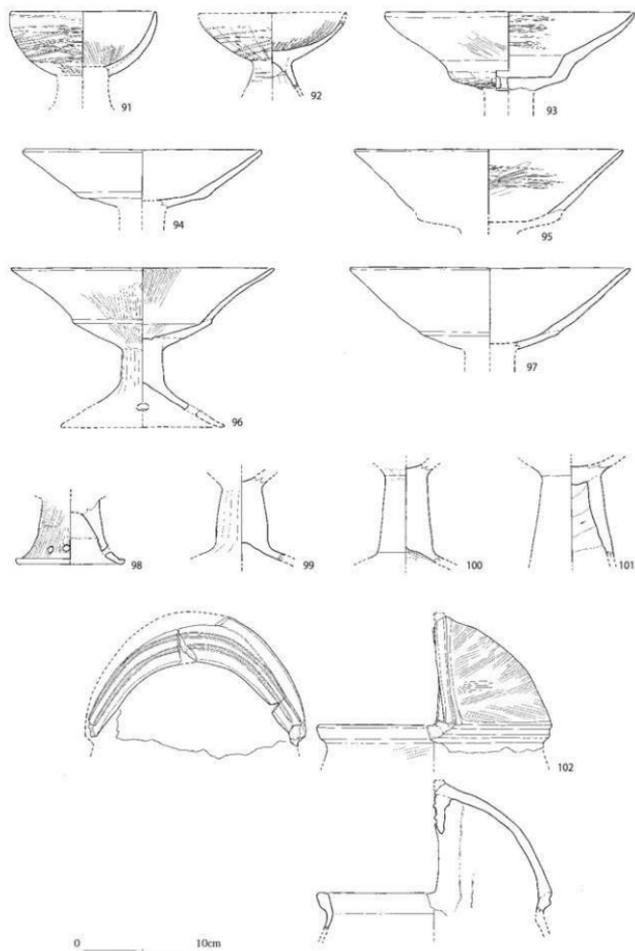


图 23 SD20 出土遺物実測図 (4) (S=1/3)

孔をあける。

高杯(91～101) 91は外面に横方向の密なヘラミガキ調整、内面に縦方向のヘラミガキ調整を施す。脚部と杯部との接合法は、受部底部に脚部を挿入するものであると考えられる。92は脚部外面に横方向のヘラミガキ調整、脚部内面にナデ調整、杯部外面に縦方向のヘラヘズリ調整後横方向のヘラミガキ調整、杯部内面に縦方向のヘラミガキ調整を施す。杯部外面底部付近には縦方向の工具痕が残る。脚部から杯部にかけて一体で成形した後、杯部底部に粘土塊を充填したものと考えられる。93は杯底部外面に横方向のヘラヘズリ調整後、脚部との接合部付近を中心に横方向のヘラミガキ調整、杯部外面にヨコナデ調整、杯部内面にヘラミガキ調整を施す。杯部外面には縦方向のハケメ調整の痕跡が残る。杯底部には直径5mmほどの孔があげられている。脚部頂に杯部底面を載せるように接合したものと考えられる。94は表面劣化のため内外面ともに調整不明である。95は口縁部外面にヨコナデ調整、口縁部外面に横方向のヘラミガキ調整を施す。杯底部の上に載る形で接合する。96は外面及び杯部内面に縦方向のヘラミガキ調整、脚部内面にナデ調整を施す。杯口縁部は杯底部の上に載る形で接合し、接合部外面には明瞭な稜線が廻る。脚部と杯部との接合は、脚部頂に杯部底面を載せて行う。97は表面劣化のため内外面ともに調整は不明である。杯口縁部は杯底部の上に載る形で接合し、接合部外面には不明瞭な稜線が廻る。98は外面に縦方向のヘラミガキ調整、内面にナデ調整を施す。脚端部はヨコナデ調整し、端部は上方つまみあげる。透孔は2孔一組で3組をあける。99は脚部外面に縦方向のナデ調整、脚部内面にナデ調整、杯部内外面にナデ調整を施す。脚柱部外面には部分的に縦方向のヘラミガキ調整が観察できる。100は内外面ともに表面劣化のため調整不明であるが、脚部内面及び杯部との接合部付近の外面にユビオサエ痕が観察できる。101は脚部外面にナデ調整、脚部内面に横方向のヘラヘズリ調整、杯部内外面にナデ調整を施す。脚部から杯部にかけて一体で成形した後、杯部底部に粘土塊を充填したものと考えられる。

手焙形土器(102) 102は外面にナデ調整後粗いハケメ調整、内面にナデ調整を施す。面は覆部端部下方に付加して形成され、2条の凸線が施文される。

これらの遺物は、弥生時代後期末～古墳時代前期にかけてのものだが、庄内式後半期～古墳時代前期初頭の時期が中心となる。出土土器群は、完形になると考えられるものが多くあるが、遺存状態が全体的に悪く、全形を復元できないものが多かった。一方で、広範囲にわたって出土するものもあり、完形の状態で溝内に捨てたものと、土器を破碎後、破片を溝内に捨てたものがあったことがわかる。

#### SD37 (図 19)

壺(20) 20は二重口縁壺口縁部である。外面に縦方向のハケメ調整後ヨコナデ調整、内面にヨコナデ調整を施す。口縁端部には面を持ち、1条の沈線が廻る。

鉢(21) 21は小型鉢口縁部である。体部内面は表面劣化のため調整不明、外面及び口縁部内外面に横方向の密なヘラミガキ調整を施す。

これらの遺物は庄内式後半から布留式前半のものである。

#### SD75 (図 19)

壺(22) 22は広口壺の口縁部である。頸部外面に縦方向のヘラミガキ調整、頸部内面に縦方向のナデ調整を施す。口縁部はヨコナデ調整をし、口縁端部に2条の凹線を施し、円形浮文を貼り付ける。弥生時代後期前半のものである。

#### SD215 (図 19)

壺(23・24) 23は二重口縁壺の口縁部である。内外面ともにナデ調整を施し、1次口縁部と2次口縁部との接合部外面にはユビオサエ痕が残る。24は二重口縁壺の2次口縁部である。内外面ともに

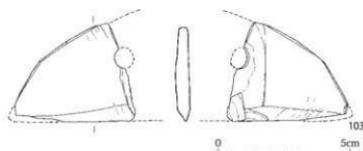


図24 SK13出土遺物実測図 (S=2/3)

ヨコナデ調整する。やや内側に傾いて直立する形態をとり、口縁端部には面を持ち、外方へつまみ出す。1次口縁部との接合は、1次口縁部内面に2次口縁部が載る形態と推定できる。

甕(25～31) 25～31は甕口縁部である。25は体部外面に横方向のハケメ調整、体部内面に横方向のヘラケズリ調整を施す。口縁部はヨコナデ調整をし、口縁端部内面を僅かに肥厚させる。26・27は内外面ともに表面劣化が著しく、調整などは不明。口縁端部内面を肥厚させる。28は内外面ともにヨコナデ調整をし、口縁端部を上方につまみあげる。29は体部外面にタタキ調整後ナデ調整、内面に横方向のヘラケズリ調整を施す。口縁部はヨコナデ調整を施す。30は体部外面にナデ調整、体部内面にヘラケズリ調整を施す。口縁部はヨコナデ調整し、口縁端部には面を形成する。31は体部は内外面ともに表面劣化のため調整不明、口縁部にヨコナデ調整を施す。

器台(32・34) 32は器台の受部である。内外面ともに表面劣化が著しく、調整などは不明である。34は器台の脚部である。脚部外面に横方向のミガキ調整、脚部内面にナデ調整を施す。受部には内外面ともにナデ調整を施す。受部と脚部との接合法は、受部底部に脚部を挿入するものである。

高杯(33) 33は高杯の脚柱部である。外面に横方向のヘラミガキ調整、内面にナデ調整を施す。杯部との接合法は杯底部に脚柱部を挿入するものである。

これらの遺物は古墳時代前期のものである。

#### SK13(図24)

石包丁(103) 103は磨製石包丁である。一部のみ出土であるが、全形は杏仁形を呈すると考えられる。紐部の穿孔は1孔が確認でき、両面からの穿孔がなされる。刃部は腹面側に研ぎ出す。石材は結晶片岩である。

### 第3節 古墳時代中期から後期の遺構・遺物

#### (1) 遺構

##### 方形周溝墓

##### SZ55(遺構:図25、遺物:図36・37)

S～X-27～33区で検出した方形周溝墓である。封土及び埋葬施設は残っていない。平面規模は東西約12m、南北12.2mを測る。主軸は西溝で座標北から約36°東へ振れる。周溝は断面形態が浅い「U」字形を呈し、幅0.7～1.0m、深さ0.1～0.2mであるが、周溝肩部の片側のみしか検出できていない部分も多く、本来の幅は最も大きい部分では2mほどであった可能性がある。溝底面の標高は58.4～58.5m前後で、北東部にいくにつれて高くなる傾向がある。

埋土は概ね3層からなり、上層から黄灰色シルト、黒褐色細砂、オリブ黒色シルトである。下層には地山ブロックが含まれており、この層は築造時に形成されたものであると考えられる。中・上層については築造後の自然堆積によるものである。

遺物には円筒埴輪・土師器・須恵器があり、古墳時代中期後半の特徴を示す。

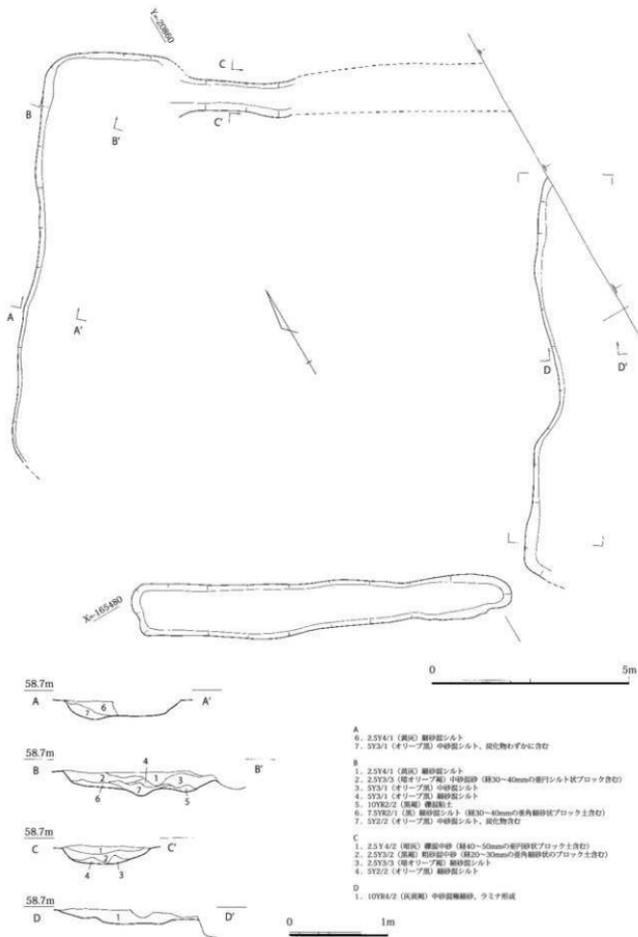


図 25 SZ55 平面・土層断面図 (平面 S=1/100 土層断面 S=1/40)

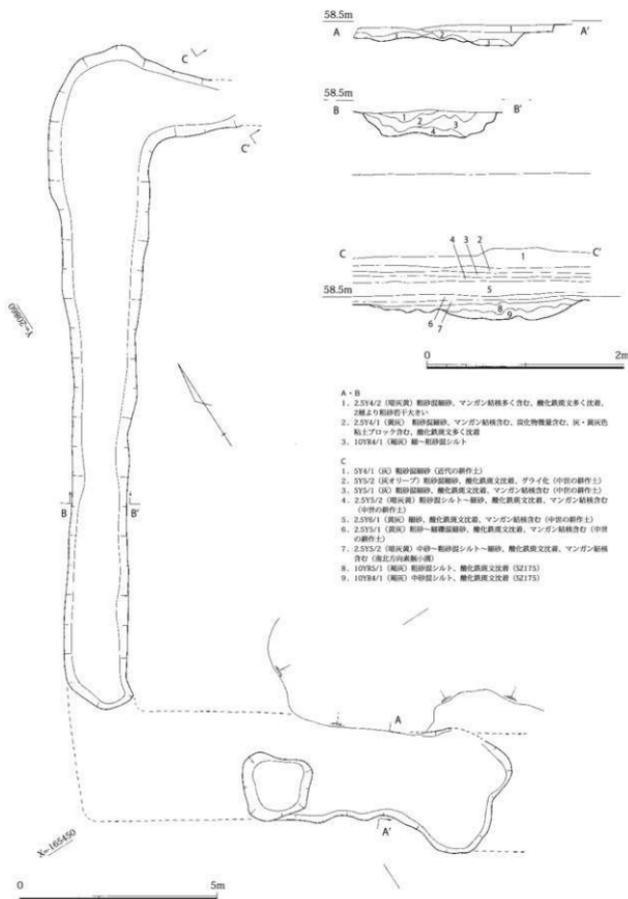


図 26 SZ100 平面・土層断面図（平面 S=1/100 土層断面 S=1/40）

## SZ100 (遺構：図26、遺物：図38)

U～X-16～21区で検出した方形周溝墓である。埋葬施設は残っておらず、西溝及び南溝の一部を確認した。平面規模は南北14.5m、東西は不明である。主軸は西溝で座標北から約34°東へ振れる。周溝は断面形態が浅い「U」字形を呈し、幅1.4～2.6m、深さ0.1～0.4mを測る。溝底面の標高は58.1～58.2m前後で標高差はほとんどみられない。

埋土は概ね3層からなり、上層から灰褐色シルト、褐色細砂、黒褐色細砂である。下・中層は築造から墳丘崩壊までの間の堆積と考えられ、上層はその後の自然堆積によるものである。

遺物はTK23型式～TK47型式期の須恵器が出土している。

## 掘立柱建物

## SB23 (図27)

W～X-36～37区で検出した。梁行二間×桁行三間の掘立柱建物である。平面規模は梁行4.3m、桁行4.7m、柱間平均値は梁間で2.1m、桁間で1.6mを測る。柱穴は長軸0.4～0.7mの平面楕円形を主体とし、深さ0.1～0.3mを測る。柱痕跡からは径0.2m程度の柱の存在が推定できる。建物主軸方位は座標北から30°26'04"東へ振れる。柱穴gと柱穴hの間には、ほぼ等間隔で並ぶ柱穴gが2基あり、

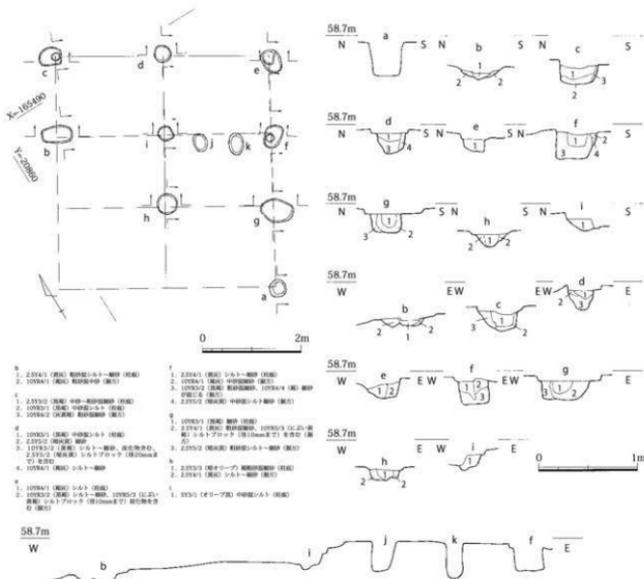


図27 SB23 平面・土層断面図 (平面 S=1/80 土層断面 S=1/40)

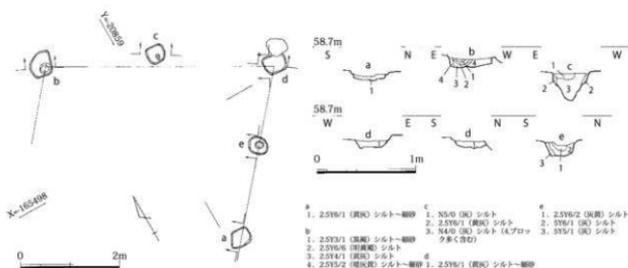


図28 SB24平面・土層断面図(平面S=1/80 土層断面S=1/40)

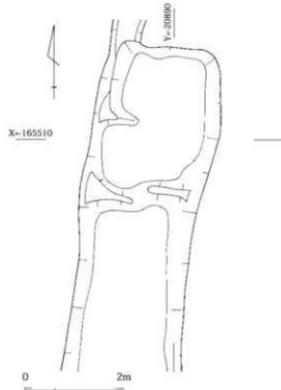


図29 SD11平面図(S=1/80)

梯子穴の可能性がある。

遺物は土師器壺・甕などが出土しているが、図示できるものはない。

#### SB24 (図28)

W～X-35～37区で検出した。梁行二間×桁行二間以上の掘立柱建物である。平面規模は梁行4.6m、桁行3.7m以上、柱間平均値は梁間で2.3m、桁間で1.8mを測る。柱穴は直径0.4～0.5mの平面隅丸方形を主体とし、深さ0.1～0.3mを測る。柱痕跡からは径0.2m程度の柱の存在が推定できる。建物主軸方位は座標北から40°31'22"東へ振れる。

遺物は土師器片が出土しているが、図示できるものはない。

#### 溝

#### SD11 (図29)

K～N-41～47区で検出した溝である。座標北から約30°西へ振れる方向で斜行し、L-44区で約10°東へ振れる方向へ屈曲する。L-41区で取東し、SD31と合流する。SD31との間に切り合い関係はみられない。

埋土はラミナが一部残るが擾乱が著しい。北端部は高さ10cm前後の群状に地山を削り残しており、常時浅い滞水状況を作り出していたと考えられる。機能については浄化用、苗代用などが考えられるが、特定することは困難である。

遺物は古墳時代後期の須恵器・土師器が出土しているが、図示できるものはない。

#### SD12 (遺構：図30・31、遺物：図39)

K～N-27～46区で検出した溝である。座標北から約15°東へ振れる方向で北流し、N-36区で東へ屈曲し、座標北から約57°東へ振れる方向に流れを変える。さらにP-35区で北へゆるやかに角度を変え、

座標北から約35°東へ振れる方向で北流する。V-28区でさらに東へ屈曲し、座標北から約86°東へ振れる方向へ流れを変え、調査区の東側へと伸びる。O～P-35区でSD21と交差するが、検出状況からは前後関係はみられず、同時併存していたと考えられる。断面形態は右肩に弱い段を持つ「U」字形を呈し、幅0.4～1.0m、深さ0.1～0.4mを測る。溝底部の標高は58.3～58.4m前後を測り、標高差はほとんどみられない。

埋土は概ね2層からなり、上層より、黄灰色細砂、黒褐色細砂である。穏やかな流水後、最終的に水が流れなくなった状態での自然堆積による埋没が考えられる。SD9の流れを概ね踏襲した溝であると考えることが出来る。

遺物は概ねTK10型式期の特徴を示す。

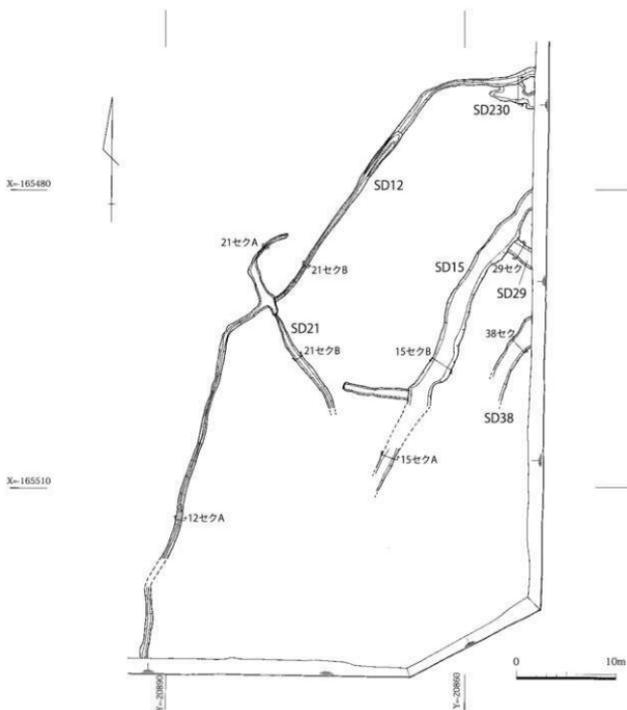


図30 古墳時代中期～後期溝平面図 (S=1/400)

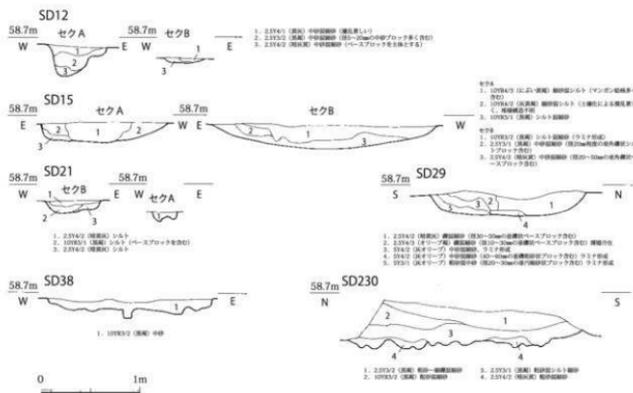


図31 古墳時代中期～後期遺土層断面図 (S=1/40)

SD15 (遺構：図30・31、遺物：図39)

S～X-31～42区で検出した溝である。座標北から約28°東へ振れる方向で斜行し、南端は調査区南東部の撓乱の中で途切れ、北端は調査区の東側へ伸びる。断面形態は浅い「U」字形を呈し、幅1.2～2.3m、深さ0.2～0.3mを測る。溝底部の標高は58.4m前後を測り、標高差はほとんどみられない。

埋土は黒褐色細砂である。流水の痕跡はみられず、自然堆積による埋没が考えられる。

遺物は、土師器・須恵器が出土しており、TK43型式期を中心とする。

SD21 (図30・31)

O～R-32～38区で検出した溝である。座標北から約32°東へ振れる方向で斜行し、O-34区で北へ屈曲し、座標北から約52°東へ振れる方向へ流れを変え、P-33区で途切れる。O～P-35区でSD21と交差する。断面形態は逆台形を呈し、幅0.2～1.1m、深さ0.1～0.2mを測る。溝底部の標高は58.4m前後を測り、標高差はほとんどみられない。

埋土は暗灰黄色シルトである。流水の痕跡はみられず、自然堆積による埋没と考えられる。

遺物は土師器・須恵器片が出土しているが、図示できるものはない。

SD28 (遺構：図30・31、遺物：図39)

R～T-38区で検出した溝である。座標北から西へ約82°振れる方向で斜行する。東端はSD15により失われている。断面形態は浅い「U」字形を呈し、幅0.7～1.1m、深さ0.2mを測る。溝底部の標高は58.4m前後を測り、標高差はほとんどみられない。

遺物はTK43型式期の須恵器が出土している。

SD29 (遺構：図30・31、遺物：図39)

X-32～33区で検出した溝である。座標北から西へ約54°振れる方向で斜行する。西端はSD15により失われており、東端は調査区東側へ伸びる。断面形態は「U」字形を呈し、幅1.5m、深さ0.2mを測る。

埋土は概ね2層からなり、上層より褐色細砂、黒褐色シルトである。流水の痕跡はみられず、自然堆積による埋没と考えられる。

TK10（新）型式期の須恵器杯蓋が出土している。

SD38（遺構：図30・31、遺物：図39）

W～X-35～39区で検出した溝である。座標北から約30°東へ振れる方向で斜行し、南端は調査区南東部の梶丸の中で途切れ、北端は調査区東側へ伸びる。断面形態は中心が部分的に深くなるが、浅い「U」字形を呈し、幅1.5～1.8m、深さ0.2～0.3mを測る。溝底部の標高は58.4m前後を測り、標高差はほとんどみられない。

埋土は黒褐色中砂である。流水の痕跡はみられず、自然堆積による埋没と考えられる。

X-36区の東肩部付近で須恵器短頸壺1個体がまともに出土している。

SD230（遺構：図30・31、遺物：図39）

W～X-18～19区で検出した溝である。座標北から65°西へ振れる方向で斜行する。後世の遺構により、全体の様相は不明だが、幅2.5m、深さ0.5mが残存する。

埋土は概ね2層からなり、上層より黒褐色細砂、黒褐色シルトである。流水の痕跡はみられず、自然堆積による埋没と考えられる。

MT15型式期の須恵器杯蓋などが出土している。

土坑

SK26（遺構：図32、遺物：図40）

V-34～35区で検出した土坑である。平面形態はややいびつな楕円形を呈し、平面規模2.2×1.45m、深さ0.2mを測る。断面形態は浅い「U」字形を呈する。

埋土はベース土ブロック混じりの灰黄褐色シルトである。掘り上げた土を利用して埋め戻したものと考えられる。

南端より、須恵器壺がまともに出土したほか、土師器高杯が出土している。

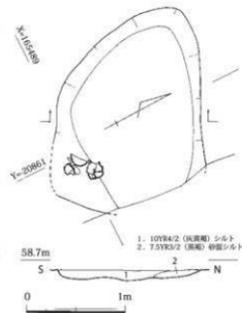


図32 SK26 平面・土層断面図 (S=1/40)

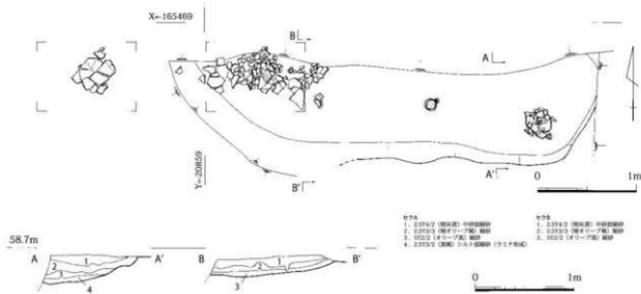


図33 SK65 平面・土層断面図 (S=1/40)

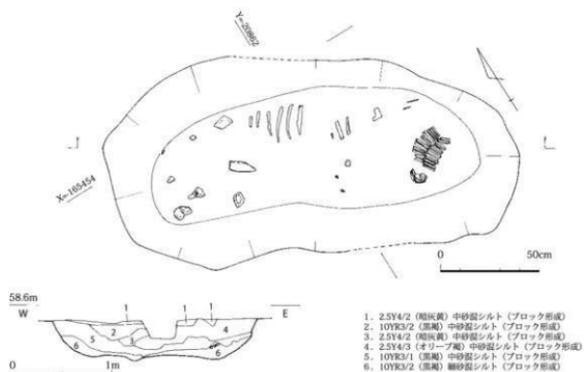


図34 SK120 平面・土層断面図 (平面S=1/20 土層断面S=1/40)



図35 SK120 馬の埋葬復元図

#### SK65 (遺構：図33、遺物：図41)

V～X-28区で検出した土坑である。後世の遺構による破壊のため、全形は不明であるが、残存する範囲での平面規模は $4.3 \times 1.2$  m、深さ0.2 mを測る。断面形態は浅い「U」字形を呈する。

埋土は暗灰黄色シルトであり、自然堆積により埋没したと考えられる。

遺物は北側より須恵器大型甕・器台・杯、南側より須恵器小型壺がまとまった状態で検出され、中央からも

完形の須恵器杯がいずれも底部にほぼ接するレベルで出土している。SZ55に接して掘削されており、时期的にも同時期であるため、古墳に関連する施設と考えられる。

#### SK120 (図34・35)

U～V-23区で検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し、平面規模は $2.1 \times 1.0$  m、深さ0.4 mを測る。長軸は座標北から約 $56^\circ$ 西へ振れる方位である。断面形態は逆台形を呈する。

埋土はベース土ブロックを主体とし、掘り上げた土を利用して埋め戻したものと考えられる。底部で馬の歯及び骨片を検出した。埋土及び検出状況より、馬は頭部を南東へ向け、脚部は曲げた状態で、横向けにして寝かされ、埋め戻されたものと推定できる。馬はメスで、年齢は5歳ぐらいと考えられる<sup>(1)</sup>。

遺物は出土していないが、すぐ北側にあるSZ100南溝に近在し、また西溝の主軸と直交することから関連が想定できる。

#### (2) 遺物

##### SZ55 (図36・37)

朝顔形埴輪(104～106) いずれも口縁部である。104は外面に縦方向のハケム調整、内面にナデ

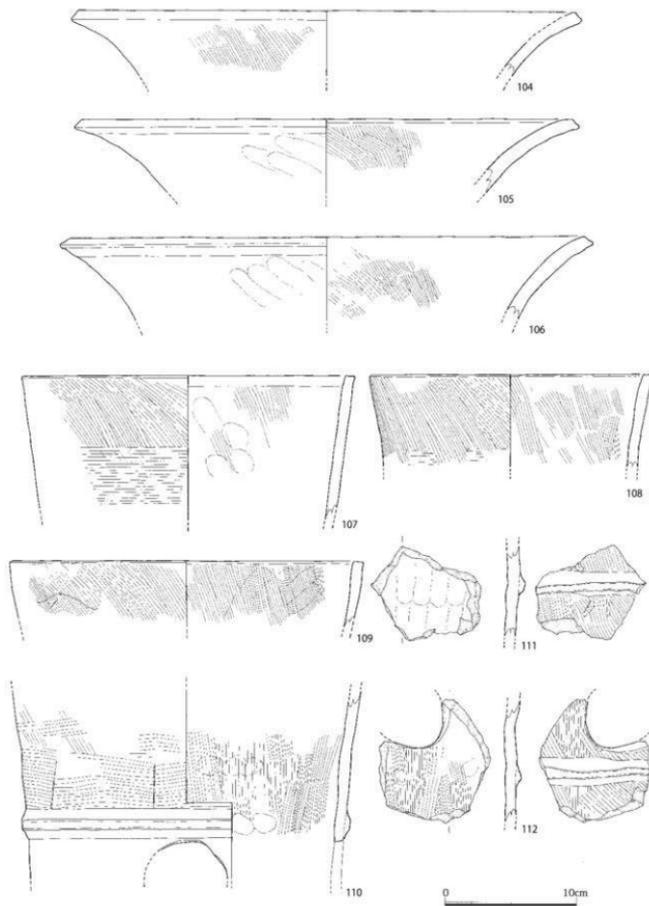


図 36 SZ55 出土遺物実測図 (1) (S=1/3)

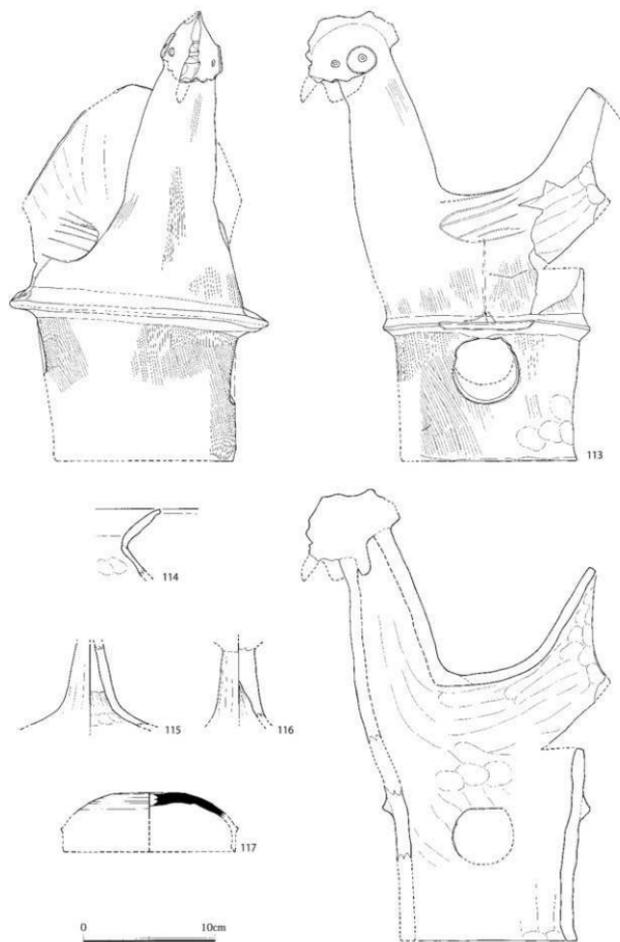


图 37 SZ55 出土器物实测图 (2) (S=1/3)

調整を施し、口唇部はヨコナデ調整する。105・106は外面に斜め方向のナデ調整、内面に縦方向のハケメ調整を施し、口唇部はヨコナデ調整する。

円筒埴輪(107～112) 107～109は口縁部である。外面に縦方向のハケメ調整後部分的に横方向のハケメ調整、内面に縦方向のハケメ調整を施す。107では内面にユビオサエ痕が残る。109の外面には線刻が確認できる。110～112は円筒埴輪胴部である。外面に縦方向のハケメ調整、内面に110・112では縦方向のハケメ調整、111では縦方向のナデ調整を施す。110・112では内面にユビオサエ痕が残る。110は突帯付近にBb種ヨコハケ(一瀬1988)を施す。110・112では透孔が確認できるが、いずれも円形である。

鶏形埴輪(113) 113は鶏形埴輪である。尾部を除いて全体の形がほぼ復元できる。頭部は嘴及び肉垂を欠損しており、形状は不明である。目は竹管文、耳は貼り付けた円盤に竹管文を施文することで表現されている。頭頂部はゆるやかに尖り、上端に刻目を入れることによって鶏冠が作りだされている。頸部は中空で外面に縦方向のハケメ調整、内面にナデ調整を施す。頭部は頸部に挿入する形で接合し、外面はナデにより接合部が消されているが、内面については無調整である。体部から尾部にかけては内外面ともにナデ調整され、尾部端部及び突帯付近の内面には、ユビオサエ痕が残る。体部外面には、羽及び脚を線刻によって表現する。円筒部との境には断面が丸みを帯びた三角形の突帯が廻るが、脚の表現されている部分では外方へ拡張されている。円筒部は外面に縦方向のハケメ調整、内面にナデ調整を施し、円形の透孔を穿つ。

SZ55出土の埴輪には報告外の破片も含めて、黒斑を観察したものはない。

土師器甕(114) 114は体部外面は表面劣化のため調整不明、体部内面にはナデ調整を施す。口縁部はヨコナデ調整する。体部内面にはユビオサエ痕が残る。

土師器高杯(115・116) 115は内外面ともにナデ調整を施す。内面にはシボリ痕及びユビオサエ痕が残る。116は外面に縦方向のナデ調整、内面にナデ調整を施す。内面にはシボリ痕が残る。

須恵器杯蓋(117) 117は天井部である。内外面とも回転ナデ調整し、天井部外面に回転ヘラケズリ調整、天井部内面に一方方向のナデ調整を施す。

これらの遺物は、古墳時代中期後半のものである。

#### SZ100(図38)

須恵器杯蓋(118・119) 118・119は内外面とも回転ナデ調整し、天井部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。

須恵器杯(120・121) 120・121は内外面とも回転ナデ調整し、天井部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。

118・120の外面の一部には自然釉がかかる。

須恵器甕(122) 122は甕の口縁部である。内外面ともに回転ナデ調整を施す。

有孔円板(123) 123は一部を欠損するが、直径2.9cmの不整円形を呈し、厚さ0.5cmを測る。両面に研磨痕が残る。中央1箇所にて径0.2cmの孔が穿たれる。滑石製である。

これらの遺物は、TK23型式～TK47型式にかけてのものである。

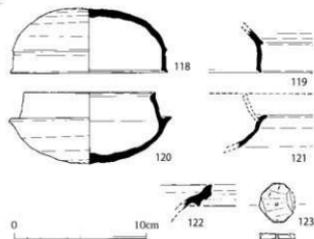


図38 SZ100出土遺物実測図(S=1/3)

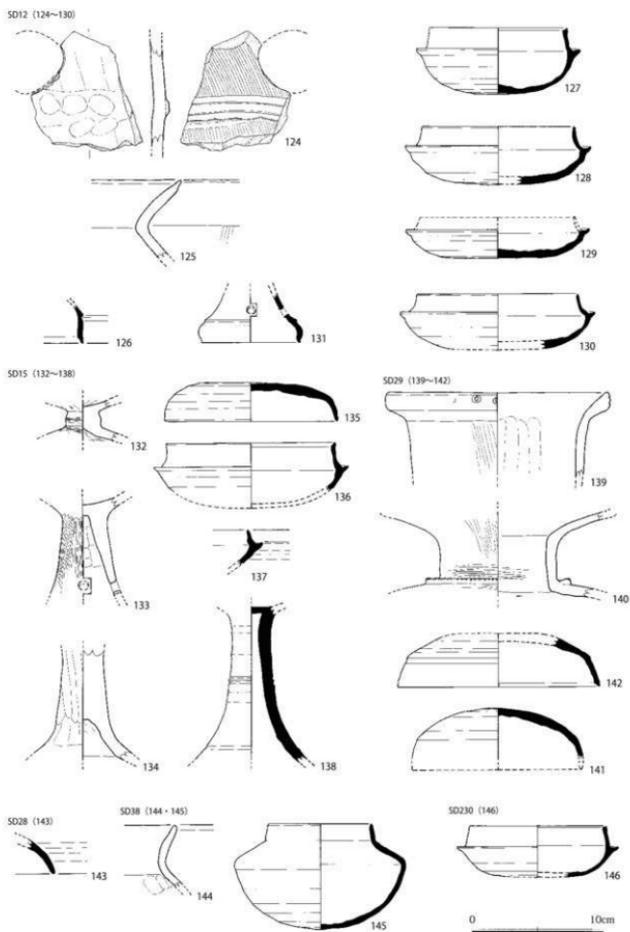


图 39 SD12・15・28・29・38・230 出土遺物実測図 (S=1/3)

## SD12 (図 39)

円筒埴輪(124) 124は外面に縦方向のハケメ調整、内面にナデ調整を施す。内面にはユビオサエ痕が残る。突帯の断面形態は低い台形を呈する。円形の透孔が確認できる。

土師器甕(125) 125は甕の口縁部である。内外面ともにナデ調整を施し、体部外面にはハケメ調整の痕跡が確認できる。口縁端部外面に面を持ち、端部は尖り気味である。

須恵器杯蓋(126) 126は内外面とも回転ナデ調整し、外面には自然釉がかかる。

須恵器杯(127～130) 127～130は内外面ともに回転ナデ調整し、底部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。

須恵器高杯(131) 131は内外面ともに回転ナデ調整を行い、透孔は1段4孔をあけたものと考えられる。外面には自然釉がかかる。

これらの遺物のうちには、TK47型式期のものも含むが、これはSZ55に伴うものと考えられ、本遺構の機能時に属する遺物は、TK10型式期を中心とするものである。

## SD15 (図 39)

土師器高杯(132～134) 132は脚部外面に縦方向のハケメ調整後横方向のヘラミガキ調整、脚部内面に横方向のハケメ調整、脚柱部外面に横方向のヘラミガキ調整、杯部外面に横方向のヘラミガキ調整、杯部内面にナデ調整を施す。杯部内面には工具痕が残る。133は脚部外面に縦方向のヘラミガキ調整、脚部内面に横方向のヘラケズリ調整、杯部内面にナデ調整を施す。外面に黒斑が確認できる。134は脚部内外面にナデ調整、脚柱部外面に幅の広い縦方向のヘラミガキ調整を施す。脚部内面には刺突痕が残る。

須恵器杯蓋(135) 135は内外面ともに回転ナデ調整し、天井部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。口縁端部は丸くおさめる。

須恵器杯(136・137) 136・137は内外面ともに回転ナデ調整し、底部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。

須恵器高杯(138) 138は高杯脚部である。内外面ともに回転ナデ調整を施す。脚部中程に凹線2条が廻る。

これらの遺物のうち、132・133はSZ50に、136はSZ55に伴うものと考えられ、本遺構の機能時に属する遺物は、TK43型式期を中心とするものである。

## SD28 (図 39)

須恵器杯蓋(143) 143は内外面とも回転ナデ調整する。天井部と口縁部の境の稜線は完全に喪失している。TK43型式期のものである。

## SD29 (図 39)

土師器壺(139・140) 139は壺口縁部である。頸部外面に縦方向のヘラミガキ調整、頸部内面に縦方向のナデ調整を施し、口縁部はヨコナデ調整する。口縁部は直線的な頸部から強く外反し、端部は外面に面を持つ。端部には竹管文が施文される。140は壺頸部である。外面は体部から頸部にかけて横方向のヘラミガキ調整、口縁部に縦方向のヘラミガキ調整、内面は体部に横方向のヘラケズリ調整、頸部に横方向のヘラミガキ調整、口縁部にナデ調整を施す。体部と頸部との境の外面には突帯を貼り付け、突帯には刻目がつけられる。

須恵器杯蓋(141・142) 141・142は内外面ともに内外面ともに回転ナデ調整し、天井部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。

これらの遺物のうち、本遺構の機能時に属するものは141・142であり、TK10(新)型式期のもの

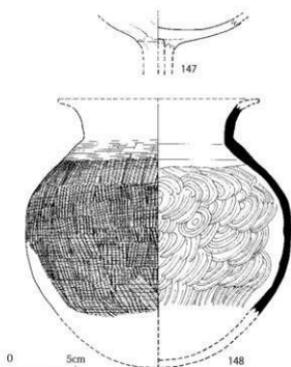


図40 SK26出土遺物実測図 (5=1/3)

底部には、脚部との接合の際の棒状工具による刺突痕がある。

須恵器壺(148) 148は体外外面にタタキ調整後カキメ調整がされ、体内内面にはタタキ調整時の当て具痕が残る。口縁部はヨコナデ調整する。

#### SK65 (図41)

須恵器杯蓋(149～151・155) 149～151・155は内外面ともにナデ調整し、天井部外面にヘラケズリ調整を施す。149は外面天井部に焼成の際に裏体部片が融着し、自然軸がかかる。

須恵器杯(152～154) 152～154は内外面ともにナデ調整し、天井部外面にヘラケズリ調整を施す。154は内底面のナデ消した当て具痕が確認できる。

須恵器器台(156) 156は内外面ともに回転ナデ調整し、外面には上から3条の凹線、2条の櫛描波状文、1条の凹線を施す。波状文帯以下は施文前にカキメ調整が施されている。内面には自然軸がかかる。

須恵器壺(157) 157は体部は外面にタタキ調整後カキメ調整し、内面は当て具痕をスリ消している。口縁部は回転ナデ調整し、外面には上から1条の凹線、1条の櫛描波状文、1条の凹線を施す。口縁端部には2条の凹線を施す。頸部内面には口縁部と体部の接合の際の接合痕とユビオサエ痕が残る。

須恵器甕(158～160) 158～160は同一個体と考えられる甕である。底部は中心が弱く凹む丸底風の形態をとる。底部から体部にかけては、外面をタタキ調整し、内面には当て具痕が残る。口縁部は回転ナデ調整し、外面にはカキメ調整後、櫛描波状文と凹線を交互に施す。口縁端部は上下に拡張し、端部よりやや下がった位置の外面には突線が廻る。体部外面の上半から口縁部にかけて自然軸が部分的にかかり、底部に内面にも僅かに観察できる。頸部内面には口縁部と体部の接合の際の接合痕とユビオサエ痕が残る。

土製円板(161) 161は須恵器甕の体部を転用した土製円板である。外面はタタキ調整し、内面には当て具痕が残る。直径3.6cm、厚さ1.1cm、重さ18.5gを測る。

これらの遺物は、TK208型式～TK23型式期のものである。

である。

#### SD38 (図39)

土師器甕(144) 144は内外面ともに表面劣化のため、調整は不明であるが、内面の頸部下付近にはユビオサエ痕が確認できる。

須恵器壺(145) 145は内外面とも回転ナデ調整し、体部外面下半を回転ヘラケズリ調整する。底部は丸底で、肩は張り、口縁部は短くやや内傾しながら直線的に立つ。

これらの遺物は、TK43型式期のものである。

#### SD230 (図39)

須恵器杯(146) 146は内外面とも回転ナデ調整し、天井部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。MT15型式期のものである。

#### SK26 (図40)

土師器高杯(147) 147は内外面ともにナデ調整し、脚部との接合部にはユビオサエ痕が残る。

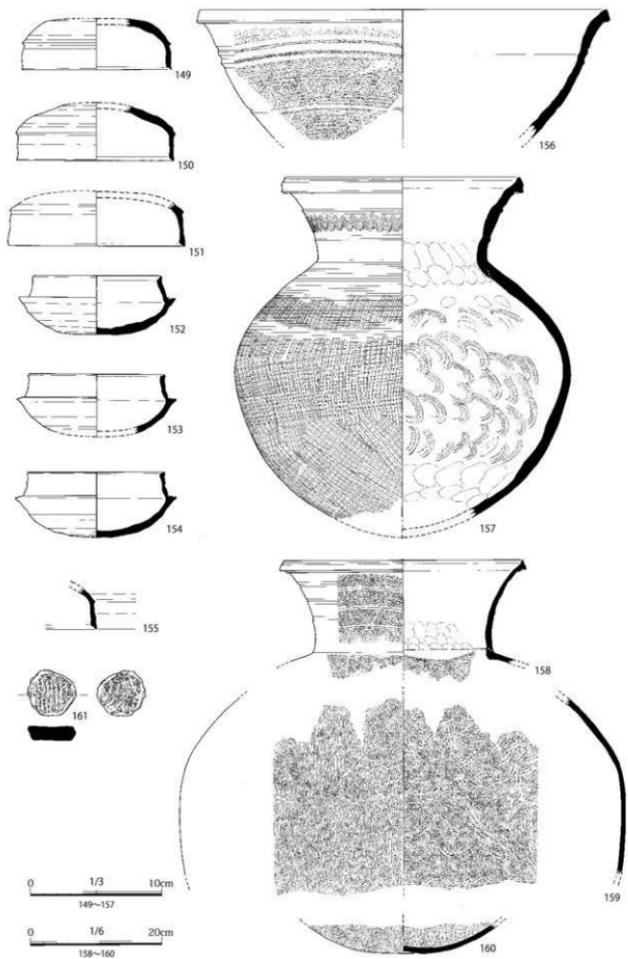


図41 SK65 出土遺物実測図 (S=1/3・1/6)

## 第4節 古代の遺構・遺物

## (1) 遺構

## 掘立柱建物

## SB22 (図42)

W・X-36・37区で検出した。南北二間、5基の柱穴で構成される東西主軸の掘立柱建物であるが、西半分は攪乱により破壊されるため、平面規模は不明である。柱間平均値は東西1.15m、南北0.87mを測る。総延長3.2mを測る。柱穴は長軸約0.32～0.6m、短軸0.3～0.45mを測る平面隅丸方形を主体とし、深さ約0.4mを測る。大半が柱の抜き取りを行うため、柱直径などは詳らかではないが、わ



図42 SB22平面・土層断面図 (平面S=1/80 土層断面S=1/40)

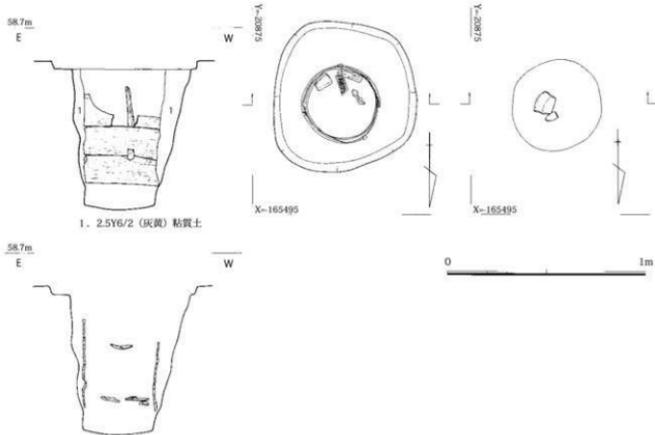


図43 SE45平面・土層断面図 (S=1/20)

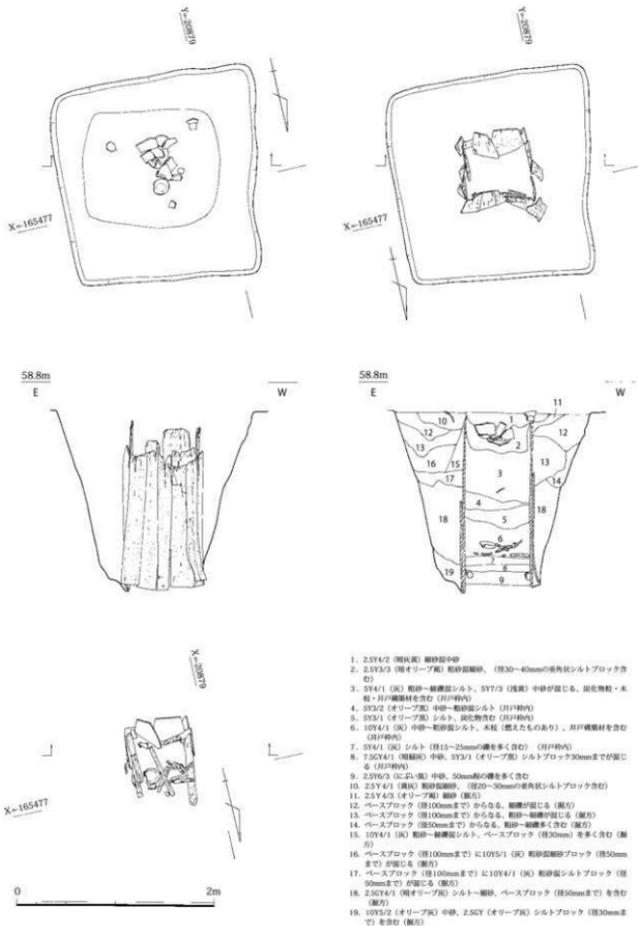


図44 SE70平面・土層断面 (S=1/40)

ずかに残る柱痕跡からは径 0.2m 前後の柱の存在が推定できる。主軸方位はほぼ正方位である。

遺物は、柱穴から土師器・須恵器の細片が出土しているが、時期決定は困難である。

#### 井戸

##### SE45 (遺構：図 43、遺物：図 45)

Q-37 区で検出した。掘り方直径 0.75 m を測り、直径 0.37 m の曲物井戸枠を据える。曲物は 3 段が残存し、上段 2 段分は棒状材により結束する。枠内埋土は一貫してシルト～粘土の自然堆積層である。

遺物は、下層より 9 世紀後半～10 世紀初頭の土器、磁石、横櫛が、0.2 m ほど上位より同時期の土師器杯が出土している。

##### SE70 (遺構：図 44、遺物：図 46)

Q-30・31 区で検出した。掘り方一辺 2 m を測り、方形を呈する縦板組井戸である。枠内は内法約径 0.6m を測り、厚さ約 1～5 cm の板材を組み合わせ、最下部に丸棒材を井桁状に組んだ材を配置する。検出時には、北側の井戸枠は土圧により内側へ倒れている状態であった。

枠内は 1～2 層（褐細砂）はブロック土を含む人為的埋土で、土師器移動式甕・杯・甕・釜、黒色土器杯などが出土している。甕は完形にならず、どこかで破砕された後意図的に投棄されたものと考えられる。4～6 層（灰粘土）は有機物を含む砂混じりシルトであり、6 層からは多量の 9 世紀末～10 世紀前半の遺物が出土している。遺物の配置に規則性はなく、無造作に投棄された状況である。7 層は 1.5～2 cm の礫を多量に含み、機能時の濾過施設と考えられる。この層の下位にはブロック土を含む人為的埋土（8 層）と、やはり礫を敷く 9 層が存在している。掘削当初は 9 層を濾過装置として使用していたが、何らかの理由で不都合が生じ、一旦埋めたのち再び 7 層を敷設した可能性がある。しかし、8 層下面に機能時の自然堆積層を確認できなかったことから、7～9 層が一連の濾過装置であった可能性も否めず、ここでは断定を避けたい。

遺物は上述した褐細砂出土のものほかに、底部付近より土師器杯・皿、横櫛、刀子などが出土している。

#### (2) 遺物

##### SE45 (図 45)

土師器皿 (162) 162 は皿 A である。体部コビオサエ成形し、口縁部にヨコナデ調整を施す。9 世紀後半～末のものである。

横櫛 (163) 163 は長方形で肩部が角ばる A1 型式 (奈良国立文化財研究所 1993) である。表面

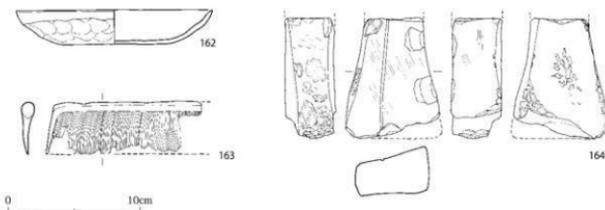


図 45 SE45 出土遺物実測図 (S=1/3)

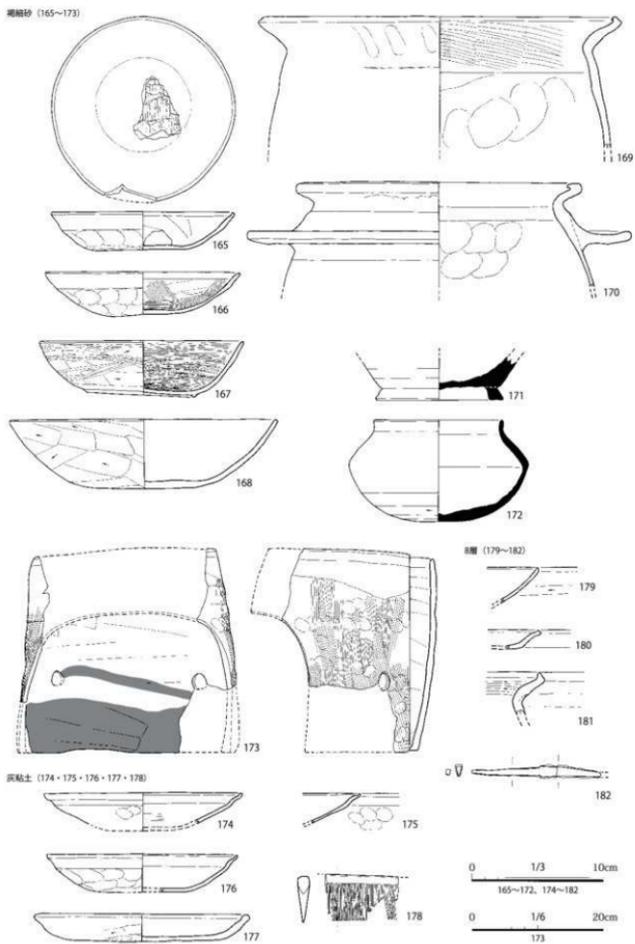


図46 SE70出土遺物実測図 (S=1/3・1/6)

を丁寧に磨き上げ、櫛歯の引き出し開始の割り付け線は明確でない。櫛歯の数は細かく、3cmあたり32～35本を数える。

砥石(164) 164は細粒の硬質砂岩製である。四面に擦痕を有し、上下を折損する。二面および上面には敲打痕を有し、一部は被熱する。砥石としての機能終了後に別の用途で使用されたと考えられる。SE70(図46)

#### 褐細砂出土遺物

土師器杯(165・166・168) ともに杯Aである。165は体部ユビオサエ成形、口縁部横方向のユビオサエを行う。内部には炭化物が付着する。166は体部ユビオサエ成形、口縁部横方向のナデ調整、内面不定方向のハケメ調整を行う。168は大型のものである。外面手持ちヘラケズリ調整を行い、口縁部をヨコナデ調整する。

黒色土器椀(167) 167はA類椀である。外面手持ちヘラケズリの後ヘラミガキ調整、内面密なヘラミガキ調整を行う。

土師器甕(169) 169は外面ナデ調整、内面オサエ工具痕を多く残し、口縁部に横方向のハケメ調整を施す。体部には黒斑を有する。

土師器釜(170) 170は内面オサエ工具痕を有し、外面はナデ調整する。内外面煤の付着がみられ、全体が被熱する。

須恵器壺(171・172) 171は壺Aの底部である。内外面回転ナデ調整を行い、底部外面には煤が付着する。172は肩部以下を回転ヘラケズリ調整し、上半を回転ナデ調整する。

土師器甕(173) 173は円筒形の移動式甕である。底を持たず、側面やや背面寄りに持ち運び用の孔を持つ。外面縦方向のハケメ調整、内面ナデ調整を施し、内面には煤の付着がみられる。胎土は土師器釜(170)と同一である。

これらの遺物は171が藤原京期～奈良時代前期、172が古墳時代後期のものであるほかは、9世紀末～10世紀前半のものである。

#### 灰粘土出土遺物

土師器杯(174～176) 174～176はいずれも杯Aで、内外面体部ユビオサエ成形ののち、口縁部を横方向のナデ調整で成形する。いずれも薄手のものであるが、162は口縁部の面が大きい。

土師器皿(177) 177は皿Aである。内面ナデ調整、外面手持ちヘラケズリ調整を行い、内面は煤が付着する。

これらの遺物は9世紀末～10世紀前半のものである。

横櫛(178) 178は表面を丁寧に磨き上げ、櫛歯の引き出し開始の割り付け線は明確でない。櫛歯の数は細かく、3cmあたり32本を数える。

これらの遺物は9世紀末～10世紀前半のものである。

#### 8層出土遺物

土師器杯(179) 179は杯Aである。内面ナデ調整、外面手持ちヘラケズリ調整する。

土師器皿(180) 180は皿Aである。内外面ナデ調整を行うが、細片のため底部外面のヘラケズリ調整の有無については不明である。

土師器甕(181) 181は外面ナデ調整、内面横方向の粗いハケメ調整を行い、被熱痕を有する。

鉄製刀子(182) 182は使用により刃部が著しく矮小化している。着柄部は若干歪み、木質等は残存しない。

これらの遺物は9世紀半ば～後半のものである。

## 第5節 中世の遺構・遺物

## (1) 遺構

## 掘立柱建物

## SB80 (図47)

V・W:25・26区で検出した。東西二間×南北三間の掘立柱建物である。平面規模は東西3.6m、南北5.2m。柱間平均値は東西1.8m、南北1.7mを測る。柱穴は長軸約0.28～0.48m、短軸0.24～0.39mを測る平面隅丸方形を主体とし、深さ約0.3m前後を測る。大半の柱穴に柱痕跡が残存し、痕跡からは径0.15m前後の柱の存在が推定できる。主軸方位はほぼ正方位である。

遺物は、柱穴埋土より古墳時代の土師器細片が出土しているが、時期決定は困難である。

## SB81 (図48)

T・24・25区で検出した。南北一間×東西二間の掘立柱建物である。平面規模はやや不整形で、およそ東西1.9m、南北1.7mを測る。柱穴は長軸約0.15～0.25m、短軸0.25～0.3mを測る円形を基調とし、深さ約0.1～0.2mを測る。柱痕跡からは径0.1m前後の柱の存在が推定できる。主軸方位は

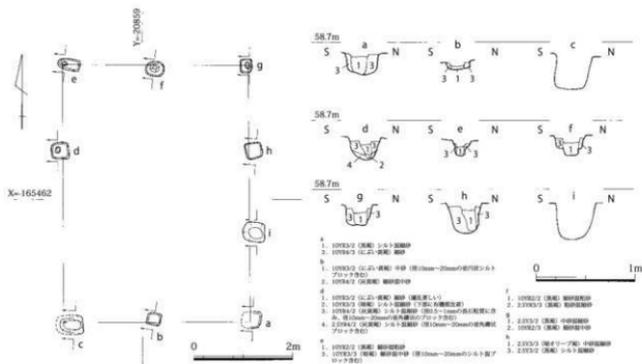


図47 SB80 平面・土層断面図 (平面S=1/80 土層断面S=1/40)

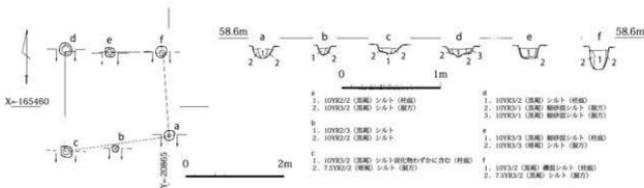


図48 SB81 平面・土層断面図 (平面S=1/80 土層断面S=1/40)

ばらつきがあり断定はできないが、正方位を指向していると思われる。

遺物は、柱穴から土師器の細片が出土しているが、時期決定は困難である。

#### SB110 (図 49)

N～P 27～29 区で検出した。東西二間×南北三間の掘立柱建物であるが、北西隅と西列3行目柱穴を削平により失う。平面規模は東西3.25m、南北6m、柱間平均値は東西1.6m、南北2.0mを測る。柱穴は長軸約0.3～0.65m、短軸0.26～0.42mを測る平面隅丸方形～楕円形を主体とし、深さ約0.15m前後を測る。大半の柱穴に柱痕跡が残存するが、柱穴a・bは抜き取りが行われている。柱痕跡からは径0.15m前後の柱の存在が推定できる。主軸方位は座標北に対し2°51'44"東へ振る。

遺物は、柱穴埋土より古墳時代の土師器細片が出土しているが、時期決定は困難である。

抗列

#### SA115 (図 50)

P 26・27 区で検出した。3基の柱穴で構成される南北方向の櫛列である。柱間平均値は1.6mで、総延長3.2mを測る。柱穴は長軸約0.3m、短軸0.14～0.28mを測る平面楕円形を主体とし、深さ約0.1mを測る。柱痕跡からは径0.1m前後の柱の存在が推定できる。主軸方位は座標北から3°45'16"東へ振れる。西に隣接する掘立柱建物SB110と関係すると考えられるが、詳細は不明である。

遺物は出土していない。

#### SA125 (図 50)

S 24・25 区で検出した。4基の柱穴で構成される南北方向の櫛列である。北から2間目の柱穴を欠き、柱間平均値は0.99mで、総延長3.9mを測る。柱穴は長軸約0.28～0.32m、短軸0.16～0.23mを測る平面隅丸方形を主体とし、深さ約0.17～0.28mを測る。柱痕跡からは径0.1m前後の柱の存在が推定できる。主軸方位は座標北から0°35'15"西へ振れる。東に隣接する掘立柱建物SB81と関係すると考えられるが、詳細は不明である。

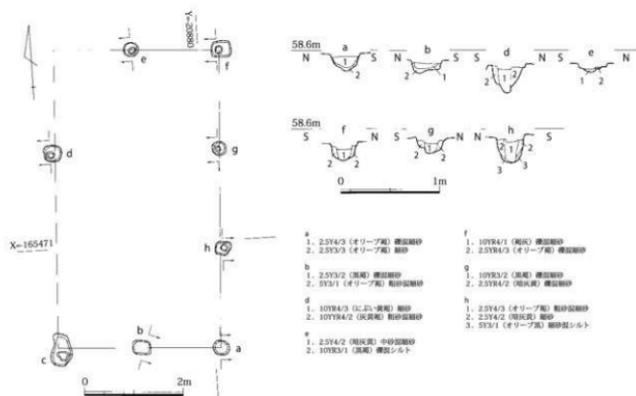


図 49 SB110 平面・土層断面図 (平面 S=1/80 土層断面 S=1/40)

遺物は、柱穴から土師器の細片が出土しているが、時期決定は困難である。

### 落ち込み

#### SX25 (遺構：図 51、遺物：図 52)

E～I-46・47区で検出した。東西検出長12m、南北検出長2.9m、深さ1.2mを測り、不整形を呈する土坑。埋土は7層が粗砂、6層が粘土であるほかはシルト～細砂で、いずれも自然堆積層と考えられる。肩部の傾斜は強く、若干起伏を持ち、貼り土などはみられない。擾乱が著しく、地山との境界が不明瞭である。埋土・形状・規模等から旧流路や低地などの自然地形である可能性が高い。

遺物は、埋土内より12～13世紀の土師器皿が出土している。

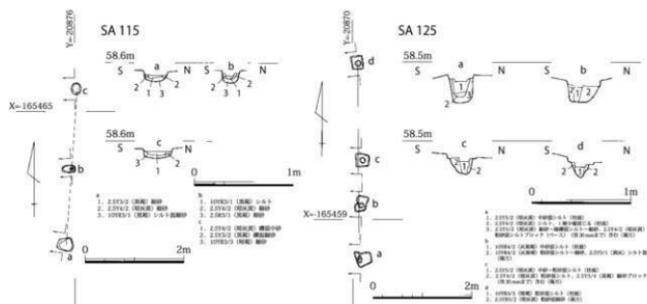


図50 SA115・125平面・土層断面図 (平面S=1/80 土層断面S=1/40)

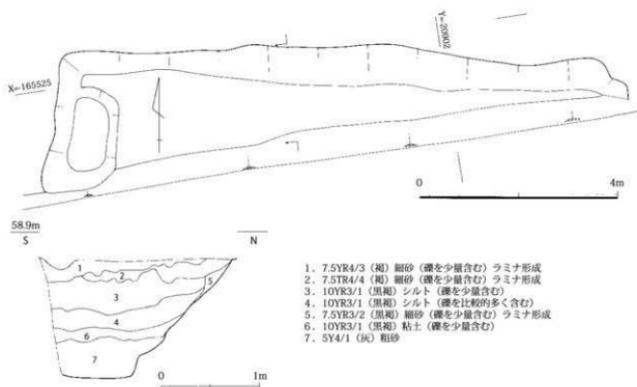


図51 SX25平面・土層断面図 (平面S=1/80 土層断面S=1/40)

### 素掘小溝（遺物：図 53）

素掘小溝はいずれも幅・深さともに 0.1～0.3m 前後を測り、調査区全面に展開する小溝である。耕作関連の溝と考えられ、埋土内に多数の刃先痕がみられる。埋土はいずれも擾乱が著しいが、ラミナ等は見られない。東西・南北方向に展開する。主軸方向の違いから大きく A 群と B 群に分けられる。A 群は座標北に対し 2°46°程度東に振るもので、調査区東半に南北方向のものが、南半に東西方向のものがみられる。B 群はほぼ座標方位に一致する方位を有し、全面に展開する。東西南北双方のものが存在し、切り合い関係からは東西南北が何度も転換した様子がうかがえる。A 群と B 群の関係については切り合い関係からは A 群が先行し、B 群が後出すると考えられる。

B 群からは 13 世紀半ばのほぼ完形の瓦器椀（205・206）などが出土しており、A 群からは 13 世紀半ばの土師器皿（196・197）が出土している。A 群の掘削から B 群への移行までは大きな時期差はないものと考えられる。

### (2) 遺物

#### SX25（図 52）

縄文土器深鉢（183）183 は二重突帯を持つ深鉢である。全体的に風化による劣化が著しい。突帯には D 字の刻みを施す。縄文時代晩期のものである。

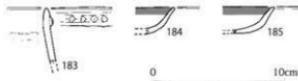


図 52 SX25 出土遺物実測図 (5=1/3)

土師器皿（184・185）184・185 はともに内外面風化のため調整等は不明であるが、形状から口縁部にやや強めのナデ調整を施していたことが分かる。口縁部には煤が付着する。12 世紀後半～13 世紀前半のものである。

#### 素掘小溝（図 53）

遺構の章で述べた通り、素掘小溝は大きく A 群と B 群に分かれる。また、帰属不明なものも可能な限り図化した。

#### 素掘小溝 A 群出土遺物

土師器皿（196・197・200）196・197 は小破片のため復元口径は正確さに欠ける。器高は低く、口縁部のナデは弱い。13 世紀半ばごろのものである。200 は口縁部のナデ調整が強い。13 世紀半ばごろのものである。

石鉢（216）216 は凹基式のものである。先端をわずかに欠くが、ほぼ完存する。重量 0.5g を測る。

#### 素掘小溝 B 群出土遺物

円筒埴輪（187）187 は外面に斜め方向のハケメ調整、内面をナデ調整する。内面には突帯接合時のユビオサエ痕が残る。突帯の断面形態は低い三角形を呈する。

土師器皿（193・195・199・201・202）193 は口縁端部を緩やかに外反させる。13 世紀半ば～後半のものである。195 は口縁端部を小さく面取りする。13 世紀前半のものである。199 は口縁部やや長く外反する。12 世紀後半～13 世紀前半のものである。201 は内面ナデ調整、外面手持ちヘラケズリ調整し、202 はユビオサエの後ナデ調整で仕上げる。いずれも 9 世紀半ば～後半のものである。

瓦器皿（194）194 はほぼ完形である。被熱による劣化のため調整等は不明である。13 世紀前半のものである。

瓦器椀（205・206・208・210）いずれもⅢ段階 B 型式の最も新しいもので、13 世紀第 2 四半期のものである。205 はほぼ完形、206 は体部中位以上を残し、被熱する。

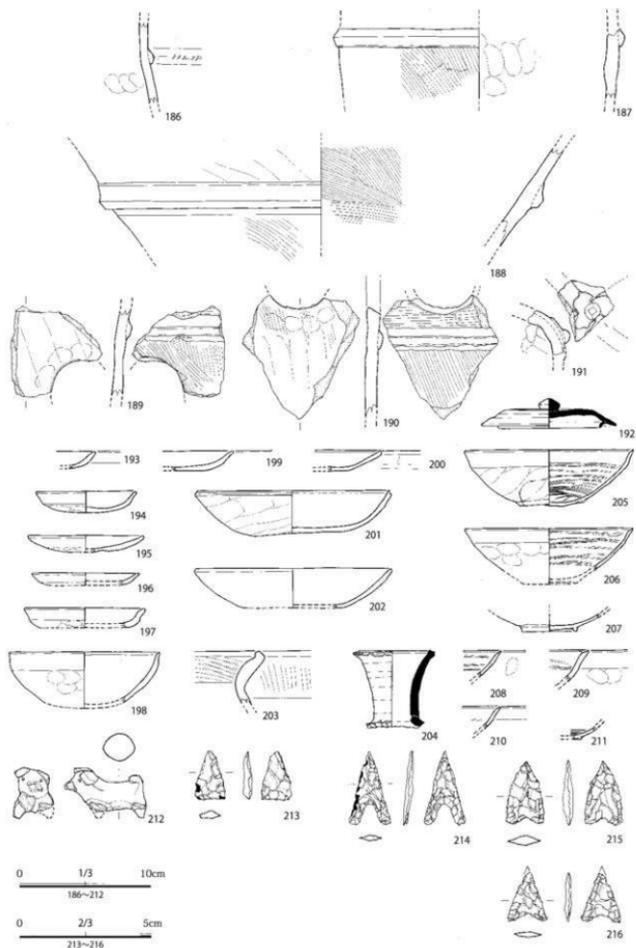


図 53 素掘小溝出土遺物実測図 (S=1/3・2/3)

土師器椀 (198) 198 は口縁端部に傾斜を残し、風化のため内外面調整等は不明である。飛鳥時代～藤原京期のものである。

土師器甕 (203) 203 は外面ナデ調整、内面横方向の粗いハケ調整を行い、被熱痕を有する。

須恵器蓋 (192) 192 は杯 B 蓋である。内外面回転ナデ調整を行い、天井部外面の宝珠つまみはやや大振りである。飛鳥時代のものである。

須恵器壺 (204) 204 は壺しである。内外面回転ナデ調整を行い、口縁部および口縁と体部境界付近を意図的に打ち欠く。奈良時代のものである。

石甌 (214・215) とともに凹基式のものである。214 は側縁を欠損するが、ほぼ完存する。重量 0.7g を測る。215 は重量 1.0g を測り、完存する。

#### 帰属不明素掘小溝出土遺物

朝顔形埴輪 (188) 188 は外面に斜め方向のナデ調整、ハケメ調整、内面に斜め方向のハケメ調整を施す。突帯の断面形態は低い台形を呈する。

円筒埴輪 (189・190) 189・190 はともに外面に縦方向のハケメ調整、内面にナデ調整を施す。内面には突帯接合時のユビオサエ痕が確認できる。突帯の断面形態は低い台形を呈する。

馬形埴輪 (191) 191 は頭部の辻金具にあたる部分である。内面にはユビオサエ痕が残り、目を表現したと考えられる透孔の一部が確認できる。

瓦器椀 (207・209・211) 207 は内外表面劣化のため暗文等は不明である。Ⅲ段階 A 型式新段階に相当し、13 世紀初頭のものである。209 はやや厚手で、内面のヘラミガキは密である。Ⅲ段階 A 型式のもので、12 世紀後半ごろの年代が考えられる。211 は細片のため詳細は不明である。Ⅲ段階 B～C 型式のもので考えられ、13 世紀前半から半ばの年代が考えられる。

犬型土製品 (212) 212 は両前足と左後足を欠失する。腹部には煤の付着がみられる。16 世紀後半～末のものと考えられる。

石甌 (213) 213 は凹基式のものである。側縁部をわずかに欠くが、ほぼ完存する。重量 1.7g を測る。

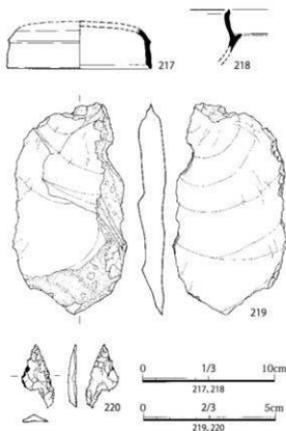


図 54 包含層出土遺物実測図 (S=1/3・2/3)

## 第 6 節 包含層出土の遺物 (図 54)

須恵器杯蓋 (217) 217 は内外面ともに回転ナデ調整する。MT15 型式期のものである。

須恵器杯 (218) 218 は内外面ともに回転ナデ調整する。TK23 型式～TK47 型式期のものである。

剥片 (219) 219 は 2 次加工のある剥片である。側縁部に微細剝離がみられる。自然面を一部残す。サヌカイト製である。重量は 42.0g を測る。

石甌 (220) 220 は凹基式のものである。側縁部をわずかに欠き、脚部の片側を欠損する。サヌカイト製である。重量は 0.7g を測る。

## 第4章 総括

### (1) 弥生時代から古墳時代にかけての南曾我遺跡周辺

今回の調査で検出した弥生時代から古墳時代にかけての主な遺構は、墳墓5基、竪穴住居跡1基、並行する多条の溝である。これらの遺構は大きく弥生時代後期～古墳時代前期にかけてのもの、古墳時代中期から古墳時代後期にかけてのものとの2時期に分かれるが、地形に沿う溝とその間に展開する墓域という構成に変化はない。溝は地形に沿って南西から南東へ向かうものとそれに直交して取り付くものがある。

弥生時代後期から古墳時代前期に属する溝群は、SD20を除くと、いずれも流水の存在が想定でき、最終的に洪水砂により埋没したものと考えることが出来るものである。同様の溝は周辺の調査でも確認されており、水田耕作に伴う灌漑用水路であると考えられ、新堂遺跡（稲教委2003-12次）では古墳時代前期初頭、西坊城遺跡（大西1999）では古墳時代中期の水田の検出もなされている。南曾我遺跡では水田の検出はなされなかったが、前者が主幹水路となり、後者が水田の間に細かく設けられ、水田に水を供給していたものと考えられる。周辺調査例とは異なり、砂層が確認できないが、溝の埋土は砂が主体であることから、同じ要因により埋没したものと推測できる。自然流路をはさんで兩岸に水田が経営され、その外側に墓域、さらに集落域が展開していたと推測できる。

一方古墳時代中期から古墳時代後期にかけてのものでは、砂層の堆積はみられず、流水の痕跡もない。溝の性格は水路から別のものに変化したようである。その詳細については明らかにしえないが、この溝も古墳時代後期には役目を終える。

これらの溝群と併存し、溝の間には墓が築造されている。検出された溝群が古墳時代前期で一旦埋没し、中期に再び掘削されることによるものと考えられるが、検出された墓には古墳時代中期前半に属するものはみられず、古墳時代前期のものや古墳時代中期後半から後期前半にかけてのものが確認されている。周辺の遺跡では、曲川遺跡において、南曾我遺跡と同時期のものとそれに前後する時期のものが検出されている。南曾我遺跡と曲川遺跡の間の関連を認めるのであれば、古墳時代初頭になって曲川遺跡から広がった墓域との評価も可能である。古墳時代中期前半には曲川遺跡での造墓は継続するが、南曾我遺跡では確認できない。出土遺物や検出遺構の頻度から考えると、古墳時代中期前半には南曾我での活動が低調であることがうかがえる。当時の旧流路の位置は明らかではないが、周辺での旧流路の検出例及び現在の地形から、川を挟んで対峙する墓域であったと考えられる。

南曾我遺跡で検出した古墳時代前期の墓について、曲川遺跡の調査の中でも、墓の詳細が明らかになっている2004年度調査（藤井2006）と比較してみる。まず、規模について、曲川遺跡では一辺の長さで12m前後、8m前後、4m前後の3グループに分けることができる。南曾我遺跡でも同様傾向をみせ、12mのグループにSZ50、8mのグループにSZ40、4mのグループにSZ30・SZ35が該当する。墓域内での配置をみても、12m、8mのグループは比較的独立した立地をとるのに対して、4mのグループは群をなすという点についても共通する特徴として指摘することができる。

古墳時代中期から後期にかけての遺構の中で、特筆すべきはSZ100に伴うと考えられる馬の埋葬土坑とも考えられるSK120であろう。南曾我遺跡周辺では、南に位置する新堂遺跡において、韓式土器



などの渡来系遺物の出土が知られている。遺跡間に距離があることなどの問題はあがるが、古墳時代中期以降の南曾我遺跡は、新堂遺跡周辺に居住した人々の墓域となっていた可能性も考えられる。

弥生時代から古墳時代にかけては、南曾我遺跡の周辺は、自然流路をはさんで両岸に水田が経営され、その外側に墓域及び用水路、さらには集落域が展開していたと推測できる。

## (2) 素掘小溝について

南曾我遺跡では広域な面積内に多数の素掘小溝を検出した。素掘小溝の機能については1980年代以降議論が行われ、現在では概ね耕作関連の溝であることは共通見解となっている（今尾1981、中井1981、八尾1986）。したがって、素掘小溝の配置は耕作地の土地利用形態と密接に関連しているといえよう。

報告文と重複するが、南曾我遺跡で検出した素掘小溝は、主軸方向の違いから大きくA群とB群に分けられる（図5）。A群は座標北に対し $2^{\circ}46'$ 程度東に振るもので、調査区東半に南北方向のものが、南半に東西方向のものがみられる。B群はほぼ座標方位に一致する方位を有し、全面に展開する。東西南北双方のものが存在し、切り合い関係からは東西南北が何度も転換した様子がうかがえる。A群とB群の関係については切り合い関係からA群が先行し、B群が後出すると考えられる。これらの時期については、B群から13世紀半ばのほぼ完形の瓦器類が出土、A群からは13世紀半ばの土師器類が出土していることから、A群が掘削された後短時間でB群が掘削されたことになる。

ここで注目すべきはA群が、高市郡路西二十五条四里九坪と十坪の坪境を無視して南北に延びている点である。つまりこの状況からはA群が掘られた13世紀半ば頃には坪境が存在していなかった、もしくは明確な区画として機能していなかったことが想定できるのである。A群は他の素掘小溝と異なり、約4m間隔（重複する部分もあり正確な数字ではないが）で存在し、幅が広めで深さも深い。短期間でB群に移行していることを合わせて考えると、耕作そのものの痕跡と考えると、後に述べる山川均の説にあるように（山川1998）、耕作に先立つ耕地開発関連の溝とみることが妥当ではないだろうか。これに対しB群は坪境に規制された配置を示している。A群により耕地が開発された段階ではまだ条里型が明確ではなかったが、通常の耕作が行われB群が掘られるようになるころには、坪境に規制された条里型の土地利用が確立していたということができてであろう。そしてその時期が13世紀前半に位置づけられるのである。

さて、周辺部に目を向けると南曾我遺跡と同様、素掘小溝にA・B群の二種類が存在する遺跡は他にもみられる。南曾我遺跡から約600m北に存在する西曾我遺跡では、正方位を指向する溝群以外に3.8～5.0m間隔で、北で $3^{\circ}50'$ 前後東へ振れる小溝群が見つかっている（露口1999：図55）。ここでは10世紀中葉の正方位を指向する溝と建物もみつかっており、ある時期のみ斜交する素掘小溝が展開するようである。

南曾我遺跡から1.3km南西に位置する新堂遺跡でも同様の素掘小溝群がみついている（図56）。ここでは正方位を指向する密な小溝群（B群素掘小溝と総称）のほか、北で $0^{\circ}47' \sim 1^{\circ}36'$ 前後東へ振れる小溝（A群素掘小溝と総称）がみついている。これらの小溝群はやはり3～4mの間隔で存在しており、南曾我遺跡との共通性がうかがえる。ちなみに新堂遺跡は二つの調査区の間が高市郡路西二十七条五里二十六坪と二十七坪の坪境に相当し、B群素掘小溝に類似する溝群は坪境に方向を違える。しかし東偏するA群素掘小溝は坪境を跨いで同じ方向、規模を保っており、坪境が調査されていない

いので断定できないものの、坪境施設の存在を疑う余地のある事例である。

こうした南曾我遺跡および周辺の遺跡と全く同じ状況の素掘小溝が、大和郡山市中付田遺跡でも確認されている(山川 1998: 図 57)。ここでは 3.3～3.5m 間隔で東偏する小溝(東西小溝 b)と、正方位を指向する小溝(東西小溝 a)がみつかり、前者は添上郡京南東六条三条三十六坪と二十一坪の坪境を無視して東に延びている。これに対し、後者は坪境に規制された配置を示す。この状況からは、坪境の設置が東西小溝 b以降、東西小溝 a以前であることが看取できるが、前者からは 13 世紀半ば～後半の土器が、後者からは 14 世紀の土器が出土しており、南曾我遺跡と時期的にも近似する。なお、調査者の山川均氏はこうした東西小溝 bの機能として悪水抜きを含めた地盤改良の可能性を指摘している(図 57)。

以上のように、南曾我遺跡で検出した A 群素掘小溝と同様、通常の条里方向から 1～5°程度東へ振る方位を有し、3～5m 間隔を持つ素掘小溝が、橿原市域のみならず比較的広域に存在することが確認できた。これらのうち年代がわかる南曾我遺跡と中付田遺跡はいずれも 13 世紀の年代を示し、どちらも条里坪境を無視して展開する。西曾我遺跡ではこの A 群素掘小溝に先行して正方位を指向する建物と溝が見つまっていることから、A 群素掘小溝の敷設が制度としての「条里制施行」を示すとは言い切れないが、少なくとも明確な坪境を伴う「条里型水田」の開発に関連する遺構である可能性は指摘しうる。こうした調査結果は、条里型水田の出現が 11 世紀以降であるという箸尾遺跡における調査結果や(吉村 2006)、平安時代中期に埋没する旧河道の痕跡が条里型水田によって完全に消され、池として利用された可能性のある部分だけが地中に残っている萩之本遺跡の事例(鈴木・平松 2008、佐藤 2011)など、他の遺跡における発掘調査で確認された条里型水田開発時期に関する情報と併せて考えると、現状地形にみられる条里型景観が様々な段階を経て整備されたものである可能性を浮かび上がらせる。すでに山川均氏が指摘するように、条里型水田は段階的整備過程を経たものであることを確認すると同時に(山川 1993)、そうした段階的整備の中で南曾我遺跡 A 群素掘小溝と同じタイプの小溝が特定の時期に集中して展開する意味についても考えておく必要がある。とはいえ、素掘小溝については時期の記述はおろか、図面化されることすら少ない。この種の遺構の持つ重要性を改めて認識してゆくところから始めねばならないだろう。調査・報告の充実を期待したい。

### (3) 今後の課題

今回の調査では、弥生時代から中世にかけての遺構・遺物を確認した。新規の遺跡であったため、まず求められるのは遺跡の性格である。周辺の遺跡の成果に対応するように、弥生時代から古墳時代にかけての溝・墓域、古代・中世の掘立柱建物や井戸などが検出された。今後の課題としては、旧流路の変遷と土地利用の変化について、弥生時代から古墳時代にかけての造墓集団の居住域の検討などがあげられるであろう。特に、後者に関しては、今回の調査区の南東部で竪穴建物を 1 棟確認しており、さらに南東部へと広がる可能性がある。今後の周辺の調査に期待したい。

#### 註

(1) 検出された馬については、松井章氏よりご教示を得た。

## 参考引用文献

- 一瀬和夫 1988 『古市古墳群における大型古墳輪集』『大水川改修にともなう発掘調査概要』V 大阪府教育委員会
- 今尾文昭 1981 『「中世」素掘り小溝についての一解釈』『青陵』47 奈良県立橿原考古学研究所
- 近江俊秀・森島康雄 1995 『瓦器輪』『概説中世の土器陶磁器』中世土器研究会
- 大西貴夫 1999 『西坊城遺跡』奈良県文化財調査報告書第 83 集 奈良県立橿原考古学研究所
- 川口宏海 1990 『16 世紀における大和型土釜の動向』『中近世土器の基礎研究』VI 日本中世土器研究会
- 川西宏幸 1978 『円筒埴輪総論』『考古学雑誌』第 64 巻第 2 号
- 北山峰生・松井一見 2005 『曲川遺跡』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第 90 冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 小島俊次 1965 『奈良県の考古学』吉川弘文館
- 佐々木好直 2007 『曲川遺跡 II』奈良県文化財調査報告書第 120 冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 佐藤聖聖 2011 『萩之本遺跡』神元興寺文化財研究所
- 佐藤良二ほか 1989 『曾我遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 55 冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 菅原正明 1983 『畿内における土釜の製作と流通』『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立 30 周年記念論文集
- 鈴木一謙・平松良雄 2008 『萩之本遺跡(川西町 4 区)』『奈良県遺跡調査概観』2007 年度(第 2 分冊)
- 露口直広 1999 『西曾我遺跡の調査』『かしはらの歴史をさぐる』6 橿原市千塚資料館
- 寺澤薫 1986 『畿内古式土器の編年と二・三の問題』『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 49 冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 中井一夫 1981 『いわゆる中世素掘り溝について』『青陵』47 奈良県立橿原考古学研究所
- 奈良県立橿原考古学研究所・橿原良古代文化研究基金 1981 『大和国条里復原図』
- 奈良国立文化財研究所 1993 『木器集成図録』
- 平岩欣太・川部浩司 2004 『曲川遺跡の調査』『かしはらの歴史をさぐる』11
- 藤井章徳ほか 2006 『曲川遺跡発掘調査報告書 2004 年度調査』神元興寺文化財研究所
- 三好美穂 1996 『南都における平安時代前半期の土器様相—土器の供膳形態を中心とした編年試案—』『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』1995
- 八尾博之 1986 『中近世素掘り小溝について』『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
- 山川均 1993 『奈良盆地における条里制の展開とその特質』『条里制研究』第 9 号 条里制研究会
- 山川均 1998 『中世の耕地開発と集落景観—大和国若槻庄の景観復元作業を中心に—』『研究集会報告』1 帝京大学山梨文化財研究所
- 大和弥生文化の会 2003 『奈良県の弥生土器集成』
- 吉村和昭 2006 『耕作遺構調査のまとめ』『箸尾遺跡』I 奈良県立橿原考古学研究所



## 関連資料

### 図 58 検出遺構略図・遺構仮番号配置図

(遺構の切合関係は全てこの図に記載。仮番号は報告書遺構番号に対応させている。)

### 表 1～6 報告遺物一覧 (1)～(6)

### 表 7～13 検出遺構および出土遺物一覧 (1)～(7)



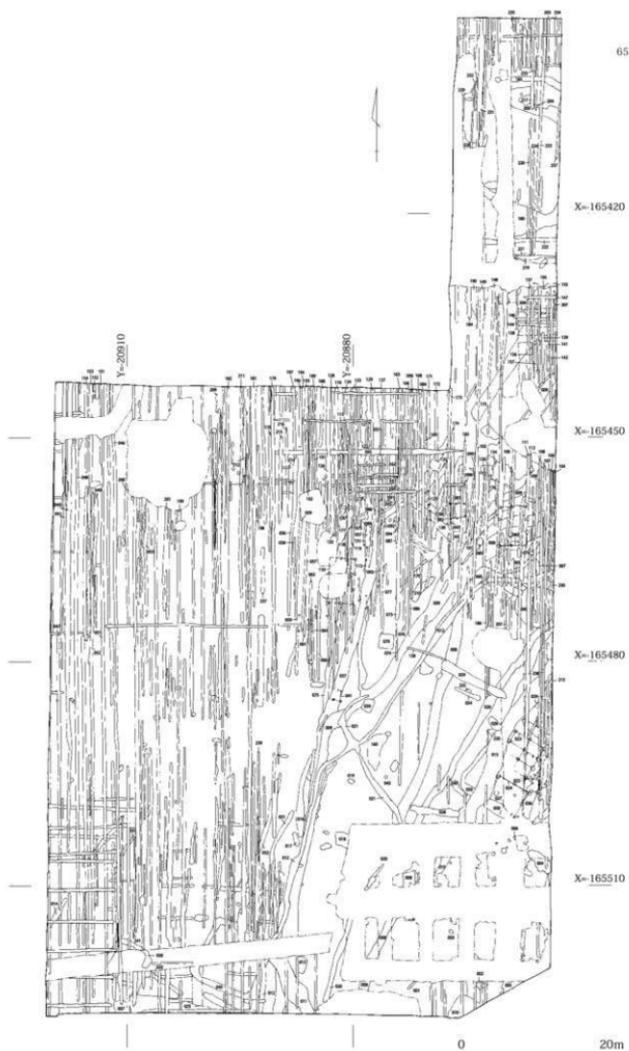


图 58 洮州遺構配置略図・遺構仮番号配置図

表1 報告遺物一覧(1)

発掘 年次	出土遺物 番号	出土遺物 類別	検出 位置	[長×幅×厚(㎝) 重量]	動土・素材	焼成・色調	特記事項
昭和17 年度 昭和30	S240	土師器 二重(片)埴輪	土師器 二重(片)埴輪	(17.6) × (19.2) × 0.8 30%	赤 ～4㎜粒石・石灰・クワリ礫	黄 橙7.5YR7/6	
昭和17 年度 昭和30	S240	土師器 一重(片)埴輪	土師器 一重(片)埴輪	φ = (1.6) × 0.8 土師器(断面)	赤 ～2㎜粒石・石灰・クワリ礫	黄 橙10YR8/6	
昭和17 年度 昭和30	S240	土師器 埴輪	土師器 埴輪	φ = (2.3) × 0.8 土師器(断面)	赤 ～1㎜粒石・粒石	黄 橙10YR8/4	
昭和17 年度 昭和30	S250	弥生土器 埴輪	弥生土器 埴輪	(15.3) × (6.3) × 4.8 70%	中～中粒 ～2㎜粒石・粒石	黄 橙12.5Y7/3	
昭和17 年度 昭和30	S250	土師器 埴輪	土師器 埴輪	(13.8) × (4.7) × 0.8 土師器(断面)	黄 ～2㎜粒石・粒石	不灰 黄橙10YR8/6	
昭和17 年度 昭和30	S250	弥生土器 埴輪	弥生土器 埴輪	φ = (2.8) × 3.4 泥部のみ100%	中～中粒 ～3㎜粒石・粒石	中～中不灰 明色黄10Y8/6	
昭和17 年度 昭和30	S250	土師器 埴輪	土師器 埴輪	φ = (3.5) × 0.8 泥部のみ100%	中～中粒 ～2㎜粒石・粒石	不灰 黄橙10YR8/6	有黒炭
昭和17 年度 昭和30	S250	土師器 埴輪	土師器 埴輪	φ = (3.4) × 0.8 泥部のみ30%	中～中粒 ～2㎜粒石・粒石	黄 橙12.5YR7/4	
昭和18 年度 昭和31	S10	土師器 埴輪	土師器 埴輪	(8.7) × (5.4) × 0.8 20%	中～中粒 ～2㎜粒石・粒石	中～中不灰 橙7.5YR7/6	
昭和18 年度 昭和31	S10	土師器 埴輪	土師器 埴輪	(14.0) × (9.4) × 0.8 10%	中～中粒 ～2㎜粒石・粒石	不灰 橙7.5YR7/6	外部外面(土師器内面) 黒付
昭和18 年度 昭和31	S10	土師器 埴輪	土師器 埴輪	φ = (3.7) × 0.8 30%	中～中粒 ～2㎜粒石・粒石・クワリ礫	中～中不灰 橙10YR8/6	
昭和19 年度 昭和32	S28	土師器 埴輪	土師器 埴輪	φ = (2.8) × 0.8 土師器(断面)	中～中粒 ～1㎜粒石・粒石・雲母	黄 橙10.5YR7/2	
昭和19 年度 昭和32	S28	土師器 埴輪	土師器 埴輪	(15.2) × (4.8) × 0.8 土師器(断面)	赤 ～1㎜粒石・粒石・雲母・クワリ礫	黄 橙12.5YR7/4	
昭和19 年度 昭和32	S28	土師器 埴輪	土師器 埴輪	φ = (3.4) × 4.0 泥部のみ100%	中～中粒 ～4㎜粒石・粒石	黄 橙10YR8/2	有黒炭
昭和19 年度 昭和32	S28	弥生土器 埴輪	弥生土器 埴輪	φ = (3.4) × (4.9) 泥部のみ50%	中～中粒 ～1㎜粒石・粒石	黄 橙7.5YR7/6	
昭和19 年度 昭和32	S28	土師器 埴輪	土師器 埴輪	φ = (3.2) × 0.8 泥部のみ70%	中～中粒 ～2㎜粒石・粒石	中～中不灰 橙7.5YR7/6	
昭和19 年度 昭和32	S29	土師器 埴輪	土師器 埴輪	(15.0) × (3.6) × 0.8 土師器(断面)	中～中粒 ～1㎜粒石・チークト	中～中不灰 黄橙10YR8/4	外部外面に黒付
昭和19 年度 昭和32	S29	土師器 埴輪	土師器 埴輪	φ = (3.8) × 0.8 赤黒土層の埋合状態のみ存在	中～中粒 ～1㎜粒石・クワリ礫	黄 橙10YR8/6	
昭和19 年度 昭和32	S29	石製 石槌	石製 石槌	4.9 × 4.1 × 2.9 × 29.7g	クワリタフ		
昭和19 年度 昭和32	S207	土師器 二重(片)埴輪	土師器 二重(片)埴輪	(25.2) × (5.0) × 0.8 土師器(断面)	赤 ～1㎜粒石・雲母	黄 橙12.5YR5/4	
昭和19 年度 昭和32	S207	土師器 埴輪	土師器 埴輪	(8.2) × (3.2) × 0.8 土師器(断面)	赤 ～2㎜粒石・粒石	不灰 橙2.5YR6/8	
昭和19 年度 昭和32	S207	弥生土器 片(土)埴輪	弥生土器 片(土)埴輪	(18.0) × (5.6) × 0.8 土師器(断面)	中～中粒 ～3㎜粒石・粒石・クワリ礫	黄 橙10YR7/6	
昭和19 年度 昭和32	S215	土師器 二重(片)埴輪	土師器 二重(片)埴輪	φ = (2.8) × 0.8 10%以下	赤 ～1㎜粒石・粒石・クワリ礫	黄 橙10YR8/4	
昭和19 年度 昭和34	S215	土師器 二重(片)埴輪	土師器 二重(片)埴輪	(22.0) × (2.6) × 0.8 10%以下	赤 ～1㎜粒石・粒石・クワリ礫	黄 橙10YR8/6	
昭和19 年度 昭和34	S215	土師器 片(土)埴輪	土師器 片(土)埴輪	(17.0) × (4.7) × 0.8 30%	中～中粒 ～3㎜粒石・粒石・雲母・クワリ礫	黄 橙12.5YR8/4	
昭和19 年度 昭和34	S215	土師器 埴輪	土師器 埴輪	φ = (3.8) × 0.8 土師器(断面)	赤 ～2㎜粒石・粒石	不灰 橙10YR6/6	
昭和19 年度 昭和34	S215	土師器 埴輪	土師器 埴輪	φ = (3.3) × 0.8 土師器(断面)	赤 ～4㎜粒石・粒石・クワリ礫	黄 橙10YR7/8	
昭和19 年度 昭和34	S215	土師器 埴輪	土師器 埴輪	φ = (2.0) × 0.8 土師器(断面)	中～中粒 ～1㎜粒石・粒石・クワリ礫	不灰 橙7.5YR6/6	
昭和19 年度 昭和34	S215	土師器 埴輪	土師器 埴輪	φ = (3.2) × 0.8 土師器(断面)	中～中粒 ～2.5㎜粒石・粒石・雲母	黄 橙12.5YR8/4	
昭和19 年度 昭和35	S215	土師器 埴輪	土師器 埴輪	φ = (3.3) × 0.8 土師器(断面)	赤 ～2㎜粒石・粒石・クワリ礫	不灰 橙10YR6/6	
昭和19 年度 昭和35	S215	土師器 埴輪	土師器 埴輪	φ = (3.8) × 0.8 土師器(断面)	赤 ～2㎜粒石・粒石	不灰 橙2.5YR6/8	
昭和19 年度 昭和35	S215	土師器 埴輪	土師器 埴輪	(10.3) × (5.2) × 0.8 30%	赤 ～3㎜粒石・粒石・クワリ礫	黄 橙10YR6/6	
昭和19 年度 昭和35	S215	土師器 埴輪	土師器 埴輪	φ = (3.8) × 0.8 泥部のみ20%	赤 ～4㎜粒石・粒石	中～中不灰 橙10YR6/8	
昭和19 年度 昭和35	S215	土師器 埴輪	土師器 埴輪	φ = (3.0) × 0.8 泥部のみ80%	赤 ～2㎜粒石・粒石・クワリ礫	黄 橙7.5YR7/6	
昭和20 年度 昭和35	S200	土師器 埴輪	土師器 埴輪	(15.4) × (28.3) × 0.8 30%	赤 ～2㎜粒石・粒石	中～中不灰 橙10YR7/6	有黒炭
昭和20 年度 昭和35	S200	土師器 埴輪	土師器 埴輪	(14.2) × (4.7) × 0.8 土師器(断面)	中～中粒 ～2㎜粒石・粒石	黄 橙12.5YR7/4	
昭和20 年度 昭和35	S200	土師器 埴輪	土師器 埴輪	(12.0) × (7.0) × 0.8 土師器(断面)	中～中粒 ～4㎜粒石・粒石・クワリ礫	中～中不灰 橙10YR6/6	

表2 報告遺物一覧(2)

調査 年度	出土遺物 番号	種別 属性	口径・長さ・重量 (cm)	出土・素材	構成・色調	特記事項
昭29-38 昭35	S200	弥生土器 一 甕・縁部	* - (14.0) - *	砂質 土曜部焼付	黄 流紋粉 10YR8/4	
昭29-39 昭36	S200	弥生土器 一 土曜部	* - (5.2) - *	黄	黄 二色・流紋 10YR8/3	
昭29-40 昭36	S200	土曜部	(19.1) - (2.8) - *	黄	黄 二色・流紋 10YR7/4	
昭29-41 昭36	S200	土曜部 一 甕・縁部	(21.0) - (4.1) - *	黄	黄 二色・流紋 7.5YR7/4	
昭29-42 昭36	S200	土曜部 二 甕・縁部	* - (4.1) - *	黄	黄 二色 5YR7/8	赤石
昭29-43 昭36	S200	土曜部 二 甕・縁部	(33.8) - (7.7) - *	砂質 土曜部焼付	砂中不貞 流紋粉 10YR8/4	有黒炭
昭29-44 昭36	S200	土曜部	* - (8.5) - *	砂質	砂中不貞 粉 7.5YR7/6	外面赤銅 埋込部 2.5YR5/6
昭29-45 昭37	S200	土曜部 甕	* - (4.5) - *	黄	黄 流紋粉 10YR8/4	縁部外面に赤銅埋込
昭29-46 昭37	S200	弥生土器 甕	* - (2.8) - 5.7	黄	黄 流紋粉 10YR8/4	
昭29-47 昭37	S200	土曜部 甕	* - (2.5) - (8.0)	黄	黄 流紋粉 7.5YR8/4	有黒炭
昭29-48 昭37	S200	土曜部 甕	* - (2.2) - (2.8)	砂質	砂中不貞 粉 7.5YR7/6	
昭21-49 昭37	S200	土曜部	(13.0) - (3.2) - *	砂質	黄 二色・流紋 10YR7/3	
昭21-50 昭37	S200	土曜部 甕	(14.0) - (4.2) - *	黄	黄 二色・流紋 10YR8/3	
昭21-51 昭37	S200	土曜部 甕	* - (4.8) - *	黄	黄 流紋粉 10YR8/4	
昭21-52 昭37	S200	土曜部 甕	(14.4) - (5.2) - *	砂質	砂中不貞 二色・流紋 10YR7/3	
昭21-53 昭37	S200	土曜部 甕	(14.8) - (5.8) - *	砂質	黄 流紋粉 10YR8/4	
昭21-54 昭38	S200	土曜部 甕	(10.6) - (3.8) - *	黄	不貞 流紋粉 7.5YR8/4	
昭21-55 昭38	S200	土曜部 甕	(13.8) - (8.4) - *	砂質	砂中不貞 粉 5YR7/6	
昭21-56 昭38	S200	土曜部 甕	(13.2) - (4.7) - *	砂質	黄 流紋粉 7.5YR8/6	
昭21-57 昭38	S200	土曜部 甕	(13.6) - (3.3) - *	黄	黄 流紋粉 5YR8/6	
昭21-58 昭38	S200	土曜部 甕	(14.2) - (4.6) - *	砂質	黄 粉 7.5YR7/6	
昭21-59 昭38	S200	土曜部 甕	(15.1) - (5.6) - *	砂質	黄 明黄粉 10YR7/6	
昭21-60 昭38	S200	土曜部 甕	(15.8) - (6.1) - *	砂質	黄 流紋粉 10YR8/4	
昭21-61 昭38	S200	土曜部 甕	(15.5) - (7.6) - *	砂質	黄	
昭21-62 昭38	S200	土曜部 甕	(15.3) - (6.5) - *	砂質	黄 二色・流紋 7.5YR7/4	
昭21-63 昭38	S200	土曜部 甕	(15.5) - (8.8) - *	黄	黄 粉 7.5YR7/6	
昭21-64 昭38	S200	土曜部 甕	(15.5) - (6.4) - *	黄	黄 二色 5YR7/6	
昭21-65 昭38	S200	土曜部 甕	(16.3) - (5.0) - *	砂質	黄 二色・流紋 10YR7/3	
昭21-66 昭39	S200	土曜部 甕	(17.0) - (7.5) - *	砂質	砂中不貞 粉 5YR7/6	
昭21-67 昭39	S200	土曜部 甕	(18.1) - (2.5) - *	砂質	黄 白 2.5YR7/2	
昭22-58 昭39	S200	土曜部 甕	(14.0) - (3.0) - *	砂質	黄 黄粉 10YR8/6	
昭22-69 昭39	S200	土曜部 甕	(15.4) - (4.3) - *	砂質	黄 流紋粉 10YR8/4	
昭22-70 昭39	S200	土曜部 甕	(13.1) - (7.2) - *	砂質	黄 粉 7.5YR7/6	
昭22-71 昭39	S200	土曜部 甕	(15.2) - (7.8) - *	砂質	黄 流紋粉 7.5YR8/4	
昭22-72 昭39	S200	土曜部 甕	(13.7) - (9.0) - *	黄	砂中不貞 二色・流紋 7.5YR7/4	縁部外面に埋込
昭22-73 昭39	S200	土曜部 甕	(15.6) - (4.5) - *	黄	不貞 二色・流紋 7.5YR7/4	
昭22-74 昭39	S200	土曜部 甕	(14.8) - (3.3) - *	黄	不貞 流紋粉 7.5YR8/6	

表3 報告遺物一覧(3)

発掘 年次	出土遺物 番号	出土遺物 類別	出土 位置	出土 層位	規格 寸法	材質	重量	用途	出土・発見 状況	所在地	備考
昭25 昭和29	3020	土師器 埴			18.20 - 7.20 - *	埴	1.87g	1.5-3cm径・底径	底 底径1.5-3cm	良	記-51-遺物 10Y97/4
昭25 昭和30	3020	土師器 埴			(14.5) - (6.1) - *	埴	0.9g	2-2cm径・底径	底 底径2-2cm	良	遺物 10Y97/6
昭27 昭和29	3020	土師器 埴			* - (3.5) - (3.6)	埴	0.9g	1-1cm径・底径	底 底径1-1cm	良	記-51-遺物 10Y97/3
昭27 昭和29	3020	土師器 埴			* - (6.1) - (4.1)	埴	0.9g	1-1cm径・底径	底 底径1-1cm	不品 底径1086/6	全編が遺した遺物
昭27 昭和40	3020	土師器 埴			* - (3.6) - *	埴	0.9g	1-1cm径・底径	底 底径1-1cm	良	999不品 底径 10Y98/6
昭28 昭和40	3020	土師器 埴			6.2 - 6.7 - *	埴	0.9g	1-1cm径・底径	底 底径1-1cm	良	遺物 7.5Y97/6
昭28 昭和40	3020	土師器 埴			9.5 - 6.6 - *	埴	0.9g	1-1cm径・底径	底 底径1-1cm	良	999不品 底径 7.5Y98/6
昭28 昭和40	3020	土師器 埴			(11.8) - (5.0) - *	埴	0.9g	1-1cm径・底径	底 底径1-1cm	良	遺物 7.5Y96/6
昭28 昭和40	3020	土師器 埴			(21.0) - (6.5) - *	埴	0.9g	1-1cm径・底径	底 底径1-1cm	良	記-51-遺物 7.5Y97/4
昭28 昭和40	3020	土師器 埴			(9.6) - 8.6 - (13.6)	埴	0.9g	1-1cm径・底径	底 底径1-1cm	良	遺物 7.5Y97/6
昭28 昭和40	3020	土師器 埴			(10.2) - (4.8) - *	埴	0.9g	1-1cm径・底径	底 底径1-1cm	良	遺物 7.5Y97/6
昭28 昭和40	3020	土師器 埴			(11.1) - (4.2) - *	埴	0.9g	1-1cm径・底径	底 底径1-1cm	良	底径 10Y98/4
昭28 昭和40	3020	土師器 埴			(9.7) - (2.1) - *	埴	0.9g	1-1cm径・底径	底 底径1-1cm	良	記-51-遺物 10Y97/4
昭28 昭和41	3020	土師器 埴			* - (5.4) - (9.6)	埴	0.9g	1-1cm径・底径	底 底径1-1cm	良	遺物 7.5Y97/6
昭28 昭和41	3020	土師器 埴			* - (7.1) - (12.0)	埴	0.9g	1-1cm径・底径	底 底径1-1cm	999不品 底径 7.5Y97/6	
昭28 昭和41	3020	土師器 埴			* - (6.0) - (10.0)	埴	0.9g	1-1cm径・底径	底 底径1-1cm	良	底径 10Y98/4
昭28 昭和41	3020	土師器 埴			(11.2) - (5.1) - *	埴	0.9g	1-1cm径・底径	底 底径1-1cm	良	遺物 7.5Y96/6
昭28 昭和41	3020	土師器 埴			* - (5.3) - *	埴	0.9g	1-1cm径・底径	底 底径1-1cm	良	底径 10Y98/4
昭28 昭和41	3020	土師器 埴			(18.1) - (6.0) - *	埴	0.9g	1-1cm径・底径	底 底径1-1cm	良	遺物 7.5Y97/6
昭28 昭和41	3020	土師器 埴			(18.4) - (4.6) - *	埴	0.9g	1-1cm径・底径	底 底径1-1cm	999不品 底径 7.5Y97/8	
昭28 昭和41	3020	土師器 埴			20.6 - (5.0) - *	埴	0.9g	1-1cm径・底径	底 底径1-1cm	良	底径 10Y97/6
昭28 昭和41	3020	土師器 埴			(20.1) - (10.0) - *	埴	0.9g	1-1cm径・底径	底 底径1-1cm	良	底径 7.5Y97/6
昭28 昭和41	3020	土師器 埴			(21.6) - (6.2) - *	埴	0.9g	1-1cm径・底径	底 底径1-1cm	良	遺物 7.5Y97/6
昭28 昭和41	3020	土師器 埴			* - (5.0) - (8.1)	埴	0.9g	1-1cm径・底径	底 底径1-1cm	良	遺物 7.5Y97/6
昭28 昭和41	3020	土師器 埴			* - (6.6) - *	埴	0.9g	1-1cm径・底径	底 底径1-1cm	良	底径 7.5Y98/6
昭28 昭和41	3020	土師器 埴			* - (7.7) - *	埴	0.9g	1-1cm径・底径	底 底径1-1cm	不品	底径 2.5Y97/4
昭28 昭和41	3020	土師器 埴			* - (7.2) - *	埴	0.9g	1-1cm径・底径	底 底径1-1cm	良	遺物 2.5Y98/6
昭28 昭和42	3020	土師器 埴			(17.0) - (2.0) - *	埴	0.9g	1-1cm径・底径	底 底径1-1cm	999不品 底径 10Y98/3	
昭24 昭和42	SK13	土師器 埴			(4.0) - 4.0 - 0.0 - 14.7g	埴	14.7g	1-1cm径・底径	底 底径1-1cm	良	
昭36 昭和42	S255	埴輪 埴輪形埴輪			(38.0) - (5.0) - *	埴	0.9g	1-1cm径・底径	底 底径1-1cm	999不品 底径 7.5Y97/6	
昭36 昭和42	S255	埴輪 埴輪形埴輪			(37.0) - (5.7) - *	埴	0.9g	1-1cm径・底径	底 底径1-1cm	良	遺物 7.5Y97/8
昭36 昭和42	S255	埴輪 埴輪形埴輪			(30.0) - (6.4) - *	埴	0.9g	1-1cm径・底径	底 底径1-1cm	999不品 底径 7.5Y97/6	
昭36 昭和42	S255	埴輪 埴輪形埴輪			(25.4) - (11.1) - *	埴	0.9g	1-1cm径・底径	底 底径1-1cm	良	底径 10Y97/6
昭36 昭和42	S255	埴輪 埴輪形埴輪			(21.6) - (7.1) - *	埴	0.9g	1-1cm径・底径	底 底径1-1cm	良	遺物 7.5Y97/6
昭36 昭和42	S255	埴輪 埴輪形埴輪			(27.0) - (5.1) - *	埴	0.9g	1-1cm径・底径	底 底径1-1cm	良	遺物 7.5Y97/6
昭36 昭和42	S255	埴輪 埴輪形埴輪			* - (14.6) - *	埴	0.9g	1-1cm径・底径	底 底径1-1cm	999不品 底径 7.5Y97/8	
昭36 昭和44	S255	埴輪 埴輪形埴輪			* - (7.0) - *	埴	0.9g	1-1cm径・底径	底 底径1-1cm	良	遺物 7.5Y97/6

表4 報告遺物一覧(4)

調査 号/調査区	出土遺物 番号	種別 分類	口径・長さ・重量 (cm) 重量 (g)	動土・素材	構成・色調	特記事項
探36-112 探区44	S255	埴輪 門筒埴輪	(9.5) - (8.6) - 1.3 埴輪製	中中土	白 →4mm黒石・黄得・ウサリ溝	白 層 7.5YR7/6
探37-113 探区43	S255	埴輪 筒形埴輪	34.5 - (22.9) - * 50%	中中土	白 →4mm黒石・黒石	中中不灰 層 5YR7/6
探37-114 探区44	S255	土師器 土師器(埴輪)	* - (5.3) - * 土師器製	中中土	白 →2mm黒石・石屑・ウサリ溝	中中不灰 区 5Y-黄層 10YR7/4
探37-115 探区44	S255	土師器 高杯	* - (6.3) - * 胴部のみ80%	中中土	白 →4mm黒石・石屑・ウサリ溝	白 層 5YR6/8
探37-116 探区44	S255	土師器 高杯	* - (5.3) - * 胴部のみ80%	中中土	白 →3mm黒石・ウサリ溝	白 層 5YR6/6
探37-117 探区44	S255	土師器 杯蓋	* - (2.0) - * 丸形部のみ40%	泥	泥 →2mm黒石・黒石	泥 層 5YR5/0
探38-118 探区44	SZ100	土師器 杯蓋	12.0 - 5.0 - * 泥	泥	泥 →3mm黒石・黒石	泥 層 5YR7/0
探38-119 探区44	SZ100	土師器 杯蓋	* - (3.4) - * 土師器製	泥	泥 →1mm黒石	泥 層 5YR6/0
探38-120 探区41	SZ100	土師器 杯蓋	10.0 - 5.5 - * 100%	泥	泥 →2mm黒石・黒石・黒色炭粉	泥 層 5YR5/0
探38-121 探区44	SZ100	土師器 杯蓋	* - (2.2) - * 埴輪製	泥	泥 →1mm黒石・黒色炭	泥 層 5YR6/0
探38-122 探区45	SZ100	土師器 杯蓋	* - (2.0) - * 埴輪製	泥	泥 →1mm黒石・黒色炭	泥 層 5YR6/0
探38-123 探区45	SZ100	石製品 石片(土師)	3.1 - (2.0) - 0.5 - 61g	泥	泥	
探39-124 探区45	SD12	埴輪 門筒埴輪	(9.2) - (8.3) - 1.5 埴輪製	中中土	白 →4mm黒石・石屑・ウサリ溝	白 層 5YR6/6
探39-125 探区45	SD12	土師器 杯蓋	* - (6.1) - * 土師器製	中中土	白 →2mm黒石・黒石・ウサリ溝	白 層 5YR6/2
探39-126 探区45	SD12	土師器 杯蓋	* - (3.0) - * 土師器製	中中土	白 →2mm黒石・石屑・ウサリ溝	白 層 5YR6/2
探39-127 探区45	SD12	土師器 杯蓋	(10.0) - (5.1) - * 50%	中中土	白 →2mm黒石・黒石	白 層 5YR6/0
探39-128 探区45	SD12	土師器 杯蓋	(11.6) - (4.4) - * 25%	中中土	白 →1mm黒石・黒石・黒色炭	白 層 5YR6/0
探39-129 探区45	SD12	土師器 杯蓋	* - (2.3) - * 10%	泥	泥 →2mm黒石・黒色炭	泥 層 5YR6/0
探39-130 探区45	SD12	土師器 杯蓋	(12.4) - (4.3) - * 25%	泥	泥 →1mm黒石・黒石・黒色炭	泥 層 5YR7/0
探39-131 探区45	SD12	土師器 高杯	* - (3.0) - (7.7) 底部のみ20%	泥	泥 →1mm黒石	泥 層 5YR7/0
探39-132 探区46	SD15	土師器 高杯	* - (3.2) - * 胴部のみ50%	中中土	白 →1mm黒石・黒石・ウサリ溝	中中不灰 層 5YR7/6
探39-133 探区46	SD15	土師器 高杯	* - (7.7) - * 胴部のみ30%	中中土	白 →4mm黒石・石屑・ウサリ溝	中中不灰 区 5Y-黄層 10YR7/4
探39-134 探区46	SD13	土師器 高杯	* - (8.6) - * 胴部のみ100%	泥	泥 →1mm黒石・ウサリ溝	泥 層 5YR6/8
探39-135 探区46	SD15	土師器 杯蓋	13.4 - 3.0 - * 70%	泥	泥 →2mm黒石・黒石・黒色炭	泥 層 5YR6/0
探39-136 探区46	SD15	土師器 杯蓋	(13.0) - (3.7) - * 10%	泥	泥 →4mm黒石・黒石	泥 層 5YR6/0
探39-137 探区46	SD15	土師器 杯蓋	* - (2.8) - * 土師器製	泥	泥 →2mm黒石	泥 層 5YR6/0
探39-138 探区46	SD15	土師器 高杯	* - (12.1) - * 胴部のみ80%	泥	泥 →2mm黒石・黒色炭	泥 層 5YR6/0
探39-139 探区46	SD29	土師器 高杯	(16.7) - (5.6) - * 土師器製	中中土	白 →2mm黒石・石屑・ウサリ溝	白 層 5YR7/6
探39-140 探区46	SD29	土師器 高杯	* - (6.6) - * 土師器 50%	中中土	白 →4mm黒石・石屑・黄得	白 層 10YR8/6
探39-141 探区46	SD29	土師器 杯蓋	* - (4.0) - * 40%	泥	泥 →2mm黒石・黒色炭	泥 層 5YR6/0
探39-142 探区46	SD29	土師器 杯蓋	(15.5) - (3.0) - * 20%	泥	泥 →3mm黒石・黒色炭	泥 層 5YR7/0
探39-143 探区46	SD28	土師器 杯蓋	* - (2.8) - * 土師器製	泥	泥 →2mm白色炭	泥 層 5YR7/0
探39-144 探区46	SD38	土師器 高杯	* - (7.4) - * 土師器製	白	白 →4mm黒石・石屑・ウサリ溝	中中不灰 区 5Y-黄層 7.5YR8/6
探39-145 探区46	SD38	土師器 高杯	(8.0) - 8.1 - * 60%	泥	泥 →2mm黒石・黒色炭	泥 層 5YR7/0
探39-146 探区47	SD280	土師器 杯蓋	(10.5) - (3.9) - * 10%	泥	泥 →4mm黒石・黒石	泥 層 5YR6/0
探40-147 探区47	SK26	土師器 高杯	* - (2.4) - * 底部のみ40%	泥	泥 →2mm黒石・石屑・ウサリ溝	泥 層 5YR6/8
探40-148 探区47	SK26	土師器 高杯	* - (16.1) - * 50%	泥	泥 →4mm黒石	泥 層 5YR7/0

表 5 報告遺物一覽 (5)

調査 号/調査区	出土遺物 番号	器物 分類	材質・形状 (cm)	出土・素材	時代・時期	特記事項
現 41-149 埋蔵 47	SK05	須恵系 杯蓋	(11.5) - 3.9 - *	灰 → 3m埋石・黒色釉	貞 灰 NS/G	
現 41-150 埋蔵 47	SK05	須恵系 杯蓋	(12.1) - (4.3) - *	灰 → 2m埋石・黒石・黒色釉	貞 灰 NS/G	
現 41-151 埋蔵 47	SK05	須恵系 杯蓋	(13.5) - (3.4) - *	灰 → 3m埋石	貞 灰 NS/G	
現 41-152 埋蔵 47	SK05	須恵系 杯	9.9 - 4.5 - *	灰 → 3m埋石・黒石・黒色釉	貞 灰 NS/G	
現 41-153 埋蔵 47	SK05	須恵系 杯	(10.5) - (4.5) - *	灰 → 3m埋石・黒色釉	貞 灰 NS/G	
現 41-154 埋蔵 47	SK05	須恵系 杯	(10.5) - 5.0 - *	灰 → 2m埋石・黒石・黒色釉	貞 吉氏 586/1	
現 41-155 埋蔵 47	SK05	須恵系 杯蓋	* - (3.2) - *	灰 → 1m埋石	貞 灰 NS/G	
現 41-156 埋蔵 48	SK05	須恵系 器台	(31.0) - (10.0) - *	上層部のみ 20% → 4m埋石・黒石・黒色釉	貞 灰 NS/G	
現 41-157 埋蔵 48	SK05	須恵系 器	(18.0) - (26.2) - *	30% → 灰石瓦・黒石・黒色釉	貞 灰 NS/G	
現 41-158 埋蔵 48	SK05	須恵系 器	(26.0) - (15.5) - *	→ 3m埋石・黒石	貞 灰 NS/G	
現 41-159 埋蔵 48	SK05	須恵系 器	* - (27.2) - *	→ 3m埋石・黒石・黒色釉	貞 灰 NS/G	
現 41-160 埋蔵 48	SK05	須恵系 器	* - (4.5) - *	→ 3m埋石・黒石	貞 灰 NS/G	
現 41-161 埋蔵 48	SK05	上層部 上層部のみ	2.6 - 2.7 - 1.1 - 18.5g 100%	→ 2m埋石・黒石	貞 灰 NS/G	須恵系陶器
現 45-162 埋蔵 48	SA45	土師系 器	(15.0) - 2.6 - *	→ 4.5m埋石・クサリ溝	不 透明 7.5YR7/6	品 A
現 45-163 埋蔵 49	SA45	土師系 器	4.0 - (11.8) - 1.1			
現 45-164 埋蔵 48	SA45	土師系 瓶	(9.3) - 7.2 - 3.8 - 335g	99%		
現 46-165 埋蔵 49	SK70 埋蔵 49	土師系 器	14.0 - 2.0 - *	灰 → 2m埋石・黒石・クサリ溝・器台	貞 透明 7.5YR7/6	群 A Ⅱ中・前 内面黒点・灰点付
現 46-166 埋蔵 49	SK70 埋蔵 49	土師系 器	14.9 - 3.4 - *	灰 → 1m埋石・黒石・クサリ溝	貞 透明 2.5Y7/3	群 A 表面黒点
現 46-167 埋蔵 49	SK70 埋蔵 49	土師系 瓶	15.6 - 4.4 - 8.3	80% → 1m埋石・器台	貞 透明 10YR7/3	A 類 表面黒点・前
現 46-168 埋蔵 49	SK70 埋蔵 49	土師系 器	(20.5) - 5.4 - *	20% → 1m埋石・黒石・クサリ溝	貞 透明 5YR7/8	群 A 表面黒点
現 46-169 埋蔵 49	SK70 埋蔵 49	土師系 器	(27.0) - (10.1) - *	→ 3.5m埋石・黒石	貞 灰 NS/G	
現 46-170 埋蔵 50	SK70 埋蔵 49	土師系 器	(21.0) - (6.0) - *	90% 上層部のみ 20% → 3m埋石・黒石	貞 透明 2.5YR6/8	
現 46-171 埋蔵 50	SK70 埋蔵 49	須恵系 器	* - (3.3) - (9.8)	→ 2.5m埋石・黒色釉	貞 灰 NS/G	
現 46-172 埋蔵 50	SK70 埋蔵 49	須恵系 器	(9.0) - 7.8 - *	灰 → 4m埋石・黒色釉	貞 灰 NS/G	品 C
現 46-173 埋蔵 50	SK70 埋蔵 49	土師系 器	28.0 - 31.4 - *	70% → 4m埋石・器台	貞 透明 5YR6/6	
現 46-174 埋蔵 50	SK70 埋蔵 49	土師系 器	(15.2) - (2.4) - *	10% → 埋石40%	貞 透明 2.5Y7/3	群 A 器台
現 46-175 埋蔵 51	SK70 埋蔵 51	土師系 器	* - (2.8) - *	→ 1m埋石・器台	貞 灰 NS/G	群 A 表面
現 46-176 埋蔵 51	SK70 埋蔵 51	土師系 器	(14.7) - 2.9 - *	20% → 埋石40%・クサリ溝	貞 灰 NS/G	群 A 表面
現 46-177 埋蔵 51	SK70 埋蔵 51	土師系 器	(16.6) - 2.0 - *	10% → 1m埋石・黒石・器台・クサリ溝	貞 灰 NS/G	群 A 器台
現 46-178 埋蔵 51	SK70 埋蔵 51	土師系 器	3.6 - (5.7) - 1.0			
現 46-179 埋蔵 51	SK70 埋蔵 51	土師系 器	* - (2.8) - *	→ 1m埋石・器台	貞 灰 NS/G	群 A
現 46-180 埋蔵 51	SK70 埋蔵 51	土師系 器	* - (1.5) - *	→ 1m埋石	貞 灰 NS/G	品 A
現 46-181 埋蔵 51	SK70 埋蔵 51	土師系 器	* - (3.3) - *	→ 埋石40%・黒石・器台	貞 灰 NS/G	内面黒点付
現 46-182 埋蔵 51	SK70 埋蔵 51	土師系 器	(9.0) - 1.1 - 0.6	→ 2m埋石・黒石・器台	貞 灰 NS/G	
現 52-183 埋蔵 52	SK25	埴土系 埴土	* - (4.1) - *	→ 4m埋石・器台	不 透明 白 2.5 Y 8/1	
現 52-184 埋蔵 52	SK25	土師系 器	* - (2.0) - *	→ 1m埋石・クサリ溝	貞 透明 7.5YR7/6	品 C 7

表 6 報告遺物一覧 (6)

調査 年度	出土遺物 番号	種別 分類	口径・直径・底径 (cm)	取手・素材	構成・色調	特記事項	
現 52 昭和 52	5205	土師器 皿	φ = (2.1) - *	泥 ~1mm 砂り練・焼小粒	黒 洗底粒 7.5 Y 8 6/6	図 C 7	
現 53 180 昭和 53	美濃小満	縄文土器 段鉢	φ = (6.4) - *	泥 焼面付	黒 ~1mm 炭石・底石・角切石・クワリ礫	洗底粒 7.5Y8/6	
現 53 187 昭和 53	美濃小満	埴輪 円筒埴輪	φ = (5.5) - *	中砂 少赤土	中砂 ~5mm 炭石・底石・クワリ礫	洗底粒 7.5Y8/6	
現 53 188 昭和 52	美濃小満	埴輪 動物形埴輪	φ = (7.5) - *	中砂 埴輪底付	中砂 ~4mm 炭石・底石	洗底粒 7.5Y8/6	
現 53 189 昭和 53	美濃小満	埴輪 円筒埴輪	口径 (7.1) - 1.6	中砂 埴輪底付	中砂 ~3mm 炭石・底石・クワリ礫	洗底粒 7.5Y8/6	
現 53 190 昭和 53	美濃小満	埴輪 円筒埴輪	口径 (9.7) - (8.0) - 1.5	中砂 埴輪底付	中砂 ~5mm 炭石・底石・クワリ礫	洗底粒 7.5Y8/6	
現 53 191 昭和 53	美濃小満	埴輪 段鉢	(4.7) - (4.3) - *	泥 焼面付	泥 ~3mm 炭石・底石・クワリ礫	洗底粒 7.5Y8/6	
現 53 192 昭和 53	美濃小満	灰土器 皿	(7.8) - 2.3 - *	泥 30%	泥 ~1mm 炭石・黒色粒	洗底粒 7.5Y8/6	
現 53 193 昭和 53	美濃小満	土師器 皿	φ = (1.3) - *	泥 焼面付	泥 ~1mm 炭石・底石・クワリ礫	洗底粒 7.5Y8/6	
現 53 194 昭和 53	美濃小満	土師器 皿	7.8 - 1.8 - *	泥 100%	泥 焼小粒	焼底 7.5Y8/6	
現 53 195 昭和 53	美濃小満	土師器 皿	(8.9) - 1.3 - *	中砂 泥	中砂 ~2mm 炭石・底石・クワリ礫	洗底粒 7.5Y8/6	
現 53 196 昭和 53	美濃小満	土師器 皿	(8.2) - 1.4 - *	10%以下	泥 ~1mm 炭石・底石・クワリ礫	洗底粒 7.5Y8/6	
現 53 197 昭和 53	美濃小満	土師器 皿	(9.3) - 1.5 - *	10%	中砂 ~1mm 炭石・底石・管母・クワリ礫	洗底粒 7.5Y8/6	
現 53 198 昭和 53	美濃小満	土師器 皿	(11.5) - (4.0) - *	20%	泥 ~1mm 炭石・クワリ礫	洗底粒 7.5Y8/6	
現 53 199 昭和 53	美濃小満	土師器 皿	φ = (1.6) - *	埴輪 埴輪底付	中砂 ~1mm 炭石・クワリ礫	中砂 洗底粒 7.5Y8/6	
現 53 200 昭和 54	美濃小満	土師器 皿	φ = (1.6) - *	泥 埴輪底付	泥 ~1mm 炭石・底石	洗底粒 7.5Y8/6	
現 53 201 昭和 54	美濃小満	土師器 皿	1.8 - 3.0 - *	50%	泥 ~1mm 炭石・底石	洗底粒 7.5Y8/6	
現 53 202 昭和 54	美濃小満	土師器 皿	(15.6) - 3.0 - *	10%	泥 ~1mm 炭石・底石・管母・クワリ礫	洗底粒 7.5Y8/6	
現 53 203 昭和 54	美濃小満	土師器 皿	φ = (4.2) - *	10%以下	中砂 ~2mm 炭石・底石・クワリ礫	洗底粒 7.5Y8/6	
現 53 204 昭和 54	美濃小満	灰土器 皿	φ = (5.9) - *	泥 土師器部分 80%	泥 ~1mm 炭石・黒色粒	洗底粒 7.5Y8/6	
現 53 205 昭和 54	美濃小満	瓦器 皿	13.0 - 4.3 - 4.9	100%	泥 焼小粒	焼底 7.5Y8/6	黒 8 黄
現 53 206 昭和 55	美濃小満	瓦器 皿	(13.0) - (3.3) - *	20%	泥 焼小粒	洗底粒 7.5Y8/6	黒 8 黄
現 53 207 昭和 55	美濃小満	瓦器 皿	φ = (1.2) - 4.3	泥 焼面部分 30%	泥 焼面部分 30%	洗底粒 7.5Y8/6	黒 8 黄
現 53 208 昭和 55	美濃小満	瓦器 皿	φ = (2.3) - *	泥 土師器底付	泥 焼小粒	洗底粒 7.5Y8/6	黒 8 黄
現 53 209 昭和 55	美濃小満	瓦器 皿	φ = (2.4) - *	泥 土師器底付	泥 焼面部分 30%	洗底粒 7.5Y8/6	黒 8 黄
現 53 210 昭和 55	美濃小満	瓦器 皿	φ = (1.8) - *	泥 土師器底付	泥 焼小粒	洗底粒 7.5Y8/6	黒 8 黄
現 53 211 昭和 55	美濃小満	瓦器 皿	φ = (1.0) - *	泥 焼面底付	泥 焼小粒	洗底粒 7.5Y8/6	黒 8 黄
現 53 212 昭和 55	美濃小満	土師器 段鉢	2.9 - (6.2) - 2.1	70%	泥 灰土・灰土器	洗底粒 7.5Y8/6	黒 8 黄
現 53 213 昭和 56	美濃小満	石器 石鏃	1.9 - 1.2 - 0.3 (0.7g)		中砂 中砂		
現 53 214 昭和 56	美濃小満	石器 石鏃	2.8 - 1.6 - 0.2 - 0.7g		中砂 中砂		
現 53 215 昭和 56	美濃小満	石器 石鏃	2.4 - 1.5 - 0.4 - 1.0g		中砂 中砂		
現 53 216 昭和 56	美濃小満	石器 石鏃	(1.9) - 1.6 - 0.2 - 0.3g		中砂 中砂		
現 54 217 昭和 56	佐治郷	灰土器 杯	(11.0) - (3.2) - *	10%	泥 ~2mm 炭石	洗底粒 7.5Y8/6	MT15
現 54 218 昭和 56	佐治郷	灰土器 杯	φ = (3.4) - *	泥 土師器底付	泥 ~1mm 炭石・黒色粒	洗底粒 7.5Y8/6	TK23 - TK47
現 54 219 昭和 56	佐治郷	瓦器 皿	8.1 - 4.4 - 1.1 - 42.0g		泥 焼小粒	洗底粒 7.5Y8/6	
現 54 220 昭和 56	佐治郷	石器 石鏃	2.4 - 1.3 - 0.3 (0.7g)		中砂 中砂		

表7 検出遺構および出土遺物一覧(1)

S-番号	遺構番号	種別	所在	出土遺物	地区
1		溝		須恵器(古代) 平皿	B95
2		土坑		瓦質土器破片、不明土製品	F46
3		ピット			F44
4		土坑		古式土器割片・破片、須恵器(古墳) 甕	X41
5		ピットあり		弥生土器・甕	V～W 46
6		ピット		古式土器割片	W39
7		土坑		古式土器割線	E947
8	SD8	溝		弥生土器鉢・甕、古式土器割線・破片、小型瓦葺き・破片、須恵器(古墳) 甕・甕・杯、土器製品、瓦瓦物	P～X25～46
008 瓦葺				古式土器割線・甕(5字)・高杯	
008 瓦葺				弥生土器鉢・甕、古式土器割線	
9	SD9	溝	B12 より古	弥生土器鉢・甕・破片、古式土器割線・甕・高杯・破片、須恵器(古墳) 甕、右器破片(サヌカイ土)、グリーンタフ、円筒埴輪	L～X47～19
010 前方				古式土器割線・鉢	
010 前方				縄文土器破片、古式土器割線・鉢・高杯、右器破片(サヌカイ土)	T～U46～47
010 後取				古式土器割線・甕・器台	
11	SD11	溝		古式土器割線・甕・高杯、須恵器(古墳) 甕・甕、右器破片(サヌカイ土)	L・M45・46
12	SD12	溝	940 より新	弥生土器鉢・甕、古式土器割線・甕・高杯・破片、土器器(古墳) 甕、須恵器(古墳) 甕・甕・高杯・杯身・杯蓋、右器破片(サヌカイ土)、円筒埴輪	K～N40～27
13	SK13	土坑		右器石丁	M65
14		溝			B43～E38
15	SD15	溝		弥生土器鉢、古式土器割線・高杯・破片、須恵器(古墳) 甕・高杯・杯身・杯蓋	S38～W31
16		溝		古式土器割線・甕	M・N36～39
17		土坑			M39～40
18	SK18	土坑		古式土器割片(二重口縁)、須恵器(古墳) 甕	O39～40
19		土坑			O～P37
20	SD20	溝		弥生土器台付鉢・鉢・器台・手廻り形土器、古式土器割線・甕・二重口縁鉢・小型瓦葺き・高杯	N～W46～29
21	SD21	溝		古式土器割線・甕・高杯、須恵器(古墳) 甕	O～R32～38
022b				須恵器(古代) 甕	
022b 後取	SR22	新0柱建物		土器器(～古代) 破片	W～X37
022b 後取				土器器(～古代) 破片	
022b 後取				土器器(～古代) 破片、須恵器(古代) 破片	
022b				弥生土器破片	
022c				古式土器割線・甕	
022d	SR23	新0柱建物		古式土器割線・鉢	W～X36～37
022e				古式土器割線	
022g				古式土器割線	
022e				古式土器割線	
024b 後取	SR24	新0柱建物		古式土器割線	W～X35～37
25	SK25	溝ち込み		縄文土器破片、古式土器割線、土器器(～古代) 破片、土器器(中世～) 甕	G～I46
26	SK26	土坑		土器器(～古代) 甕・甕・高杯、須恵器(古墳) 甕	V 34～35
27		ピット		土器器(～古代) 杯	V37～58
28	SD28	溝		弥生土器破片、古式土器割線、須恵器(古墳) 杯蓋	R～T38
29	SD29	溝		弥生土器鉢、古式土器割線・甕・高杯、須恵器(古墳) 甕・杯身・杯蓋	X32・33
30	SC30	方形周溝墓			D～G 44～46
31	SD31	溝			L・M38～41
32		溝		弥生土器鉢・甕	K・L38～42

表8 検出遺構および出土遺物一覧(2)

73

S-番号	遺構番号	種別	所見	出土遺物	地区
33		溝			E41-G-38
34		土坑		古式土師器高杯	G-34
35	SZ35	方形周溝墓		石器剣片(オマカイト)	F~H45~46
36		溝		弥生土器鉢、古式土師器壺	T-U37~38
37				弥生土器鉢・壺、古式土師器鉢・壺・壺(二重門扉)、小型丸底壺・高杯、須恵器(古墳)甕・壺・高杯、石製品剣片(オマカイト)・ブロンズ刀、円筒銅輪	
037 床裏掘削	SD37	溝		古式土師器鉢・剣片	N~Q19~38
037 青銅器				古式土師器鉢・壺	
037 銅製シルト				弥生土器鉢、古式土師器鉢・剣片	
38	SD38	溝		古式土師器剣片、須恵器(古墳)壺	W~X35~39
39		土坑		古式土師器鉢・壺・剣片	P33~34
40				古式土師器壺(二重門扉)	
040 東	SZ40	方形周溝墓		古式土師器鉢・壺・壺(二重門扉)	H~L43~47
040 西					
040 北				古式土師器鉢	
043a		構跡?	4~トにほぼ相俣現存 037に 移行する	古式土師器剣片	O33
42		溝	009と同様	弥生土器壺、古式土師器鉢・壺・高杯、石器剣片(オマカイト)	P29~33
43		高杯小溝		弥生土器鉢、古式土師器剣片、土師器(〜古代)杯・剣片、土師器(中世〜)皿、 須恵器(古墳)甕、瓦製碗、銅輪剣片	C19~40
44		高杯小溝		弥生土器剣片、土師器(〜古代)皿・剣片、土師器(中世〜)皿、黄色土器人形、 瓦器輪	C19~30
45	SE45	井戸		土師器(〜古代)皿、石製扇状石	Q37
46		高杯小溝		石器剣片	E19~47
47		高杯小溝		土師器(〜古代)剣片	C30~43
48		高杯小溝		土師器(〜古代)剣片	C19~44
49		高杯小溝		須恵器(古代)壺、瓦製碗	D24~27
050 ①	SZ50	方形周溝墓		弥生土器鉢・壺・鉢・高杯、古式土師器鉢、小型丸底壺、石器石杖(オマカイト)	T~X30~37
050 東				弥生土器鉢・壺	
050 西				弥生土器鉢、古式土師器鉢、高杯、石器剣片(オマカイト)	
050 南				弥生土器鉢	
050 北				弥生土器鉢・壺・壺(二重門扉)、古式土師器鉢、須恵器(古墳)壺	
51		高杯小溝		弥生土器剣片、土師器(〜古代)剣片	D~E19~46
52		高杯小溝		土師器(〜古代)剣片、須恵器(古墳)甕・杯身	D24~44
53		高杯小溝		土師器(〜古代)杯	F24~30
54		溝			T~U33
55	SZ55	方形周溝墓		古式土師器鉢・高杯、須恵器(古墳)杯身、円筒銅輪、陶製銅輪	W~X30~33
56		高杯小溝			M22~29
57		高杯小溝		弥生土器鉢・剣片、土師器(〜古代)杯、須恵器(古代)甕	N25~30
58		高杯小溝		土師器(〜古代)剣片	M26~28
59		高杯小溝		古式土師器剣片	M23~30
60				須恵器(古墳)剣片、形舟銅輪	
060 西	SZ55	方形周溝墓		古式土師器鉢、円筒銅輪	S~W27~33
060 北				弥生土器鉢、古式土師器鉢・壺・高杯、石器石杖(オマカイト)、円筒銅輪	
61		高杯小溝			M29~30
62		高杯小溝		土師器(〜古代)剣片	N~O29~32
63		高杯小溝		古式土師器鉢、土師器(〜古代)剣片、須恵器(古墳)甕	N28~32
64		高杯小溝		土師器(〜古代)剣片	N29~32

表9 塚出遺構および出土遺物一覧(3)

S-番号	遺構番号	種類	所在	出土遺物	地区
65	SK65	土坑	須磨郡	弥生土器細片、古式土器器身・高杯、須磨器(古墳) 甕・器台・杯・杯身・杯蓋、瓦器輪・土製品加工片類、漆の痕・内四角輪、埴輪	V-X28
66		高塚小墳		土器器(古墳) 甕・杯・細片	N28-32
67		溝		古式土器細片	X27-28
68		高塚小墳		古式土器細片、土器器(古墳) 細片、須磨器(古墳) 細片、瓦器輪	O29-O32
69		高塚小墳		土器器(古墳) 細片	N29-32
70				須磨器(古墳) 甕	
070 西見土	SE70	井戸	9米~10初	土器器(古墳) 杯・細片、須磨器(古墳) 甕・器・高杯、黒色土器A杯	
070 北西シルト				弥生土器器身・土器器(古墳) 甕・器・杯・高杯、土器器(中世-) 甕・目皿、須磨器(古墳) 甕・杯身、須磨器(古墳) 甕・器、黒色土器A杯・高杯、瓦器細片、木製品片(竹・楡、金属製品片、民化物)	O30-31
070 高塚砂				古式土器器身、土器器(古墳) 甕・細片、土器器(中世-) 細片、須磨器(古墳) 甕・器、黒色土器A杯	
71		高塚小墳		弥生土器細片、土器器(古墳) 細片、須磨器(古墳) 杯蓋	P26-O31
72		高塚小墳		土器器(古墳) 細片、黒色土器A細片、瓦器輪	O-P28-31
73		高塚小墳		土器器(古墳) 甕・器・細片、土器器(中世-) 甕、須磨器(古墳) 甕・杯蓋、瓦器輪、石器細片(ヤマカイ)、鏡片	
74				古式土器細片	O30-31
75	SK75	溝	037より古	弥生土器器、古式土器器身	N-P24-34
76		高塚小墳		古式土器器身・細片、土器器(古墳) 甕、土器器(中世-) 甕、須磨器(古墳) 甕・杯	
77		高塚小墳		弥生土器細片、土器器(古墳) 細片、須磨器(古墳) 甕	O19-30
78		溝			V-X26-28
79		土坑			W-X26-27
080a	SB80	竪石柱建物			V25-W26
080b					
080c					
080d			弥生土器細片、土器器(古墳) 細片		
080e			弥生土器器、土器器(古墳) 細片		
080f			古式土器器身		
080g 掘方					
080h					
080i					
080j					
080k 掘方					
080l	SB81	竪石柱建物			T25
080m			土器器(古墳) 甕		
82		高塚小墳		古式土器器身・細片、須磨器(古墳) 杯	T25-北
83		高塚小墳		古式土器器身・土器器(古墳) 細片、須磨器(古墳) 細片	T25-北
84		高塚小墳		古式土器器身、土器器(古墳) 細片、須磨器(古墳) 甕、須磨器(古墳) 甕・埴輪	S25-
85		土坑			V26
86		高塚小墳		弥生土器細片、古式土器器身、土器器(古墳) 杯、須磨器(古墳) 甕・器、須磨器(古墳) 甕、瓦器輪、埴輪	R25-
87		高塚小墳		古式土器器細片、土器器(古墳) 細片	O25-
88		高塚小墳		弥生土器器身、古式土器器身(鹿野厚孔)、土器器(古墳) 細片、須磨器(古墳) 甕、器	O25-
89		高塚小墳		古式土器器細片、土器器(古墳) 杯・細片、須磨器(古墳) 甕、器	
90		溝(込み)		弥生土器細片、古式土器器身・高杯、須磨器(古墳) 甕・器・杯身・杯蓋・器台、石器細片(ヤマカイ)、河内輪	W-X28-30
91		高塚小墳		弥生土器器細片、土器器(古墳) 甕、須磨器(古墳) 細片	24イシ
92		土坑		土器器(古墳) 細片、黒色土器A細片	O25-
93		高塚小墳		弥生土器器細片	O77より左
94		高塚小墳			O87より右

表 10 検出遺構および出土遺物一覧 (4)

S - 番号	遺構番号	種別	所在	出土遺物	地区
95		高形小溝		弥生土器群、土器群 (~ 古代) 鏝・杯、須恵器 (古墳) 鏝、須恵器 (古代) 杯蓋	L - Y22
96		高形小溝		古式土器群細片、土器群 (中世-) 細片、	086 より右
97		高形小溝		石製石籠	T24 - 25
98		高形小溝		須恵器 (古墳) 鏝、円筒形輪	U23 ~ 26
99		高形小溝			U22 ~ 26
100	52100	方形周溝墓		古式土器群付随器、須恵器 (古墳) 鏝、杯蓋、石製細片 (ツマカエド)、石製器具孔、陶製視作物	G22 ~ W23
101		高形小溝		古式土器群細片	U25 + 26
102		高形小溝		古式土器群細片、土器群 (~ 古代) 細片、須恵器 (古墳) 鏝、石製石籠	
103		高形小溝		土器群 (~ 古代) 細片	U26 + 27
104		高形小溝		弥生土器細片、須恵器 (古墳) 附付	X25 ~
105	54105	井戸	008 底面で検出	弥生土器布、網鉢	U27
106		高形小溝		土器群 (~ 古代) 細片	X25 ~
107		高形小溝		土器群 (~ 古代) 細片、土器群 (中世-) 鏝	X25 ~
108		高形小溝		古式土器群細片	W25 ~
109		高形小溝		古式土器群鏝・細片	W25 ~
110a 階段	5B110	欄干柱建物		古式土器群鏝 古式土器群鏝 古式土器群細片、土器群 (~ 古代) 細片	N27 ~ P20
110b 掘方					
110c 柱礎					
110f 掘方					
110g 柱礎					
110h 掘方					
110i 柱礎					
111		高形小溝		弥生土器細片、土器群 (~ 古代) 細片、須恵器 (古墳) 鏝、布	W25 ~
112		高形小溝			W23 ~
113		高形小溝			W25 ~
114		高形小溝		土器群 (中世-) 細片、黒色土器A 杯、瓦器類	R25 ~
115	5A115	欄干			P26 ~ 27
116		高形小溝		弥生土器高杯、土器群 (~ 古代) 鏝・細片、土器群 (中世-) 鏝、須恵器 (古墳) 鏝、黒色土器高杯、瓦器類	O19 ~ 23
117		高形小溝		土器群 (~ 古代) 鏝・杯・細片、須恵器 (古墳) 杯蓋	N25 ~
118		高形小溝		古式土器群細片、土器群 (~ 古代) 鏝・細片、須恵器 (古墳) 鏝、瓦器類、鉄片	N25 ~
119		高形小溝		弥生土器細片、古式土器群細片、土器群 (~ 古代) 杯・細片、須恵器 (古代) 鏝	O25 ~
120	5K120	土坑	掘穿 (西)		U ~ Y23
121		高形小溝		土器群 (~ 古代) 細片、須恵器 (古墳) 細片	P23 + 26
122		高形小溝		土器群 (~ 古代) 杯・細片	P19 ~ 25
123		高形小溝		古式土器群細片、土器群 (~ 古代) 細片、須恵器 (古墳) 鏝・布、瓦器類	P19 ~ 26
124		高形小溝		古式土器群鏝、土器群 (~ 古代) 杯	O19 ~ 21
125a 掘方	5A125	欄干	高形小溝下層	土器群 (~ 古代) 細片	S + 24 + 25
125c 掘方					
126		高形小溝		弥生土器群、土器群 (~ 古代) 細片、須恵器 (古墳) 鏝、黒色土器A 杯	N + O19 ~ 26
127		高形小溝		弥生土器細片、須恵器 (古墳) 細片	O - R19 - 20
128		高形小溝		弥生土器細片	M ~ P21
129		高形小溝		弥生土器細片、須恵器 (古墳) 杯蓋	
130	5D130	溝		土器群 (~ 古代) 細片、須恵器 (古代) 細片	R24 ~ T27
131		高形小溝		弥生土器群、古式土器群鏝・布、土器群 (~ 古代) 細片	P23 ~ 26
132	欠 番				

表11 検出遺構および出土遺物一覧(5)

S-番号	遺構番号	種別	所在	出土遺物	地区
133		高麗小溝		土師器(～古代) 銅片	Q23～26
134		高麗小溝		弥生土師銅片	V23
135		溝		弥生土師銅片	S22～T25
136		溝		弥生土師銅片	U23
137		高麗小溝		縄文土師銅片、弥生土師器、土師器(～古代) 銅片、石部石鏡	W13～19
138		高麗小溝		弥生土師銅片、土師器(～古代) 杯、銅片、銅器器(古代) 鏃・鏃・棒	X15～20
139		高麗小溝		古式土師銅片、瓦器類	X17～19
140	SD140	溝	009より分岐	土師器(～古代) 銅片、石部銅片	V25～X25
141		高麗小溝		土師器(～古代) 杯、銅器器(古墳) 鏃	X15～19
142		高麗小溝		土師器(～古代) 銅片	X15～19
143		高麗小溝		銅器器(古墳) 鏃	X15+16
144		高麗小溝		土師器(～古代) 銅片、銅器器(古代) 棒	W+X16+17
145		柱穴	単基	硬貨物	U25
146		高麗小溝		土師器(～古代) 銅片	W+X16
147		高麗小溝		弥生土師銅片、土師器(～古代) 銅片	W+X15
148		高麗小溝		古式土師銅片	V15～21
149		高麗小溝		古式土師銅片、土師器(～古代) 杯	
150	SD150	溝	037より分岐 130土遺構	弥生土師器、銅片、銅器器(古墳) 鏃	Q25～
151		高麗小溝		弥生土師銅片	D19～23
152		高麗小溝		銅器器(古代) 銅片	D19
153		高麗小溝		土師器(～古代) 銅片	D19～30
154		高麗小溝		土師器(～古代) 銅片	D19～23
155		溝		銅器器(古墳) 銅片、瓦製銅片	X15
156		高麗小溝		土師器(～古代) 銅片	X17+18
157		高麗小溝		弥生土師銅片、土師器(～古代) 銅片、銅器器(古墳) 棒、瓦器類	X16～19
158		高麗小溝		土師器(～古代) 銅片	W15～17
159		溝		古式土師銅片、高杯	R31～S31
160		土坑	埋土 109R41(稲沢) 少 61～埋砂	銅器器(古墳) 器台	P35～Q36
161		高麗小溝		弥生土師銅片、土師器(～古代) 銅片、銅器器(古墳) 鏃	N～Q24
162		高麗小溝		土師器(～古代) 銅片、銅器器(古代) 銅片	Q23
163		高麗小溝			R19～23
164		高麗小溝		弥生土師器、銅器器(古代) 銅片	
165		溝	130と009を結ぶ	古式土師銅片	T26～27
166		高麗小溝		土師器(～古代) 銅片、銅器器(古代) 棒	
167		高麗小溝			
168		高麗小溝		古式土師銅片、銅器器(古墳) 鏃・器台	R19～26
169		高麗小溝			R19～22
170		溝			R27～Q29
171		高麗小溝		弥生土師銅片、銅器器(古墳) 鏃	S19～28
172		高麗小溝			S19～26
173		高麗小溝		縄文土師銅片	
174		高麗小溝		土師器(～古代) 銅片	
175	Σ100	方形埋溝基		古式土師銅片、銅器器(古墳) 鏃・棒、骨?	U～X16～21
176		高麗小溝		古式土師銅片	U+V22～29
177		高麗小溝		土師器(～古代) 銅片、瓦器類	Q23～26
178		高麗小溝		弥生土師銅片、銅器器(古墳) 銅片、瓦器類	L21～27
179		高麗小溝	埋砂瓦器類出土	土師器(中層→) 鏃、褐色土師器銅片、瓦器類	L19～33

表 12 検出遺構および出土遺物一覧 (6)

S-番号	遺構番号	種別	所在	出土遺物	地区
180		落ち込点		瓦器類片	W10 ~ X12
181		高瀬小溝		古式土師器杯・細片、瓦器類片	K19 ~ 20
182		高瀬小溝		土師器 (中世→) 皿、瓦器類	J19 ~ 24
183		高瀬小溝			
184		高瀬小溝		弥生土師器片	U15 ~ 16
185		溝			W5 ~ 16
186		高瀬小溝		弥生土師器、古式土師器類、土師器 (→古代) 甕	U28 ~ 23
187		高瀬小溝		縄文土器深鉢、須恵器 (古墳) 甕	Q21 ~ 24
188		高瀬小溝		土師器 (→古代) 杯	N19 ~ 22
189		高瀬小溝			N19 ~ 24
190		土坑			U15 ~ 16
191		高瀬小溝		弥生土師器片	S20 ~ 24
192		高瀬小溝		土師器 (中世→) 皿	M・N21 ~ 24
193		高瀬小溝			M・N19 ~ 22
194		高瀬小溝		須恵器 (古墳) 杯、瓦器類片	M19 ~ 24
195		土坑			X15 ~ 16
196		高瀬小溝		弥生土師器片、須恵器 (古墳) 細片	M19 ~ 22
197		高瀬小溝			M19 ~ 22
198		高瀬小溝			K22 ~ 25
199		高瀬小溝		瓦	H25
200		溝			W6 ~ 17
201		高瀬小溝		石器石鏃	C 25 ~ 30
202		高瀬小溝		土師器 (→古代) 細片	F24 ~ 34
203		高瀬小溝		土師器 (中世→) 皿・細片	X3 ~ 5
204		ビット	検出層 埋土 2.5Y4/1 シルト層		X7
205				弥生土師器・甕	F・Q24・25
206		高瀬小溝			W 16
207		高瀬小溝		弥生土師器片	V26 ~ 30
208		高瀬小溝			E・F23 ~ 30
209		高瀬小溝		土師器 (→古代) 杯	U19 ~ 20
210			IV期4/1 (殿共) 粗砂・細礫層の埋砂	弥生土師器	R・S28・29
211		高瀬小溝		土師器 (→古代) 杯 A	K19 ~ 29
212		高瀬小溝		土師器 (中世→) 皿	K22 ~ 24
213		高瀬小溝		縄文土師器片、土師器 (→古代) 細片、瓦器類、平瓦	L21 ~ 25
214		高瀬小溝		土師器 (→古代) 皿	I・M23
215	SD215	溝	Q29より古	古式土師器類・甕・高杯・器台	X32 ~ 33
216		高瀬小溝		土師器 (→古代) 甕・杯	M21 ~ 25
217		高瀬小溝		土師器 (中世→) 細片、瓦器類	W2 ~ 7
218		高瀬小溝		古式土師器類片	
219		高瀬小溝		古式土師器類、土師器 (→古代) 細片、須恵器 (古墳) 杯	W・X13・14
220		土坑	埋土 1層 2.5Y4/2 (埋戻土) 粗砂層シルト層	弥生土師器、須恵器 (古墳) 杯身	V25
221		高瀬小溝		土師器 (中世→) 皿	W・X13
222		高瀬小溝		古式土師器類片、須恵器 (古墳) 甕・杯蓋、須恵器 (古代) 甕	W・X13
223		高瀬小溝		弥生土師器片、土師器 (→古代) 細片、須恵器 (古墳) 甕、須恵器 (古代) 杯	X3 ~ 13
224		高瀬小溝		古式土師器類片、須恵器 (古墳) 杯蓋、雑土塊	W・X9 ~ 13



## 写真図版

※選物写真の番号は報告番号に対応





調査区全景（上が北）

図版 2



調査区南東部全景 (北から)



SZ30・35・40 全景 (南から)

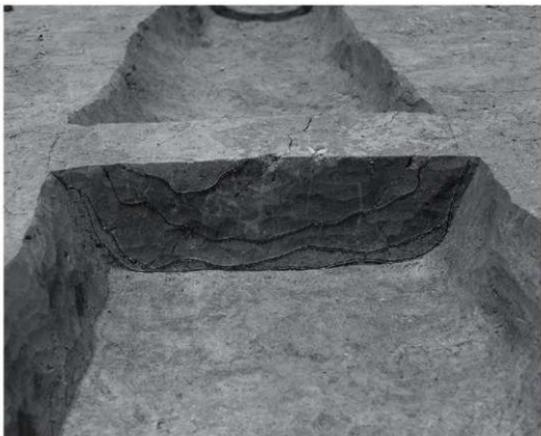


SZ30 北満土層断面 (西から)



SZ35 北満土層断面 (東から)

図版 4



SZ40 南溝土層断面 (東から)



SZ50・SB23・24 全景 (北東から)



SZ50 東溝土層断面 (南から)



SZ50 南溝土層断面 (東から)

図版 6



SZ50 北溝土層断面 (東から)



SZ50 遺物出土状況 (南から)



S10 柱穴・壁溝完備状況 (南から)



S10 貼床土層断面 (南から)